特13
511

W亞23205/22

有無無罪序

罪を斷ずるは證左に憑るとは明治政府の法典にありといへとも其證左の較著あるものに於ては尋常俗吏の輩も力を勞せずして其獄を斷ずべし若し犯跡の糢糊として捕捉す可からざるものに至ては何を以て其罪の有無を辨ずるを得んや是則明法良吏の最も苦心焦思する所なり古人曰罪の疑しきは之れ輕すと此言善しと雖も亦叨りに施すへからす刑の輕きは小人の不幸にして君子の幸なり是を以て大に國政に害あり故に法官百方其罪の有無を究め頗る疑似の跡あるも其

依る所を視其安んする所を察し然して後始て此言に則とるべし今此書を讀んで大に感する所あり前に謂ある尋常俗吏の輩をして此の如き疑獄を斷せしめは有罪と決せん事必多り然れとも良吏の慧眼其事跡と情思とを熟視し是に於て其無罪なるを斷す此獄や素より著者の構造に出るものと雖も今日に於て絶て無しと云ふ可からす苟を法を學び律を講するのもの一讀せは必を得る所あらん

明治己丑仲冬上浣

兆民居士撰

凡例

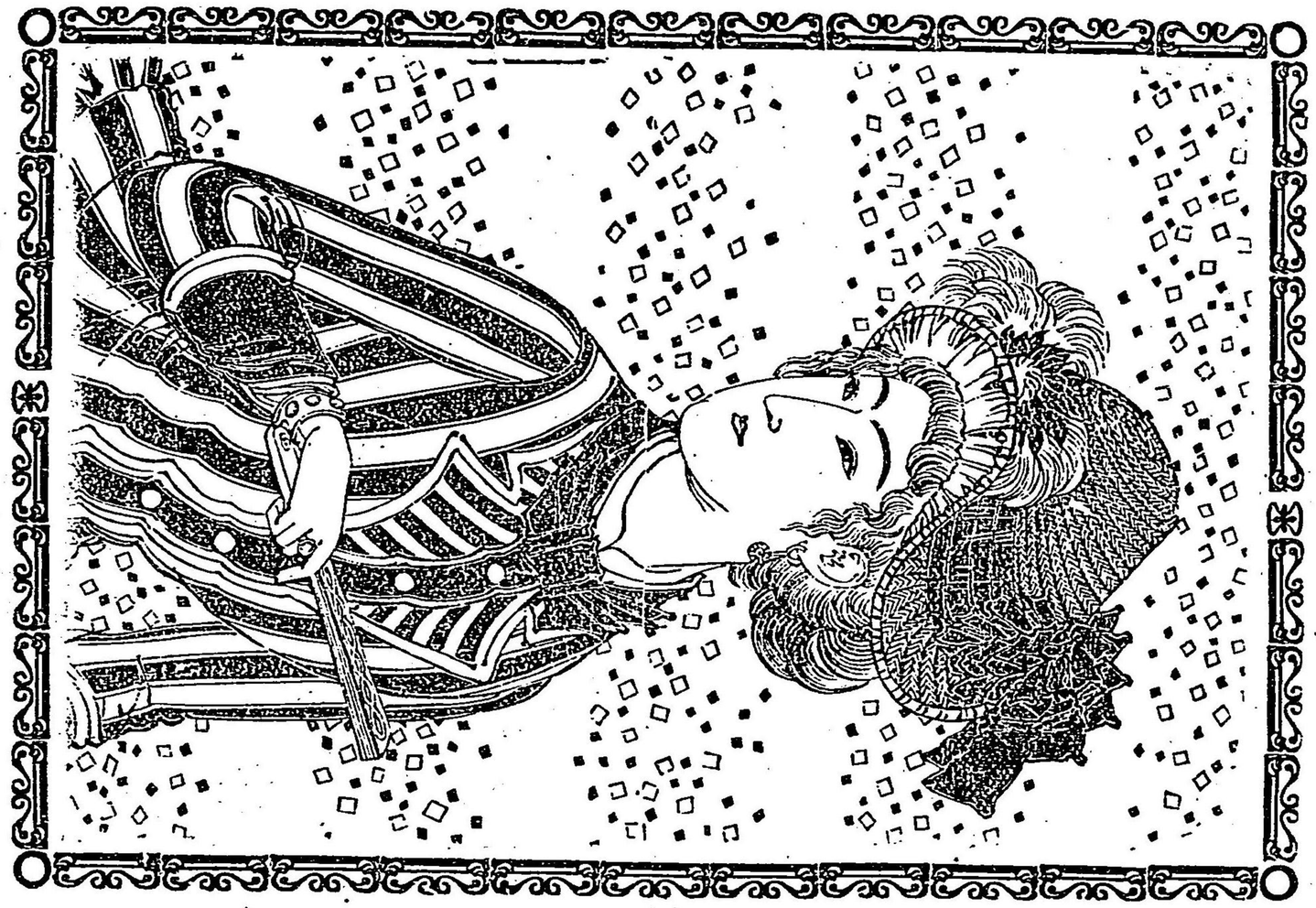
一此篇は西洋の原書を譯す者おれども土地の名及び人の名等ハ讀む人の爲め記臆し難ければ殊更らに我國ハ人名及び地名に似寄りたる文字を用ゐる者とす然れども其全躰の仕組を翻へし我國の事柄の如く作り直す事は小史の好まざる所なるを以て事柄は矢張原書の儘を寫し出す者あり

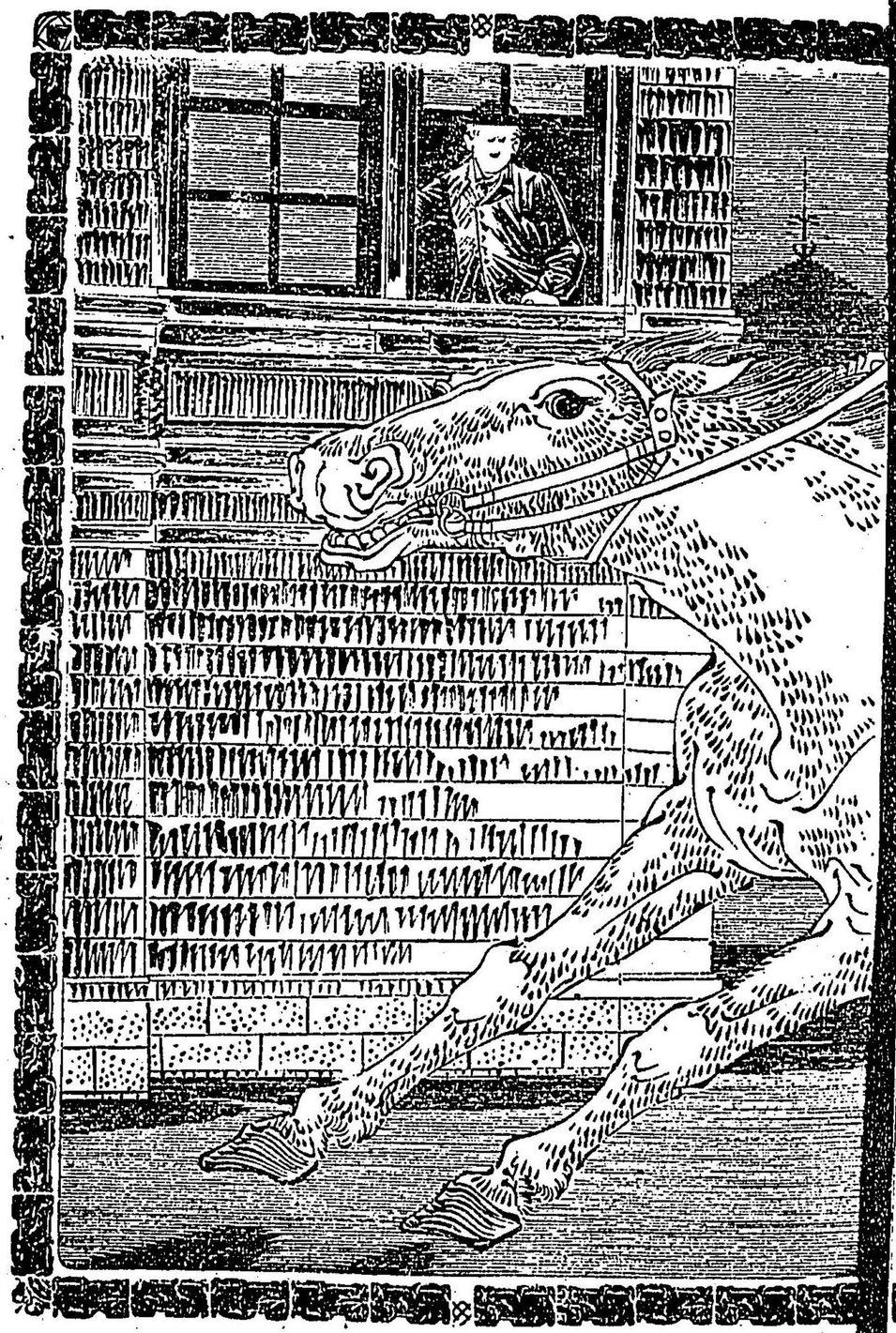
一此事柄の在りたる地ハソルベチユーア(澤部町と譯す)と稱し佛國の都巴里府を去る遠からざる驛所なり之を我東京に譬へおば浦和の如き所と思はゞ適當ある可し

一此篇は或る犯罪の露見より説起し其原因を尋ね其罪を糺すまでの事を記し為る者あれば則ち西洋ふて探偵小説(デテクチヴ、ストーリー)と稱する者の類なり其主意は唯だ人間裁判の難き事を示し法律家が濫りに法律を使用ふて轍く人乃罪を定んとするの非なるを知らしむるに在るなり、法律家の証據と見做す者未だ必ずしも証據なりと云ふ可らず輕々しく証據を信じて無罪の人を罪とするが如きは往々有り勝の事なれば此書を讀む者若し自ら省みて法律の苟くも適用す可らず人の罪の苟しくも判決す可からざるとを知らば譯者の幸ひ何者か之に過ぎん

一原書は讀む人に充分の面白味を與へんとて筆を取りたる者あれば其文巧みにして神泣き鬼哭すと云ふも不可おき所多かれど譯者は元來文章に拙おれば敢て文を飾らんとは努めず唯だ其事柄の能く讀者に分るとを專一として筆を取るなり讀者乞ふ文章を見ずして其事柄を見よ、譯者は文を示さんとする者に非ずして唯だ其事柄だけを知らしめんと欲する者なるぞ

明治二十一年九月初旬





特13
511

有罪無罪

第一章

涙香小史譯

區長仙田長禮（原名。ヒンデス、チヨール）○貴族黒戸伯（原名。クロデウス）○警察長富地（原名。トーミジョン）○豫審判事輕錢（原名。ガルピン）○地名澤部町（原名。サルベチユア）○春邊村（原名。ハルピンソン）

千八百七十年とは吾國の明治三年に當る歳にして則ち佛國が獨逸の兵に攻られ巴里の都をまでも攻落されさる時なり此翌年と云へば我明治四年の事なる可し七月二十二日の夜十二時を過ぎ孰れの家も寢鎖まりたる頃無整馬に打乘り此町を矢の如く馳せ行く一人の農夫あり其蹄の音は都なる町の甃石を踏鳴して物凄く響き渡れば眠れる人々を目を覺し時ならぬ此の足音何事あるかと店の窓より首を出し見るに件の農夫は早や十町も先に在りて唯ゞ其一散に馳せ行く音を聞くのみ姿は月明りにも認め得ざれば人々は定免し近在に何か事ありて百性の之を區長に注進する者あらんと推したり、頓て此農夫ハ區長仙田長禮が家の前ゆ

至り馬より飛りて遽だしく玄關の鈴を引鳴らし「區長さんにお目に掛り度うムいます區長さんゐ〳〵」と呼覺そに區長も其言葉附の最騷ぎしきゐ早くも尋常にハ非じと察し自ら手燭を取りて玄關の戸を開き　仙「區長仙田とハ已の事だが全躰何事だ　農「大變です大變な火事です早く蒸汽ポンプの差立を願ひまそ　仙「火事とハ何所だ何ぢ燒て居るのだ」農夫ハ氣を燥ち「家も倉も殘らず燒て居ます」此大風でそゝら早くせねば其中に燒て仕舞ひまそ　仙「シテ誰の家倉が燒けて居のだ　農「春邊村の別莊が」春邊村の別莊と聞き區長は顏の色を替へゝより抑も此別莊と云へるは此土地にて誰れ知らぬ者ハ無き人望家貴族黑戸伯の住家にして殊ゐ仙田長禮は黑戸伯と一方あら必親しき間柄あれば斯くハ驚きしあり　仙「ナニ春邊村の別莊ぢ燒て居る　農「ハイ黑戸伯の住家ぢ今燒けて居りまそ　仙「夫あら爾と何故早く言あいーヨシ〳〵直に已ぢ消防組の者ゑ引連て出張るから其方ハ直樣歸ッて伯爵ゐ爾申して呉　農「私しハ未ぐそゝら醫者を呼に行ねゞなりま務んから直歸るとハ出來ません」仙田ハ其言葉怪しみて「ナニ醫者とナ、夫でハ誰か怪我でも仕るか　農「伯爵が大怪我を爲されました　仙「夫ハ爾以て大變ぐ、日頃物に騷がぬ伯爵が怪我をするとは餘程周章てたと見へ

るナ　農「ナニ周章たでは有りません鐵砲で打れましたので、而も二發續ゐ玉に」仙田ハ手に持てる手燭を取落さんとそる迄ゐ打驚き「誰ぢ伯爵を狙撃した、失敬ゐ奴じや　農「誰だか分りませんが何でそ伯爵を殺すゝ必に火を附けゝ者ぢと申します私しぢ來る時伯爵は屋敷の外の小屋迄連れられ介抱を受けて居ましたぢ全で血塗れに成て居ました仙田は眉を顰めあゝら「夫は實以て容易あらぬ譯じや、全躰伯爵は隨分荒い氣象では有れど物事惠み深い人で他人から恨みを受けるゐと云ふ事ハ決して無い筈ぢ夫ゑ奥方とても其通り澤邊町第一の慈善家と云はれ日頃貴婦人の手本とまでに評說されて居る方ざからハテゐ誰が伯爵を殺しに掛ッたか、家まで燒ゑとは一通りの遺恨とは思はれぬ、ヨシ〳〵已は直ゐ之から檢事長と判事の家に行き二人と共に出張して先づ卽坐に悪人の穿鑿にも取掛らせるゝら其方ゑ疾く言附ッて來た用事をせそ」是にて仙田長禮ゑ農夫を歸し早くも使ひを消防組の屯所に遣はし身は夫々の仕度を整のへ馬に跨りて急ゑしく家を立出で警察長富地及び豫審判事輕篏の兩人を伴ゐ春邊村指して馬の足を急ぢせり

○伯爵の夫人梅姿（原名ハ ホイス）○田澤家（原名タサース）○醫者關登（原名セグノポス）

茲に、先づ黒田伯爵が履歴の概畧找記さんに伯は佛國にて血統正しき貴族黒戸家の嫡流にして今ゝ其年六十に近き人なるど十八歳の時初めて海軍の下士官と爲り追々進みて四十三歳の時は既に海軍中將にまで擧られしを何か思ふ所やありけん四十五歳の春俄かに辭表を出し冠を掛けて鄉里ある春邊村に歸りたり此頃まで伯は妻を娶らず獨身にて暮し居たるが鄉に歸りてより二年を經初めて今の夫人を娶りゐり此時伯は四十七歳にして夫人ゝ僅に二十歳ありければ世の口善惡なき輩ゝ樣々の噂を爲し夫人ゝ其顏形醜くして他に緣附くと叶ゝざるより年老ひたる伯爵と婚禮の約束をせし者ならんと云ふも有り否とよ夫人か父ゝ貧き人なる故生活むきの都合を計りて伯爵の妻と爲せしなりなど云ふも有りさり去れど夫人ゝ誰あらふ佛國貴族中の物持と聞へたる田澤家の長女にして其婚姻の時あども十五万圓の賜與物を伯爵ゐ送りし程あれば生計向の都合などとゝ思ひも由らぎ又夫人ゝ其名を梅姿と呼び世にも稀れなる美人と聞へ引手數多の令孃ありし故外に緣附く所をしあどとは是を所由なる妃癖言なり去るゐてを所夫の年二十七も上あるゝ宛も其父と云ふも耻しからぬ程にして世に其例し少あければ疑れにするも此婚禮にゝ深き仔細ぞあらんと猶ほ密々に語り合ふ

人々も有りつれど全く左に在らで唯だ伯爵ゝ梅姿嬢を愛するゐ爲めに妻とし迎へ梅姿嬢も亦伯爵を愛そるが故ゐ夫と去仕ふるの約束を爲せし者と見へ其睦ましさと言ゝん方なく婚姻してより四五年の中ゐ二人の娘をさへ擧けて此夫人こそ實ゐ貞女の鑑ぞどまでに敬はれ貴婦人慈善會及び婦人貞節會などの會長に擬ばるゝほどの身と爲りぬ、伯爵と云む夫人と云ひ斯る譽れ高き身の上なれべ、人より恨まるゝ事の有る筈なきゐ此度其家を燒き殊に二度まで伯爵を狙撃し者ありとは抑も何人の仕業あるゐ、夫は扨置き澤部町の區長仙田長禮は警察長富地及び豫審判事輕袈の兩人と共に馬を馳せて春邊村に向むしが村は町より凡そ三里を隔て其間に小山も有れば漸く伯爵の別莊に着きたるは夜の三時過ありし左しもに高樓大廈とて火ゝ猶ほ益々猛りて鎭まる樣子も有らざれど消防組も既に來りて其消しとめに力を盡す折あれば三人は火の事には心も留めぎ直に伯爵を移し有る淨房の如き小屋に進み入りしが茲にゝ既ゐ先程の農夫ゐ迎へ來さる澤部町れ醫者關登と云ふ者來り居て伯爵を隅れ方ある寐室に横ゝらせ頻ゐ其疵所を檢めおれり其傍らに在りて燈光を手に持ち醫師の眼に瞬じ右左に動かせるむ是あん伯爵夫人あり三人ゝ其容貌の麗しき中に充分の心配を包み

所夫の痛さを身に引受け看病の勞を取る有樣を見て坐に酸鼻な思ひを爲し過み兼ねて見へさるゐ寐臺の上なる伯爵は苦痛の中にも目早く仙田長禮の姿を見とめ 伯「ア、仙田さん能く來て下さッさ先ズッと此方へ」と挨拶せり三人ハ之を機に其傍らへ近く寄るに伯爵ハ疵の痛みを推隱し强て笑ひを顏に浮べ「イヤ最ふ今年は拙者の爲め極廻りゐ惡いと見へ此覽の通り此躰爲くで今まで家に鎖ッて有さ寶物の類も明朝までには一握りの灰に成て仕舞ふざらう」仙田は之を愍めんとて「誠ゐ早やゐ見舞いの申しやうも無きゐ災難でハ有りますれど其通りお心の確なのハ夫人の身に取りても不幸中の幸ひでー 伯「爾で無いテ、心が確なざけ痛を覺へるとも强い道理、一層夢中で居さ方が勝かも知れぬ、何でも彈が身躰に籠ッて居ると云ゐ事で夫を今一々拾ひ出して居るが勿々痛くてー何ふも」醫者ハ此言葉を聞き「イヤお痛くば茲に麻藥ゐ有りますがー 伯「ナニ夫には及ばぬ一度でも士官の肩書を持た者が醫者の道具位を恐れたと云ハれても海軍の面目にゐ拘ハるからナア 醫「でハ成る可くお靜かに成されませ今動いさり又口なとを聞けバ益々痛みにゐ障ります」と愛想も無く言ひ附くるハ是も醫家の職掌あるべし三人ハ無言の儘にて控居る中醫者ハ道具を傍ゐ置き「先づ之で一休み致しませう餘り長く續けてゐ惡ふムいます」とて一息つきたをば仙田は之ゐ向ひ「實ハ關君今夜吾々の茲へ來さるのハ見舞の爲めでハ無く職務の爲めゐ來たのだゐ、既に伯爵を害した者ゐ有るとして見れば飽くまでも其罪人ゐ見出さねばならぬじや就てハ伯爵がお氣の確かなのを幸ひ、親しく伯爵に就て少し問ひ度ゐ問ふて好らうか」と言はれて醫者ハ頭を傾け「左樣さ子エー醫學上から云へば成るべく其樣な事を問はぜ人の心を靜かにさせて置くが好いけれどー」とて確と返事をせぬ中に伯爵は寐臺の中より「イヤ何の樣な事でも問ふゐ善ひ問答をする位で別に重くある程の疵でも無いから、サ安心しておお問ひなされ」

第二章

○伯爵の二女雅子（原名バーサ）

「サア安心しておお問ひなされ」と伯爵自らの言葉を聞くをり豫審判事輕箕ハ人々に會釋して早や其枕頭に寄らんとするゐ醫師關登と之を見兼ね「イヤ伯爵が彼ア仰しやッても眞目お事の問答あるハ身躰に善く無いから成る可く明日か明後日まで延して貰ひ度い全躰伯爵

の玩ん獵に用ふる散彈で打れゐるもので其彈が散々に成て肉の中へ這入ッて居る故早々拔取ねバ肉ゞ其彈を包んで仕舞ひ容易に取除ク事が出來なをある、夫に由ッて拙者の療治は非常に急ぐで居るけれど魔藥も用ひぬ事ゆゑ永を續けては能を無いから夫で暫ク休息をせて有るのゞ然るに其休息の時間を濫に君に潰をれては甚ゞ迷惑するゞー」とて「濫りゐ」の一句に殊更ら力を込めて云ひゐて個は素より醫者の職務にて斯を云ふ事當然なをと元來關登と輕錢と ん知り合ゐる間柄あれど其氣質の異あるをり互に夫と無を嫉を合ふ意味も有る に由り輕錢ん關ゞ殊更らに我が職務を妨げるのでと無きかを思ひしゞ「イヤ拙者は決して濫りに休息の時間を潰そのでん無い法律れ名を以て問ぬ可き事を問ふまでゞ」と少し役目を傘に着る樣な風にて遁込めんとそれば關登ん一歩を讓らず「イヤ病人の事は法律をりを拙者の方が能を存じて居る 輕「イヤ拙者ん病人を大切と思はぬでは無いが、今病人自ら問ふて善いと云ッゞから問て試ようと云ふのだ若し拙者が今何ふしてを問はねばあらぬと云へば君は何ふ成さる」と益々寡らんとする其言葉を傍ふ聞き居る老練の富地警察長は聞き兼しか「イヤ輕錢氏、君ん餘り職務に熱心過るよ、兎ゐ角十分とか十五分とか時間を限ッて成る可を手短か久問ふが好ん」と何方も附かずの裁判に輕錢は爭ふようも無ク「ナニ十分間で澤山です」と云むゐゞら伯爵の枕頭に進み「伯爵、貴方ん若し御氣分ゞ惡をて私しの問ふ事に一々返事の出來ないようゐ事と有りませんか 伯「大丈夫、其樣な事ん無い 輕「夫では今夜の悲む可き事件の顚末を一通りお聞せ下をい 伯「聞せるゞ私も自分で十分に知らぬ程ゞから御邊が聞ても夫で以て本統の罪人を見出す事は出來まいテ、時間は確かに覺ゐぬけれを何でも今夜の十一時頃ゞッた私が寢床ゑ入ッて燈を吸消し眠るとも無ク醒るとも無をウト〳〵して居る時不意に寢間の窓がパッと明るを成た、現なゞ程にハテ變だと思ふ中に、物ゞ燒落る樣を音ゞしたから吃驚して初めて目ゞ覺め偖は此家が燒て居るナと思ひ其儘跳起きて椽側に出たが間章て居た爲か急に戸ゞ明かぬのをカタ〳〵言わせてやッと引明け庭へ出ようとをる時私は目の前で鐵砲の樣ゐ音がして夫と一所に我右の横腹ゐ非常の痛さを覺ゐゐゞー」此時輕錢ん言葉を入れ「伯爵、貴方のお言葉ハ充分に分ッて居ますゞ猶念の爲に伺ひまを、貴方が其戸を明け外ゐ出ようとて閾を跨た時直磯貴方、は撃射れゐに相異ありませんか 伯「左樣 輕「夫では其癖者は戸の外に隱れて待て居た者で卽ち貴方を外

迫呼出す爲ふ火を附けた者と見えまを　伯「私しも爾かと思ふ」輕錢ハ此返事を聞き振返り て富地ふ向ひ　輕「爾もると此事件ハ放火よりも人殺しが曲者の目的だ謀殺の爲めに放火ま たのざろら吾々も其氣に成て詮議せねば了ん」と云ふに富地は輕を頷首きさり輕錢は又も 伯爵に向ひ「夫から何ふ成されました　伯「イヤ私ど自分に是は打れたナと思ッたら己れ 曲者と一間半ばかり前へ進んざ、固より曲者の居る所は分らぬけれど大抵此邊だらうと思 ひ捕へる積りで進んだが其時又も二發目の鐵砲が聞え何でも首と肩の所を射れた樣な心持 がした、此二發目ハ初めの彈よりも腐へたと見え私ど其儘首がグラ〳〵して其所へ仆れて 後ハ一向に覺へざ無い　輕「貴方其曲者の姿をお見認めには成ませんでしさか　伯「夫がサ充 分には覺へぬけれど私ど仆れた時庭ふ積み有る薪の後から一人りの男ろ走り出で庭を横切 ッて畑の方へ行ッた樣な氣持がした　輕「其男の顏ふ見覺へざ有りますろ　伯「一向覺へが無 い　輕「デハ其男の衣類とか身躰の恰好ぞか何所ふ覺へハ有りませんろ　伯「其時既ふ目ざ眩 んで居さから少しも覺へが無い唯其姿かボンヤリと影の樣に見へた丈じや　輕「ナニ覺へが 無くぞも必ず吾々ざ其本人を探し出しますから安心あされませー夫か程何と致しました　伯

「夫ろら後の事は一向に覺へが無い、初めて氣の附ゐ時ふは既に此通り此寢室の上に寢て 醫者の手に掛ッて居た　輕「ある程ーですざ何ふしても其時の事情を明細に取紀さねばなり ません誰か知ッて居る者ざ有りますか　伯「拙者の女房ざ存じて居る　輕「成る程、御夫人は 貴方の飛び起きた時御一緒にお起なぞッさので有りませうナ　伯「イヤ女房ハ其時まざ寐床 にむ就かあんざ」輕錢は夫人の方に向き其衣容を見るふ昼の着物を其儘にて寐卷姿にあら されば　輕「ある程　伯「先達て中より季の娘雅子が痲疹で病いので女房は起きて雅子ざ寐て 居る傍に据り介抱に身を委ねて居さか、其の室は丁度奥庭を控へて居るから火事の出さ裏 庭の方は見えぬ故女房も鐵砲の音を聞くまで火事をへも知らぞに居た樣子じや　輕「御夫人 が初めて此事ふお氣が附さのは何時でムいます」此問ひを聞きて夫人はやをら輕錢の傍に 進み出たり

○愚人太太郎（原名コヽリウ）

判事の傍に進み出たる伯爵夫人ハ徐々に言葉を發き「所夫のヤまを通り私しは季の娘雅 子の傍に据ッて居ました昨夜も夜徹し起て居た程でムいますから十一時頃にハ徐々居眠を

初めまし為此時表の庭の方にて鐵砲の響きゞ聞へましたゆゑ急に目ゞ覺め何事らと耳を澄しまをと又も一發聞へましたから尋常では無いと思ひ直樣外へ走り出ましゝゞ此時既に表は一面の火と爲り其明りで所夫ゞ庭先に仆れて居るのを見ましゝゝら益々驚いて其傍に馳せ寄りましたゞ所夫は既に呼吸までを絶て居ました私しは誰れか早く來てお呉れと呼立てましゝれど暫しゞ程は誰も參りません其中に火い益々燃盛り終に近所の百姓どもが目を覺し飛で來て其有樣を見直樣私しを助けて共々に所夫を此所へ昇き込みました私しい餘りの事に途方に暮れ娘の事をへも忘て居ました所其中に火は既に娘の寢間にまで燃け廣がりました此時幸なにも勇しく働いて娘二人を烟の中より救ひ出して呉れた者が有りましゝ私しは最ふ是切りで所夫は迚も生蘇らぬ事かと存じ痛々心配致しましゝが其う此うする中に醫師關先生も參り漸やく呼吸を吹返す事と爲りましゝので初めて安心致しました誠に火事も大變でムいますけれど皆樣のお蔭で娘と所夫の助つゝのい何よりも仕合せと存ます」言葉に無量の愁ひを包み爽かに述べゝるい流石に擧れ高き伯爵の夫人ぞと輕蔑も心私かに感じゝり、輕蔑は次に醫師關登に向ひ「伯爵の疵所に就き君の意見を伺ひたいが！」と問ひ掛るふ醫師は日頃一酷の人ゆて先刻も既に輕蔑と爭ひし程あれば「イヤ拙者にい別に意見は無い、疵口を檢ゞ見るに今伯爵と夫人の述た所に少しも違ひい有る樣ゞと思ふだけだ、最ふ約束の時間ゞ經たから拙者は御免蒙り再び治療ゞ掛りますど情あく言放ちて再び外科の道具を取り彈の堀出を初めたり此時忽ち戸の外に當り非常なる叫び聲聞へたれば人々は宛も言ひ合せし如く一齊に坐を起ちて窓の外を眺むるに消防夫の騷ぎ一方あらず何事なるやと問ひ糺すに本家の梁棟燒け落ちて二人の人を壓殺せりと云へり其一人は消防の號令方にて今まで喇叭を吹き居たる男　今一人い正直の擧れ高き大工にして五人の子まで持る者ありしかば人夫等い非常ゞ驚き騷ぎて右左りへと行通ふ其中にも誰れ云ふと無く「火を附けた奴を探し出し燃殺して遣れ」など口々に叫ぶ如くなれば輕蔑は今こそ手掛りを探し出す屈强の時あれと早くも戸ゞ外に躍り出で高き聲を張揚げて「皆さん此度ゞ罪人殘惡い奴ゞと思ひませんか、彼れは此春邊村でと又無き尊い家を燒き其上に當家の主人を迄も狙ひ擊ち、猶ほ皆さんの友達を火の中へ落して殺しました皆樣の中に若ゝ其奴を見た者ゞ有るあら憚りなく其奴の名を聞かせて下さい私ゞ直樣裁判所へ引出して皆さんの敵を打て上ます

誰をか見たもれは有りませんかと息絶限りふ演説すれば群衆の中より誰やらん聲を上げ「一人其奴を知ッて居ると云ふものが有ります」と答ふ「夫れ誰れです「太々郎で有ります太々郎い火事の初から此家に居て娘兒を火の中より救ひ出しさ男で有ります」「其太々郎を呼で下さい」「オーイ太々郎、〳〵、太々郎は何邊迄行ッたと人々聲を揚げ太々郎を呼ひ探せり抑も太々郎は此たり此事件に附き第一れ證人と爲る者なれば先づ其素性を茲に記さんに今をり二十餘年前都より此村に來りさる畫工ありけり此畫工何時の程にか此村の貧家の娘を惑し其腹に一人の子を宿し置きて孰れへ〻立去りたり此娘めは手を盡して男の行衛を探せしかど更に手掛りあく其中に早や月滿ちて生落せしは此太々郎ありし太々郎ゞ生れてより八九歳ゴありし頃其母を初め家族一同時疫ゴ罹りて死亡たれば太々郎い世を送る便を迚知らぬ夜ゑ野に伏し山ゴ寢ね晝い家々の門に立ち人々の慈悲を得て僅かお喪家の犬れ如く墓あゑ之其日を送る者あり去れど太々郎は其天性此上も無き愚か者にして西東の別も知らぬ我名前さ迚も辨へぬ程あれど唯折々之を屈ひて牛馬代りに追使ふ人い有れど何事を言ひ附ゑるを更に合點する事能ゑず直に打忘るゝ程あれば力は強けれど何の益にも立ぬ且つ其口訥りて滿足の言葉を發せぬ人々が戲むれふ其名を問迚ば「太、太、太、太郎」と答ふるのみあれば終に太々郎と呼るゝ事と爲れり、太々郎が十五六の頃黒戸伯爵の夫人其愚かあるを憐れみ數多の金子を出して彼れを澤部町ある醫師關登れ許に送り手の屆ぬだけふ其治療を試みをせたれと所謂る馬鹿に附る藥りあしの醫迚にて一年半を經たれど少しの代りも無をして愚い相も變らぬ愚あれば左しを此醫師を呆れ果て終に其治療を斷いりしとあん

伯爵夫人は益々其愚を憐れみ後は我家に引取りて餘れる物を食はしめ彼れが心の儘に爲させ置きけるに太々郎は氣に向ぬ時は庭の落葉あを拾ふ事あれど氣に向かぬ時い孰れに行ぬか廿日も一月も伯爵の家に歸らぬ事あり去れども黒戸夫人の慈悲は早晩しか彼れゞ心にまで浸ミ入りしか夫人に懷ぬ事宛も犬が其飼主を慕ふ如久にて夫人が日曜日毎ふ寺院あをに至る時い前にあり後に成りて夫人の身に就き纏迚り、斯久まで愚かの生れあれど唯不思議と云ふ可きは時に由りて爽かに物を迚言ひ又爽かに道理を聞き分くる事も有り世間れ人之を見て太々郎と眞の愚には非ず唯ゞ他人の憐れみを買んとて殊更に愚人の風を爲せるあり

なと言囃すも有りたれと醫師關登の說に由れば彼れハ全く神經の亂れたる者ゑして若し心に非常の事を感ぜる時ハ少しの間だ其神經正しきに復り尋常の人の如く心爽かにして道理を辨へ得ると有り去れと其心爽かあるハ一月ゑ一度ある事を有り或は數年の間に一度も無き事も有り何にしろ世に二人と有るまじき大の愚人ありと云ひたりとぞ

夫ハ偖置き人々ハ頓て太々郎を連れて判事、警察長等の列び居る伯爵が寐臺の傍に連れ來り伯爵に向ひて偖云ふ樣「之が其証人て有ります」伯爵之を聞き驚きて「ナニ太々郎が証人ゞと　其人「ヘイ太々郎ハ火事の初めから見て居たと申ます」醫師關登ハ更ゑ驚き輕袋に問ひ「君ゞ此太々郎に尋問すると仰しやるのか　輕「爾とも　關「夫は丁ません太々郎は大ゝ愚人ゆゑ其の言ふ事は決して証據になりません風顛白痴を裁判の證人にするとは孰れの法律にも有りますまい　輕「イヤ證人ゑは致さぬ唯參考の爲めに尋問します　關「拙者が免許醫師の身分を以て其白痴たる事を誓ふのゑ君ハ夫でゑ尋問するゑ積りか、若し彼れが罪も無い人の名前ゑ擧たら何ゑなさる」此時戸口に有りて尋問の樣子如何にゞ待構へ居たる人の中なり「ナニ太々郎は夫ほどの馬鹿で有りません今日ハ先程より能く口も利きます」輕袋は之に力を得て彌々訊問に掛らんと身構へ為り

第三章

○侯爵星川武保（原名、姓ホースカーラン、名ヂヤケヤス）

判事輕袋氏ハ今しも連れ來りゝる愚人太々郎に打向ひ兎ゑ小兒に物言ふ如く其言葉殘和げて　輕「最少し私の傍へ寄てゑ出で、サ其所へ腰を掛けて」と云ひゝるハ太々郎が能く判事の言葉を合點し得るや否やを試ゑんとの心なり去れゞ太々郎は更ゑ其言葉の通ぜざる如く唯ゞキヨロ〳〵として人々の顏を眺むるのみ返事さへゑ爲さゞれば醫者關登は最誇顏に判事に向ひて「ソレ見給へ太々郎に何を問ふても無益ゞと云ふたゑ」黑戸伯ハ寐臺の中より此言葉を聞て「全く關氏の言ふ通りだ、達て問へば何の樣ゑ事を言ふ出すかも知れぬから若し太々郎の一言で罪ゑ犯人ゑ疑ひが掛る樣ゑ事でも有てハ成らぬ」傍に在りたる夫人ハ日頃太々郎の氣質殘知る者ゑをば徐ろに言葉を添へ「ナニ今日ハ毎時より機嫌が好い樣ですから靜に問へば知ッて居るだけの事は申ませう先程も火の中へ飛込んで二人の娘を烟の中より救ふて呉れゝのゑ此太々郎でムいますもの」と云ひながら太々郎に向ひ「コレ太々

や、お前能く氣を鎖めて其お方にお返事をせねばならぬよ、其お方は少しも怖い方では無いから最少し其お傍へ寄ッてー」と云ひ附るに不思議や彼れゝ夫人の言葉のみゝ何ふか斯ふか合點すると見へ輕錢の前に進みさり、輕錢ゝ猶も我詮議の土臺を固め置かんとてか太々郎を連れ來さる者に向ひ「全体、太々郎が此火事を初まりから見て居さとは何ぞ証據ゝ有る事ですゝ」其者「イヤ實はナ夫も他人の推量でもから確かにゝ分りませんが太々郎ゝ夜徹し眠らない癖で大抵毎夜の樣に宵から庭の邊りを徘徊して居ますゝら何でも其初まりを見たに相違ある無と思ひまを、當人が確に己が見て居たと申した譯でも有りませんので」輕錢ゝ此返事に痛く失望したれど問はで止む可き次第ならねば黙ねて太々郎に向ひ「太々や、お前ゝ宵の中から此庭に居たのかへ、エ、太々や、此火事を初めから見て居さのかへ」太々郎ゝ漸やく口を開き「ソ、ソ爾でムいます」判事は此返事に勇み立ち「お前、初めからの事を云てお聞せ」太々郎ゝ判事が問ひを呑込み得ぬにや一言の返事をもあさゞれば判事ゝ言葉の調子を替へて其問ひを繰返し「太々さん今夜の火事ゝ何うして燃へ初めました」と問へども更に答へあし、判事が殆と持餘しさる樣子を夫人は見兼たか又も言葉を添へ「太々や、何とか返事をお仕なさい」と云ふに夫人の一言にて宛も眠れる智慧を呼び覺せしか如く太々郎はキヨロ〳〵する眠を忽ち靜かに爲し判事を見上げつゝ「人が火を附けたので初め、初まりました」判事ゝ益々勇み「フム人が火を放けた、故意と附けたとかへ」太「ヘイ故意と」輕「誰が附けたへ」太「餘所の旦那が附けました」居合す人々は驚き此後如何と靜り返ッて聞き居たり輕「お前ゝ其の旦那を知たのかへ」太「見、見、見ました」判「お前は其旦那を知て居るかへ」太「能、能く知て居ます」輕「其名前もかへ」太「ハイ名、名前も知て居ます」判「名ゝ何と云ふ」太々郎は此問ひに當惑せしか良久が程ゝ云ゝんとして言お能はず唯居のみ動らせしか漸くにして聲を開き「ほ、ほ、星川武保と申ます」聞居る人々は此返事に孰れも顔の色の變るまでに打驚ろきたり、夫を何故ぞと尋ぬるに抑も星川武保と云へるは此春邊村より西の方三里ゆと隔てし星川村と云ふ所の地主にして且ゝ其身貴族の上位を占め人には星川侯爵と知られて其家非常に富榮へ年齢は猶ゆ若く三十に過ざれど品行正しく慈悲深き爲め人望廣く世に聞へ澤部町近邊にてゝ黒戸伯よりも猶ゆ一層尊ゝる人あり且星川家は先祖代々星川村に在しとは雖ど武士ど父の時代より其本宅を巴里ゆ移し

星川村の家をば一ッの別莊と爲したれば武保の父母ハ今猶ほ巴里に住ひ武保も又一年の中十月までハ巴里ゴ住ゐ星川村に來る事ハ年の中僅に二月にを足らぬ程なり、斯くまで家富み位高く何不足あき身分あるに此人、他人の家を燒き他人の命を奪ふとハ思ひも寄らぬ事あれば太々郎が馬鹿の天性斯くハ取認も無き事を言ものぞと人々ハ呆れ果たる其の中にを黑戸伯は慌荒く「輕錢氏此詮議は止て貰ひませう幾等馬鹿でも其樣な事を言ふハ聞捨に成らぬ筈そめにも武保殿を疑ふ樣に思はれてハ星川家ゐ對して相濟まぬ」と寐臺の上より憤竭たり

○証人利吉（原名、リボー）○同郷太郎（原名、ゴードリー）○同お幸（原名、コーチス）

星川武保ハ名を聞紀て驚紀るハ黑戸伯爵のみあらで居合す者一人として驚かぬは無紀中に判事輕錢、警察長富地、區長仙田、醫師關登等は孰れも日頃星川家に出入し武保には一方あら恩を受居る者あれば其當惑言はん方なし短氣なる關登は堪へ兼て輕錢に向ひ「夫れ見さまへ言はん事じゃ無い太々郎の樣な者を尋問して飛でも無い所へ疑ひ落さでは無か」と云へば警察長富地ハ最氣の毒ある色を現ハし辭找樹めて「輕錢君、此尋問ハ是切りで止給ゐ星川武保ゞ放火暴殺の罪を犯すゐとは天地が覆ゐッても無い事ゞから！」輕錢は默り返ッて在りゞるが凡そ古昔より判事が名を揚げ身を立るは斯る六ヶしき事件に因る事あれば輕錢は止んゝ續けんゝと稍十分問も思案せし後「イヤ拙者の役目として此儘には止られません」と言切りて太々郎に向ひ「太々や、お前の言葉は有名なる貴族ゐ恐ろしい罪を被せる譯ゞゞ夫ゐ相違ないか」太々郎ハ此時心經の刺激甚ゞしく起りしと見ゐ顏の色殆と紫と爲り眞ゞ口唇をのみ動せし末「全ゞ違ひ有りません」輕「てハ愈々星川武保ゞ此家ゐ火を放けたのじやナ」太「左樣でムいます」輕「何ふして火を附けた」太々郎は益々神經の騷ぐ如く言はんとして言ふ能ざされば判事は機轉を利かし伯爵の枕餅ゐ在る藥用利久酒をコップに三勺ばゝり注ぎ之を太々郎に與ゐるに快よゞ呑乾せしが之にて大に落附きて太「星川の旦那は衣囊から紙を取出しす燐で火を附けて藷の中ゐ入れましゞ、藷の燃るのを把て積ある薪の間ゐ入れ猶其上から藷を澤山かけました」醫師關登ハ聞き兼て「馬鹿な事を言ふ！」と思はぞも口走れば判事は吃と睨詰め「尋問中に傍から一言でも口を出す者ハ直樣憲兵に引渡しまそ雖彼奴の容は有りませんぞ」と叱り懲しつゝ又も太々郎に打向ひ

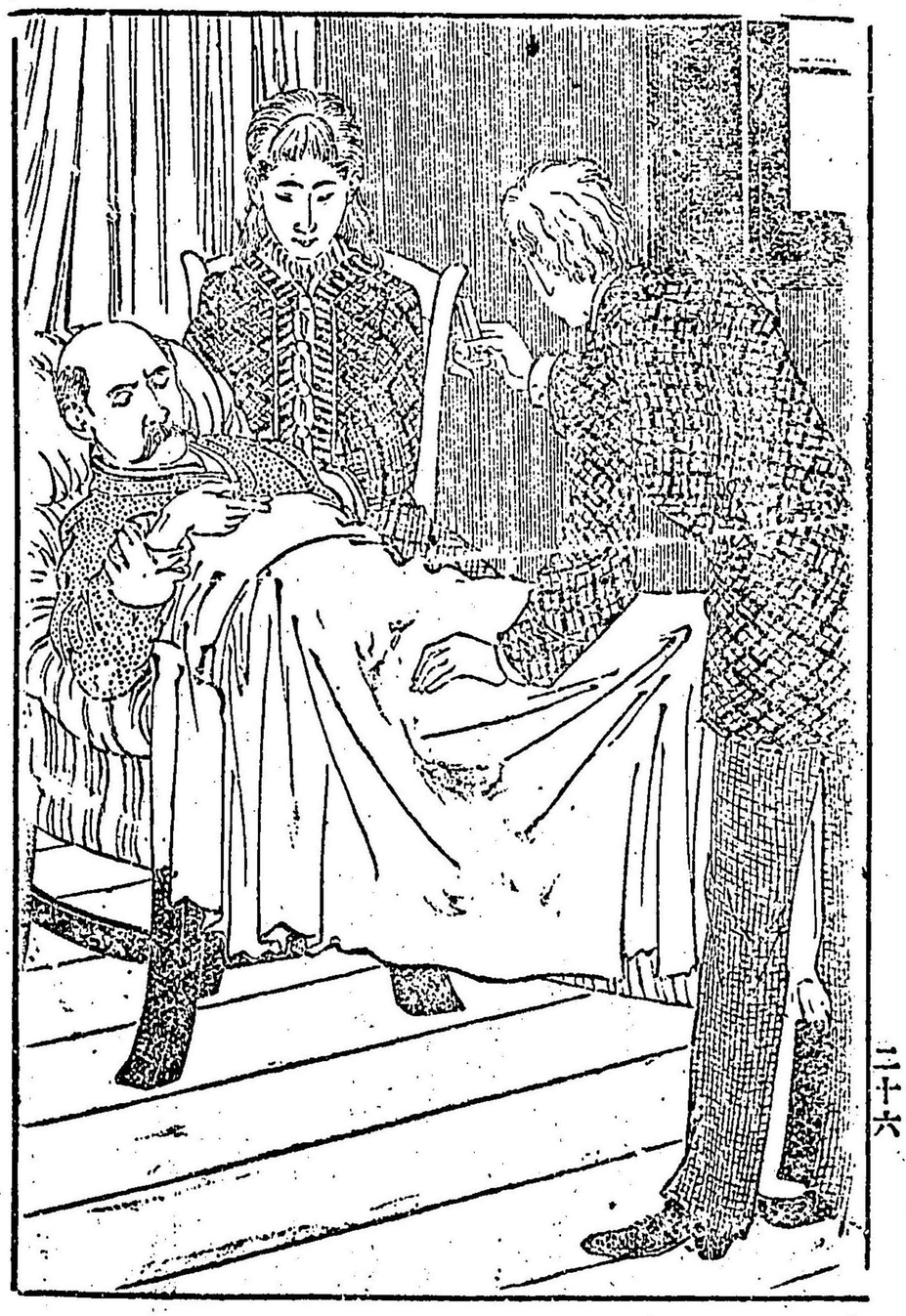
「星川は何様な着物を彼て居る　太「荒い藍縞の春嶺と同じ洋袴を穿き鶏色の脚袢で洋袴と靴を綴ぢ合せ麥藁の線の廣い帽子を冠ッて居りました　輕「星川は火を附けてから何を致した　太「薪小屋の傍迄隠をました　輕「夫から何ふした　太「鐵砲を能先て待て居る所へ此家の旦那が出てきました　輕「夫から　輕「狙ッて打ました」馬鹿ながらも明白なる申立に人々い唯呆れ惑ふて顔と顔見合いすのみ獨り伯爵い氣を燥ち苦痛を堪へて蹲蹴の上に起直りつ恐しき眼ふて太々郎を睨み詰め「馬鹿者先、其方が夫れ程詳しく見て居たなら何故此己に知らせて來ない」大喝一聲に叱られて太々郎は何ぞ堪らん口より泡を吹却おら忽ち神經昏絶して其儘大地に打仆れ唯身躰をピク〳〵と動かものみ呼べど起せど其甲斐あし人々は「夫、又例の病氣ぢ初まッた」とて驚き騒ぐ景色も無く直ちに太々郎を抱上げて孰れへか運び去りゝ後ふ輕錢い伯爵に向ひ「素とり太々郎の言葉は証據ふも成りませぬが兎に角彼の通り前後の相違も無く述立る所を見るば爲更ら嘘とばりも申されませぬ就ては伺ひまそぢ彼方と星川武保と是まで何の様な交際を爲されました　伯「別に交際い致さぬ、私は年中此春邊村に籠ッて居る星川は大抵巴里に住む故私も彼れの家を訪ふた事あく彼も私の家へ來た事は無い　輕「でも世間の評判でい仲ぢ惡かッたと申しますぢ　伯「イヤ仲が惡くても互に怨はせぬ其人品を敬ッて居るので　輕「貴方と星川は互に訴訟を起して居ると聞きましぢ　伯「アレい最う詰らぬ事で、私の領地と星川れ領地の境ふ小川が有て其水論から兩方の百姓同士が訴へ合た丈の事、私も星川も更に關係は無い　輕「イヽエ、夫でも貴方と星川と非常な喧嘩を仕たと云ふ風説ぢ有りまそ　伯「夫も何に瑣細な事じや、私が自分の領地内で獵をして居る處迄星川の獵犬ぢ遣て來て私の射た兎を口へて行たのぢ初まりさ　輕「夫から貴方い其犬を追掛けて行き星川に逢て犬を殺さねば承知せぬと仰しやッた相で有りますが　伯「夫い全く一時の腹立紛れで今更後悔千萬じや爾聞かれてい面目ない　輕「其場で貴方も互に鐵砲を以て狙ひ合ひ今一刻で果し合と云ふ所を仲裁ぢ這入て漸く取鎮めたと云ぬ事を私しは珍に星川の口ら承聞ました　伯「イヤ最う夫い其場切りの事で互ひに少しも怨みにい思ッて居ぬ」問答漸やく盡きし所へ又入來る數人の百姓、口々に判事に向ひ今夜星川樣を見たと申すものゝ三人ムりまを」と注進したれば判事は直に三人を順次ふ呼入れしぢ郎一に來るは近邊の百姓の息子利吉と云へる者にて其申立は今夜の八時過星川家の領内ある

林の中に罠を掛け其番を爲し居たるゐ星川い林を潜り春邊村の方へ歩き來れり利吉は星川ゐ一通りの挨拶を爲せしに星川は我に見られし残惜きし如くにて足を早め疾を急か行き去れり其身形い太々郎の言ひしに異あらずと云ふ次の一人は春邊村の百姓郷太郎にて毎夜林に入り薪を盜きて世を渡る者なるか其言立は今夜十一時過ぎ黒戸家より十町ばかり離れた る藪の中にて星川が我家を指し草木を掻分けて歸り行くを見一通れ挨拶を爲せしに星川は痛く慌きて匆々に立去をり衣服は太々郎の言葉に同じと云ふ又一人は近村に住む郷婦ゐ幸と云へる者にて兼て誘らへある小麥の粉を受取らんとて馬を引き星川村なる水車場に至マしゞ其粉未ゞ挽き揚らざりし故其終るを待ち夜の十二時過同所を立出で星川家より十町ほど此方へ來りし時馬ゐ附けたる一方の靈落されば女の力にて再び附ける事叶はぎ殆ど困じ居る折しも傍の林の中より星川武保現れ出たれは呼留めて其力を假しに武保は餘程周章居たる樣子にて言をも言はぎ藪を抱上げ馬に附け呉れて其儘我家の方へ立去れり其身姿と太々郎の言ひし如くにて二挺筒の鐵砲を携へ居さりと云へり此三人の言葉を合せ見れば星川武保ゞ八時頃家を出で人目に着かぬ林を潜り黒戸伯の家の邊りに來り十二時頃又私かに其家に歸りし事明白にて太々郎ゞ申立も全く無根には非ざるゐ似たり

第四章

○山堂家（原名、シヤンドア）○星川武保の許嫁錦嫂（原名、ニシア）○判官の書記鞭根（原名、マチチー）

利吉、郷太郎、ゐ幸、此三人の申立に由り最怪しむ可きは星川が何故に林の中を潜りて春邊村に來りしやとの一條あり星川村より春邊村ゐ來るには二ッの大道あり一ッを北道と云ひ一ッを南道と云ふ然るに星川武保は何故ゐ此大道を歩まぎして忍び〳〵に林の中を潜り來りて又林の中を潜り歸りしぞ殊に此林の中には所々に沼ありて此前日降りし雨ゐ孰れの沼も水滿て足を濕さねば渡り難き程あるゐ星川が斯る怪しき道を取りしは益々疑ふ可き事どもなり、去れば今まで太々郎の申立を唯だ馬鹿の聾盲ならんと思ひ居たる人々も三人の申立を聞き漸く心ゐ疑ひの雲廣がりて唯だ顔と顔見合はすのみあり、去れぞ唯一人醫者判登のみは猶も堅く言張て「君方は目ゞ見ぬと云ふ者、星川武保殿い鉄てをり山堂家の一人娘錦嫂と許嫁て近日の中に婚姻をする筈じや、彼の樣ゐ美人に愛せられて君る人が何



ふして浮雲い罪找犯を者か若し露見する日ゐは一命を失ッて孃の顔を見る事も出來ぬ、孔んだ後まで孃に愛想を盡される譯じや無いか」と一人賢氣に說立つる折しを又一人の百姓入來り恐る〳〵黑戸伯ゑ寢蟲れ傍に進み寄り何やらん紙片の如き者を差出し「裏門の出口に此樣な者ゑ落て居りました」伯爵は手を差延べ「何れ」と受取て暫く打眺めしゑ忽ち顔の色を替ゑ「ア、困ッた者じや」とて心の底より深き溜息を發しされば判事輕錢い早くそこ所に進出で「伯爵、夫は何か証據物で有りませう私しゑ見苦下され」と手ゑ取りて唯看且視つ頗ぶる滿足の躰にて「ソレ此樣な確ゑ証據が擧るぞらうと思ッて居ました」とて更に警察長宮地ゑ向ひ「宮地君、見ゑまへ是さへ有れば最早や疑ふ所い無い拙者い是より直樣星川村へ出張し武保ゑ寢込へ踏込み充分の詮議に取掛ります」と宮地に手渡せし証據物は抑も如何なる品物ぞと居合せ人々は我先ゑと首を延して凝視るに之ぞ是れ元込銃ゑ用ふる散彈袋にして火藥の所は既に燒け散彈は飛出て空なれど胴の所のみ燒殘り其所に「クレブ會社專賣」の七字焦たる儘に之を歷々と殘り有り、抑もクレブ會社とは米國ゑて有名なる銃器店にして此會社專賣の散彈を用ふる者ぱ寒邊村の近邊十里以內にい星川武保の外に一人

も無きと称て人々の知る所なれば今は早や疑ひ無し此袋こそは武保が今宵黒戸伯を狙ひ蹶さる二發の中れ一ありとい言ても知る可き事あるゆゑ輕錢と早や立ちて「サ富地君、仙田君最ふ夜も大方曉けました直に星川村へ出張致しませう」と先に立て急ぎせつ殘る人々に暇を告げ判事、警察長、區長の三人、星川村指さて立出たり此時い早や朝の四時過にして一天晴に明初め宵の中より燃盛りぬる火事も燃く可きだけい燒き盡し漸く居眠を初むる如くゐ消へ初めたり、三人い均しく待せある馬に乘りしが富地は輕錢に打向ひ「君い書記をも連をずに出張あをるか　輕「ア、忘れて居た此迄來る時餘り急いざらら書記にい後から來ゐと言附けて有さぐ最ふ多分來て居る筈ざ、何所か庭の隅で居眠でも仕て居るだらう」と云むゐぐら四邊を見回し「鞭根い居ぬか、鞭根く」と呼立る聲に應じ書記風の男馬を引つゝ跳れよりら出來れり　輕「是から星川村迄行くのだ從て來い」と是より四五丁の間い四人無言にて進みしが頓て警察長富地は最氣遣いしげに聲を掛け「輕錢君、君ゐ眞實星川を有罪や思ふのか　輕「僕は有罪とも無罪とも思はぬ唯詮議すれば分るざらうと思ふざけサ　富「イヤサ夫は判事の句調と云ふ者、眞實打明けて言迄ば彼の男か身怯ゐ罪を犯すと思ゐ給ふか

輕「實い僕を彼の樣ゐ公明正大ゐ男が豈夫斯樣ゐ事い仕まゐと思ふけをど彼だけの証據が有れば打遣ても置れずサ　富「夫なら君此裁判は止し給へ止て外の判事に任せたま迄、先ア能く考迄て見るが好い君は乘てをり星川とは非常に懇意ゐ間だぜ、其上君は星川れ姪ゐ妻に貰はんと既に其事を言出して先方の返事を待て居ると云ふでい無いか　輕「夫い爾ざ　富「左すれば君と星川と遠からぬ親類緣者と成る間柄ざぜ、親類緣者ぜも云ふ可き者を君が審問して夫で公平ゐ裁判が出來ると思ふら」輕錢い此言葉に少し怒りを帶びたる如く「夫は督からん事を云ふ、僕は判事の役目を靈す時にい親類でも緣者でも容赦はせぬ　富「夫さ、夫が間違いざ君い未ざ年ぐ若くて經驗が足らぬ、誰でも判事にあれば依怙贔屓が有る樣に疑れてい成らぬと思ふ所から親類とか朋友とら云迄ば却ッて益々嚴重に取調べる氣にあるじや、夫ぐ爲め餘り嚴重過ぎて却ッて失策し罪の無ゐ者ゐまで罪を附けるは能く有事だ僕は決して君ぐ朋友緣者の情に引され寛か過るを恐れいせぬ唯其情に迫られて嚴し過るを恐れるのざ、他人に讓るが善らうぜ」と老實に說き諫むれど輕錢は其言葉耳に入らざるら馬上ゐ俯向きて返事なし、其中に馬い早や星川村員近く過み行きぬ

○星川武保の下僕案蔵（原名、アンソニー）

四人ゝ頓て星川村ある星川武保の別荘に着きたれば馬を併べて進み居るに此時ゝ早や朝の七時前なれば武保の從者案蔵と云ふる者既に起出て卷煙草を吸むながら門前を散歩せり、素より熟れゝ知れる間柄あれば案蔵ゝ進み來りて人々に向ひ「今日ゝ大層お早く入しッて主人武保も喜ませう」輕籠は今日こそ判事の役目を帶びて來れる者なれば輕々しくは聲を掛せず毎時になく言葉を正して「星川武保殿は御在宅かあ」と問ゝれて案蔵ゝ氣を附かず「ハイ昨夜晩く歸りまして今朝ゝ未ざ寢て居ます　輕「フム昨夜何時頃ゐ歸られる　案「十二時を過て歸りました」此返事を聞き輕籠は警察長富地と互に目を以て頷首きさり　輕「昨夜何時頃ゐ家を出た　案「左樣さ八時過でも有りましたらと覺へます　輕「何の樣な身形で　案「荒い藍縞の袷廣と洋袴で鳶色の脚袢を穿き、綿の廣い麥藁帽子を冠ゝまして　輕「鐵砲を持てゐへ　案「左樣でムいます　輕「シテ何所ゐ行た」案蔵は輕籠が問ひの餘りに細かあるを怪まみしゐ少ま言葉ゝ調子を替ゐ　案「私しは毎も主人武保ゐ外ゐ出る時に一々其行先きを問ひませんゐら何所ゐ行ッたか存じません」事に長たる警察長ゝ早くも案蔵が稍や機嫌を損ねんとするを見て取りたれば言葉を案げ　富「イヤ案蔵君實は是非とも聞なくてゝあらぬ事ゐ有る知ッて居るたけは話して呉れたまゐ、話さんと紀ゝ却ッて武保殿の爲ゐふも成ちぬ事が有るゐら　案「イヤ私しは全く存じませんのでー　輕「何所か春邊村ゐは見舞ひに行く程の懇意ゐ人は有りません　輕「でも見舞に行たのでゝ無ゐゐ　案「春邊村ゐは見舞ひに行く程の懇意ゐ人は有りません　輕「でも一人位ゐゝ有るさらう　案「イエ獨りも有りません　輕「前夜武保殿ゝ歸ッて來て何をしゐ　案「直に寢間へ行ッたゐ五分時ほとも經さ頃又出來り菊酒を一杯飲み夫ゐら煙草なとを呑で居ましさが私しに最う寢るゐ好とヤまて御自分も寢間の中へ這入りましさ　輕「武保殿の樣子は別ゐ平生と異ッた所は無かッたか　案「別ゐ這ッさ所ゝ有りませんでした　輕「武保殿の鐵砲を見せて呉れ舞ひか　案「鐵砲は多分寢床の在る室ゐ提て這入さと思ひます　輕「武保殿と黒戸伯と仲を違ゐて居ると云ふが夫れゝ如時々分からの事だ　案「夫は最ふ大分以前の事と思ひます　輕「此所から黒戸伯の家まで道里ゐ何れ程ある　案「三里位とヤます　輕「通例此所から彼所へ行くにゝ何の道を通ると思ふ　案「大抵南道か北道を參ります　輕「林の中を潛る樣ゐ事は無ゐゐ　案「林の中を潛るのゐ大變でそよ、最も其方か近ゐゐ相違

ありませんが夫でも沼も有り川も有り中々容易な道で有りません　輕「若し春邊村お火事でも有れば此邊りへ見へるかへ　案「イヽエ此富りと樹が繁ッテ居ると小あ間を一ッ隔てゝ居ますから中々見へません　輕「でも半鐘や喇叭の音は聞へるざらう　案「夫も風の都合の好い時で無くてゝ聞へません」判事ゝ此時言葉の調子を全く變へ「夫でゝ昨夜春邊村に有た大事件もゝ未だ知らぬで有うな」案藏ゝ驚きて「大事件とゝ何事です今まで色々な事をお尋なさッさのも何か主人武保が其事件に關係でも有るのですか」輕錢は此時忽ち判事の威嚴を作り「イヤ茲で問答する所で無い是より武保の居間に案内致せー」案藏ゝ事の仔細を知らざれば心に痛く危みあがらも判事ゝ命を辭み拒まん樣も無ければ其言葉お從がいて輕錢と富地を主人武保ゝ居間に案内しより武保ゝ日頃早起きの男なれど今朝は如何せしか猶

ほ寂間の口さ迚開かざれば判事と警察長は又さを目と目を見合せたり、案藏ハ恐る〳〵判事に向ひて「今朝ハ未ざ寐て居る樣子で有りまそがー」輕「イヤ寐て居ても善い此戸を輕く叩いて見よ」案藏は指の先にてトン〳〵と音迚ども内ゑハ何の返事も無し

第五章

内より何の返事も無ければ下僕案藏ハ猶ほ強く戸を叩くに此首初先て耳に入りしゃ武保の聲として「誰ざ」案「私しです少し用事が有りまして」武「最少し後に來い」案「爾は出來ません」武「了ないよ夜前から少しも眠らずに今し方ヤッと眠り掛た所だから九時頃まで此儘に置て呉れ」判事輕錢ハ益々此返事を怪しく思へば今ハ自ら戸の引手に手を掛けて右左りに廻し試れど内より錠を卸し有れば燥立ちたる聲を揚げ「拙者ざ、判事輕錢ざ茲を明け玉へ」と云ふに此聲を聞き初めて目の覺めし如く武「オヽ君か、妙々直あけるから持たまへ」輕「大切な用事が有るから早くー」と云ふ中、内より戸を開きしハ武保なり武保は眠りの足らぬ爲め眼瞑重げゑ見ゆれど之眼に血氣盛んある光を現ハし唇るゑ客を迎ぶ笑を含みて「早朝から好く來て呉れて、オヤ富地君も一夜前夢見が好ッたから今朝は何でも歡びゞ有ると思ッて居たと言ひつゝ兩の手を差伸ぶれど三人ハ之を握らんともせず罪人を取扱ふ時の如く眞面目ある顏ゑて室内の樣子を打目もるのミあれば武保は怪みたる躰にて「何うあさッた、友達らしくも無い大層眞面目でハ有りませんか」輕錢ハ猶も一層眞面目になりて「最ふ友達では有りません今日ハ判事警察長等の役目を以て出張致しにと云ひながら室の中に進み入りしゞ後に隨從いし書記鞭根ハ口の中にて「此事件ハ武保殿じやア無いわへ、身ゑ暗い覺へが有れば彼の樣に怪みあがらも落着て居られる筈ゞ無い」と咳やきさり警察長富地は日頃慈悲深き老人ゑて今は武保の顏を見るさへ氣の毒ありと思へば身我窓の方ゑ寄せ何氣なく庭の景色を眺むるのみ之に引換へ輕錢ハ室の中央に立ちギロ〳〵と四邊を見廻そは何か室の内に取調べの手掛と爲る者も有らんかとてなり武保は此時呵々と打笑ひ「コレ輕錢君狂言も能い加減ゑしてサア此椅子へ掛けたまへ」輕錢も聆毛一ッさへ動かさぞ寫眞よりも猶ほ眞面目ある顏にて「星川氏、君の手を見せ給へ」と云に武保は益々笑ひて「最う充分だよサア腰を掛けたまへ」此時富地も最と氣の毒なる面持にて窓の際を離れ來り「イヤ星川氏今日ハ全く笑談で有ません吾々ハ悪い役目を帶びて來なしたから

僕式ざけにも取調べねばなりません」正直を以て聞へたる警察長が斯くまでに言開くらは早や笑談に有らぬ事分りしら武保は少し慣りを帶び「左樣ですか、爾せも知らず矢鱈を致しました、サア御覽下さい」とて差出す兩の手は荒き運動に慣れし人とて、貴族にも似合ず最節くれて皮剛けれど洗ひ清免し者と見へ少しの汚れも見へざれば　輕「貴方ハ何時此手を洗ひました」武保ハ猶も我身の危き事を知らざるか半バ情談の如く笑ひあゞら「洗つて置ねば君ゞ咎められると思ッて此通り洗ッて置き、僕の手にハ最ふ何の証據も有るまい、アハ、ハ　輕「イヤ情談で有りません、君は非常ある犯罪の嫌疑を受けて居るゝら拙者ゞ此地り取調べニ參ッゝ故、能く考へて返事し給へ一旦口から出ゞ言葉ハ取返しゞ出來ませんぞ、君が有罪と爲り無罪と爲るも總て君の返事に由るとでも」如何ほど正直なる人ゞても今より我身ゞ法律上の取調べを受けると聞かば其心必ず驚ゞん、武保ハ今まで我身に恐ろしき疑ひの掛れる浅知らねバ半ば怪み半ば笑ふ如くありしも輕錢の此返事を聞き初めて稍や不安心の如き色を爲し「僕ゞ犯罪の嫌疑が有る、フム夫で君ゞ此僕を取調べに出張あされたのか　輕「拙者は豫審判事でそ、取調べるのが役目です」昨日まで親友として交りし者ゞ今は我身を疑ふかと思へば武保怒りに堪ずや有りけん忽ち顔の調子を上げ「でも君ハ僕ハ親友では無いか夫ゞのに僕を調べるのか、輕錢君、若し世間で君の事を言ふ者ゞ有ッても僕は君の親友ゞから飽までも君を辨護するよ、君が眞實罪を犯したと云ふ証據が有ても僕は決して其証據を証據とハ思ハぬ君が平生の品行を証據と思ふ、是が友達同士の義務では無か然るに君ハ僕に何か嫌疑が有とて直樣夫を賊と思ひ起抜に遣て來て之加も探込を冒して取調べるあぞとハ僕實に合點が行かぬ、僕は何の樣ゞ嫌疑を受て居るか知らんゞ君が其嫌疑を信じ僕を調べるとは思ひも寄あんだ、併し今更ら云ッてゝ返らぬ事ゞから、宜しい僕は君の役目に從ひ充分に調べられます、サ何でも問ひたまへ答へますから、フムハ此言葉を聞きて少しも驚かゞ也靜まり返ッて問返を「シて其の水は何うしました　武「未ゞ次の間の樣側ゞ銅盥の儘で在りませう」輕錢は悠々として樣側ゞ至り見るゞ果して一ッの銅盥あり手殘洗むし者と見へ水ハ汚れ濁りゞる其底に澱みたるゝ何か燒ゞる炭と灰の類にして猶ほ焦たる紙と蹄の分子さへ浮みあれば判事ハ夜前太々郎の申立ー事なゞを考へ合し

て獨り心に頷首きながら靜か銅盥を携げて舊の所に立歸り「是が手を洗ッた水ですか　武「左樣　輕「是で見れば貴君ハ夜前炭ゝ其外燃易い者を扱ッゐと見へ升な　武「其水で分りませう」武保が言葉は益々我身の罪を確ゑる如く聞へしゝば傍に有る富地と鞄根ハ互ひに顏を見合せゝり、アヽ武保若し罪あくば極ゑて心の落着ゑたる男兒あり彼れ又戸に罪あらば前以て何か言解くゞけの工風を定めあるヨ相違あし、彼れ果して何等の事を言ゐ出るや

○武市村（原名フレチ村）

判事は此時書記に向ひ「是より筆記せを」と命じ置きて又も星川に振り向きつ「君は昨夜家に居ましたか　星「イヽエ　輕「フム八時頃に家を出て十二時頃に歸りました子　星「ハイ十二時過に歸りましゝ　輕「鐵砲を持て行きゃしたか　星「ハイ　輕「其鐵砲も　星「此猟臺ゐ憑せて有るれです」輕袋は鐵砲を取り檢め見るに昨夜農夫か黑戸家の塀の外ゐて拾ひ上げゐる散彈藥と同じく米國クレフ會社製造の印を捺し有れハ輕錢ハ心に頷きつ「此鐵砲ハ何時放ッた者ですか　星「四五日前に放ッた儘で有ります　輕「何の爲めに放ちました　星「裏ノ林に樓む兎を射たので有ります」輕袋ハ鐵砲を取揚げて本末を打眺め猶ほ筒の中まで眺むるに其筒、二ッありて兩方ともに散彈袋を込ゑ有り其彈も同じくクレブ會社の專賣あり、輕袋ハ是に力て懷より夜前拾ひし証據の散彈袋を取出し之を星川ゐ示しながら「此散彈袋に覺へか有りますか　星「有ります、是は私しの使ッた散彈袋か是れゝけ燒け殘ッた者で有まも　輕「此村の近邊にハ君より外に此散彈袋を用ふる者ゞ無い事を知ッて居ますか　星「確かに存じて居ます　輕「左すれは此散彈袋の落て居た所は必を君が鐵砲を打ゝ場所ゐ違い有りまを　星「イヤ爾は申されませんまい、君か鐵砲を放たぬ所に此をゞ落て居る筈ゞ有ります　輕「フム成る程、ス私ゝしが捨ゐのを時々子供か拾ッて弄物ゐ仕て居る事ゞあるますから　輕「フム成る程、スれは此袋ハ君か鐵砲を放ッた事の無い場所にも落て居る事も有るか、フム」と云ひながら初めて椅子に腰を掛け「夫でハ別に問ふ事が有る君は昨夜八時から十二時まで何を仕て居ました、サ能く考へて御返事なさい此返事次第にて君の罪は重くも成り又輕くも成ます」　星「いヤ迄星川と判事の問に對し一寸の猶豫もせを一々明かに返事なせしが唯ゞ此問ひヨは痛ゝ當惑せしと見へ眼ヨ非常の心配を含み唯たキヨロ〳〵と邊りを見廻そのみ暫を有りて言葉を粉ぎらし「全躰、何の爲めに其樣ゐ事をお問ひなさる、私しに係る疑ひと云ゐは何の樣

お事で有りまそ　輕「イヤ夫は言明す可き時に言聞します今知盜せる事ハ出來ません夫より
は先づ抑者の言葉に返事をなさぬ、サ昨夜の八時をり十二時まで君は何所ゐ何をして居ま
した」星川は益々當惑け脉ありしど「夫と忘れました何でも所定めず散歩して居るかと存
ます　輕「鐵砲を以て散歩したのでもか　星「私をしハ何でも鐵砲ハ身を離しません　輕「君ハ
林の中の沼の近邊を歩行ましたか　星「イエ其樣の所ハ歩きません判事は此時顏ゐ一入の風
風を現ハし「君ハ判事に對して虚りを述べまそか　星「是は怪しらん　輕「イヤ君が夜前穿
て居た靴を見れバ分ります　師から前れ方まで泥の跡ゐ付て居るのゞ何をりの証據でも　星
「イエ此家の後の邊に澤山淤游泥ゞ有ります　輕「イヤ爾で有りません君は林の中を潛ッて
居る事ハ確かな証據ゞ有ります確かゐ証人ゞ有ります隣村の利吉ゞ現に君に逢て挨拶まで
しゐと申ます」星川ハ無言ゐ返事なし判事ハ猶も言葉を續け「サ君ハ林を潛ッて何所へ
行きました」星川ハ茲に至りて益々言葉詰り顏の色さへ青ゑありしは最早や我身の逃れ難
きを悟りしに似ゐり暫くにして口を開き「昨夜は武市村へ參りました　輕「武市村ハ誰の家
へ　星「我領地の番を致す者の家ゑ行きました　輕「イヤ武市村では有りません其証據は昨夜

の十一時頃春邊村の鄉太郎が同村ゑ近き林の中で君を見たと申します又同じ村の寡婦お幸を君を見さと云ひ立ます其証據は君が夜前着て居た衣類の胸の所に小麥の粉ゞ着て白をあッて居ます君ハお幸が馬へ小麥の藁ゞ附けて遣りました」星川は是に至りて最早や言解んの便も無く唯だ首を垂れて默然さるのみあり輕錢は言葉に力を入れ「サア君ハ最う白狀しさまへ夜前は春邊村ゑ居たので有う 星「イヽエ附で有りません 輕「でゞ証據ゞ有ります今見せた散彈袋ハ黒戸家の裏門ゝ所に落て居ゐ者で有ります 星「イヤ其散彈袋ハ今も申を通り子供をゞ拾ッて方々へ持行く事が有りますから証據にハ爲りません、若し私しが春邊村へ行たなら、有躰ゑ行ゐと申ます隱を箸ゞ有りません 輕「イヤ隱を箸ゞ有る、君は昨夜春邊村に行きて黒戸伯の家に火を放けたので有る」此一言に星川は飛上る如く驚きて 星「へエ何と仰ぜります 輕「火を掛けた其上鐵砲にて二度まで黒戸伯を狙い撃たに相違ある舞いー」

第六章

春邊村犯罪の次第を言ひ聞かす判事の言葉に星川武保さ色青冷め言はんとするも言葉出ず

其有樣を見る警察長を初め書記鞭根に至るまで日頃武保にハ親しく交りて其恩を被むる者あれば孰れも首垂れさる首を揚げも得ゞ唯默然として控ゆるのみ獨り判事は味も情も無く落附きたる顏色にて「星川氏最ふ白狀するゞ善らう」武保は此言葉に初めて力を得「白狀とは何を 輕「夜前春邊村で放火と人殺しの罪を犯しさ事を」武保は口惜さに堪ざる如く「輕錢氏君ハ此武保を罪人と信じ玉ふか、武保は覺への無い事ハ白狀出來ません 輕「イヤ覺の有無に拘はらぬ現に君が火を放け鐵砲を放つ所を見さと云ふ者ゞ有るハら仕方ゞ無ム 星「誰れが見たとゆます 輕「朱々郎が見たとの言立じや 星「ナニ太々郎アノ大馬鹿の太々郎が、彼れの言ふ事ゞ証據にありますか 輕「イヤ何も知らぬ馬鹿だから、我国に見ぬ事を言立る筈ゞ無い、利口の人ハ反て種々樣々の事を考へ 僞を吐く事を有れど虛を云ふ事さへ知らぬ太々郎ゆゑ、見ぬ事を見たと云ふ筈が無い、殊にハ不斷滿足に口さへ開けぬアの太々郎ゞ昨夜は霧時の間其精神さへ爽かに、有の儘を述立たハ實ゆ足下の運の盡じや 星「君ハ太々郎の言葉をお信じなさるか 輕「イア彼れゞ言葉ばかりを信じハ致さぬ其外にも取調べた事柄ゞ一々太々郎が言葉の証據で有る、餘一君の樣子を見ても無罪の人とハ思はれ

ぬ、毎も朝起する人ゞ今朝に限ッて七時まで宵から眠られずに居たと云ひ、又其手を洗ッゝ水を見れば鐵の分子や紙の屑が浮て居て底には黑い炭の粉ゞ溜ッてある、之れに言譯ゞありますか之ばかりでも放火ゝ証據は充分ゞ、殊に足下が言葉を聞くに種々の偽りを作り設け武市村へ行たあとゝ跡方も無い其言拔け、星川氏よ拙者ゝ決して罪無い人を罪に落したゝゝ無い足下若し覺へが無ゝば夜前八時から十二時まで何をして居ゝか有驛に語るゞ好ゝ、夫さへ確かに分るなら無罪の証據は白と立つ、サ夫を足下ゝ言ふ事が出來ますまい、罪人と見認められるゝ當然の事、是でも言譯ゞ有りますかサア、足下ゝ夜前春遊村迄行かねば何所へ行きました、サ返事を〳〵」と問詰れゞ武保は返事なし此時門口の方に當り何事なるか騷ゞしき物音の聞ゆるにゞ判事は書記鞭根ゞ向ひ「何事だ、見届けて來い」と言附る折しも二人の憲兵突々と入來り警察長富地に向ひ「唯今春遊村ゝ百姓ともゞ犯罪人を叩き殺せと口々に騒ゝッて當星川村迄推寄ますゆゑ力を限りに説諭それゞ中々聞入れる樣子も無く既に此家の門前迄く進みました」ゞ注進する言葉の中ゞ早や百姓の聲として「星川武保を引摺り出せ」と手に取ゞ如く聞ゆるにゞ警察長富地ゝ區長仙田ゞ共に速早く門前に走り出て推寄せる百姓供ゞ向ひ聲張揚げて説諭せしに、人望高き兩人の命令を見て百姓等は他愛も無ゝ鎮まりたり其後にて判事輕錢ゝ留も武保に向ひ「昨夜の火事で消防夫の中に死ゞ者が二名も有る故彼れ等ゝアの通ゞ怒り立ち足下を叩き殺ゞとまでに騒いで居る、足下の事だから定めて深ゝ仔細も有ゝか早く打明けて白狀ゞるが好らゝ斯ゞ証據が上るからゝ幾等白狀せゞに居ても判事の職務として足下を拘引せねばあらぬ」星「拘引せ給れても白狀は出來ません此身に覺えの無い事だから」輕「覺迄が無いあら昨夜は何所に何をして居た、サ此返事ゞ出來ぬからは覺迄が無いとゝ言せません、拘引しやうか白狀なさるか」星川も今ゝ覺悟を極ゞしか思ひ切たる聲音にて「サア拘引あされませ」輕「拘引それは白狀あさるか」星「判事よ男子の一言で有ゞます、假令此身は殺さるゝ共決して覺迄は有りません決て白狀ゝ出來ません此武保は惡人ともの深き謀事ゞ落し入篭れ其身代にせられるのでも武保の心ゝは分つて居れゞ口にゝ言ふ事ゞ出來ません、サア心好く拘引を要ませう」輕「夫では今十分間の猶豫を與へるから充分に仕度ゞされ」星「心得ました」と星川ゝ立上り下部案藏と共に一間の中に退きたり案藏は先程ゞり武保と輕錢の問答を聞き武保が身の逃れ難

きを知りしかは一室ゑ退くや否や主人ゞ耳に口を寄せ「旦那最ふ迎も逃れません、貴主に罪の無い事ゝ此案蹟ゞ存じて居ますゞ、罪の無いのに捕われてもお家の汚れになりますゝら此窓からゑ逃なさい、裏の林に隠れる所ゞ有りますから晩まで隠れて居る中には私しが人知れず馬を連れて參りますから夜に紛れて五里走ればアノ川の傍にゝ小船ゞ有ります小船に乘れば港へ出て今夜の中ゑ外國船ゑ乘込まれませう、其上米國へでも行けゞ後から私しが錦嬢をお連れ申し三月の中には追附きますから、サ早く此窓からー」と主人を思ふ一念を武保ゝ叱り附け「馬鹿を言ふあ、逃げれば一生此罪を言解く事は出來ぬわゑ、身に覚へが無いからゝ假令ひ佛國中の裁判所捜引蜂をれても此罪を言開く、又と其様ゑ間違た了見ゑ起をと直様喝ゑ遣るぞ、己の身は大丈夫だゝら氣を附けて留守をしろ」と言聞せつゝ早くも衣類を着替若干の金子ををへ懐中し「サア是で好し」と言ゑ抜しも早や判事は急兵と共ゑ入來り「十分間の猶予が切れました」是ゑて判事は書記に言ひ附け武保ゞ居間へ緊く封印を爲さしめて警察長、區長、憲兵、書記と共に武保を引立て澤部町指して歸り行く跡に案蹟只一人主人の後影を見送りて茫然さりゝ、

○辨護人大川万英（原名、姓オルガー、名マンエー）

星川武保にゝ猶母ゑ父も有り母も有り父母とをに巴里に住む由ゝ既に記せしが巴里の大學町に一際目立つ門構へゝ是れ武保ゞ父母の家あり此家は最興まりゑる坐敷に古雷鼓骨董の類を處狭きまで列べしゝ武保ゞ父の書齋あり父は星川侯爵と呼ばれ今年六十一歳あれと其身体健かゑして其心は確あるゝ年若き人も及ばず今しも此書齋に籠りて古代器物ゑと取出し撫つ眺めつ其手入に餘念を無し此所へ顔の色をへ青冷めて遽しく入來る五十四五の老婦人ゝ此人の奥方侯爵夫人ゑして武保ゞ母あり、夫人ゝ武保が捕縛の電報を受取り魂の消ゆるまでに打驚き斯く遽しく此室に入來りしあり、侯爵ゝ日頃物に騒ゞぬ人あれと夫人の様子尋常あらぬに驚きしゞ徐に器物を傍ゑ置き「何事じや、何ゞ變た事でも有たのか」と問掛けさゞ夫人は打騒く胸を鎮めも敢ず「マア大變でムいますよ 侯「大變とばゝりでは分らぬ何事じや」と云ひつゝ無端身を起し悠々と椅子に寄り「大變とゝ武保が死でもしたのか 夫「夫よりを猶甚い大變てムいます」と電信の紙を取出し「案蹟から是ゞ參ました」差出すを侯爵は受取りて讀下を文に曰く「主人武保様と春逸村ゑ火を放け黒戸伯爵殺を

んと企てさる疑ひを受けたり、其証據澤山ありて主人を辨解し得ず只今拘引、澤部町の牢に送らる、此後如何ゐ取計ふ可きや急至御差圖を願ふ」と有り侯爵は口の内にて讀終り少しの驚く色も無く舊の如く疊み直して卓子の上に置き「あんざ詰らぬ」と呟き〳〵り夫人ハ氣も氣に非ず迫込みて進み寄り「貴方は先ア能くお讀ゐなりましたか、之が詰らないで濟ますか、最一度篇とお讀あをッてー　侯「何んざ詰らない、讀返をぞとも分ッて居るよ、武保が放火と人殺しの嫌疑で牢ゐ送られたと云ふのだらう、已の息子に其様ゐ奴は無い是は何かの間違だから今に放免になるワイ　夫「でも貴方、証據が澤山ゐると書て有ります　侯「ソリヤ何ふせ証據ざ有たから捕縛されたれざ、幾等其筋でも証據の無い者を捕縛はせぬ、ざ併し証據ハ有ても是れハ何かの間違いじや　夫「でも貴方、主人辨解し得ぞと有るでハムいませんか　侯「辨解せぬのは當り前だ、貴族の息子が放火ざの人殺しざのと餘り馬鹿〳〵しくて辨解も出來ぬワヘ、辨解とは身に覺への有る奴らをる事じや、武保が日頃の行ひを知ッて居る者は誰も眞事と思いハせぬ、辨解あをはするに及ばぬ　夫「でも貴方ー　侯「でも貴方、でも貴方では分らぬ、能く考て見るが能ひ武保ハ錦嬢を愛して居たで有ふ　夫「愛

しで居るとは有ません全で小兒の樣に一　侯「夫で錦孃ハ　夫「孃も武保を愛して居ます　夫「夫で婚禮の日は　侯「ハイ婚禮の日ハ一昨日極ッたから二三日の中に婚禮を注文に來ると手紙でゆして參りました　侯「夫見ろ、思ひ思ハるゝ同士で明日にも婚禮しやうと云ふ者ゞ何で他人の家ゐ火を放け人を殺しゐゞそる者か、此樣ゐ詰らぬ事ハ放て置くゞ好い、アヽ詰らぬ事に時を潰した」と車も無氣に言ひ放つ侯爵の此の言葉に夫人も少し心を安んじ初て唇頭に笑を現ハし「ホンに私しハ心配を仕過ますよ」侯爵は頷首ながら「爾よ、母の身として武保を疑ふ程ゐ無判事の疑ふれも無理は無いと人々に言はれるか最ふ其樣な心配をせぬが好い　夫「アヽ漸と安心致しました」と口には言へゞ母として我子の半に在りと聞き爭で安心ある可きゞ又も電信を取上げつ恐々ゐがら開き讀みて「でも貴方ー　侯「又初まッゝ最ふ大概にそるが好い　夫「でも貴方、何だか安心は出來ませんよ、夫ゐ武保は黑戸家と仲ゞ惡いのですものを　侯「でハ武保ゞ其方に何ら言た事でも有るのか　夫「別ゐ申も致しませんゞ昨年星川村の別莊で夜會を開いた時ゐも私しゞ黑戸夫人を招待をると申たら武保ハ目を剝出しアの樣ゐ夫人を呼では夜會の汚れになると云ひました、何でも甚く憎んで居ると見えます夫でも彼れほゞ慈悲深い夫人でもから武保へハ內々で招待致出しましゝら夫人も伯爵も情あく斷ッて參ました何でも武保は黑戸伯爵夫と甚く仲が惡い樣子です　侯「中が惡いからとて無暗ゐ人を殺を樣ゐ武保でも無い　夫「でも貴方、此儘には仕て置けませぬ、何とかして救ひ出して遣らねばー　侯「救ひ出すッて爾ふ譯も無く出されるものか　夫「でも私は出入の代言人を呼で相談致しますよ　侯「夫ハ勝手にするが好いー」此時又も一人の從婢入來り「唯今又此電信ゞ參りました」とて夫人に手渡し其儘立去たれゞ夫人は銳り兼る胸を又も騷せ「貴方大變です、今度ハ錦孃ゝら參りました」侯爵ハ手に取りて讀下す「武保保縛、密獄に入らる至急御出あれ、市中の風說取々、武保愈々罪人ありとも云ひ既に白狀せしとも云ふ、判事は今まで武保ゝ親友の輕錢あり、武保ハ斯る罪を犯す筈あし、妾救ひ出をすゐハ啓かす、夫ゐ就き至急御面會を乞ふ伯母上早久御出を願ふ、錦孃より」と最と取急きし文躰ゐ侯爵夫人ハ魂魄さへも身に添ハす「貴方、私しと代言人を連れて直に澤部町へ參ります、此次の汽車に乘りますを」左しもれ侯爵も今は子を思ふ一念に其意動き初しか深き嘆息を發しつゝ「フム兎も角代言を呼ひに遣らう」と言ひあから呼

鈴を推鳴す、聲に應して入來る下僕に向ひ「代言人を呼て來い」と言附けたるか頓て十分間ゝかりも經つ中に出入の代言人某と云へる人來りければ事の次第をゝ詳しく語るに此人今は差支へあるに由り我代りに此頃巴里の若手代言人中にて旭出の評判ある大川万英を頼み御伴致させ申可しと堅く約束して退きあるか凡そ一時間を過し頃大川万英入來り委細相談を定めし上にて侯爵夫人に隨從ひ此日の夕方の瀛車に乘り澤部町ある山堂家(錦嬢か家)に出張する事とはなをり、是れより此若手辨護人か不思議の手柄を我そ次第ゝ回を重ねて說分けん

第七章

伊國の汽車ゝ遲きを以て世に知られたるか上に巴里より澤邊町までの汽車は是まで途中にて屢々間道ひに有りし爲め遲きゝ上に之遲きを加へ一時間僅に二里餘りを走るゝ過ぎとかや、去れば星川侯爵夫人ゝ岩手の代言人大川ヲ英を引連れて夕方ゝ瀛車ゝ乘りしも其進みの遲き上停車場のみ繁くして休まると幾回なるを知らされは漸やく澤部町に着くゝ翌日の午前七時ゝり出問ゝ侯爵夫人の心配は一方ならず幾度と無く大川に向ひて「チェ大川さん

武保に貴方の辨護で助かりませうか」と打問へと大川は心の中にて判事が容易の事にては貴族を捕縛せさるを知り又之を捕縛せるからには必ず容易あらぬ証據の有んとを知る者あれに確とした返事いせず毎も「左様サ、能く其事情を聞き定めさ上で無くては何方とも分りません」と曖昧に答ふるのみあれば夫人に終に老の目に涙を浮むる事とはなりぬ斯くて心配と嘆息の中に長夜一夜も漸く明け澤部町の停車場間近く進みし頃夫人は憂ひの中より顔を揚げ「子エ大川さん山堂家から馬車を停車場まで迎ひに出して有れば好い者ですぐー大「ナニ迎へか無くとも停車場で乘合の馬車を雇ふて差上ます　夫「でも私しは停車場で泣顔を大勢の人に見られるか厭ですからー」大川に倍と夫人の顔を眺めて「貴女、其様な弱いお心でに了ません、幾等御心配でも其心配を推隠し平氣な顔で大勢の中を割てお歩き成らんでにー若し貴方のお眼に少しの涙でも浮べれば大勢の人は必ず其を見て母親までも既に武保を罪人と思ッて居ると斯ふ申ます此澤部町に狹い所で一人の噂が直に町中廣かりまそから貴方さへ確りなされば人の噂さを打消します、裁判お噂ゆと恐ろしい者に無く陪審官あとは全く世間の噂さばかりで罪を定めるのですから何でもお顔を上げて大勢の中を練歩かねはなりません、爾すれは人々は貴女を見て流石に母親たけに充分息子に罪の無い証據を持て居る様たと申ます、サ最うお嘆きに是れ切りになされませ」と信切に寛められ夫人は初めて合點行きしか「成る程其通りで有ります最ふ泣顔は致しません、息子を思ふ母の一念でそ者を一人々の疑ひを晴しまそ」と云ひつゝ手提の中より櫛を取出し其髪を撫で上て猶ほも身姿を修ひつ「サア是で好うムいまそか」と笑を含みて大川に打向へば昔し幾多の少年を惱殺せし花の姿さへ思ひ遣れて今まで憂ひに沈みたる老婦人とは見違ゆるばかりなり、其中に汽車を早や着きたるが澤部町の人々に既に侯爵夫人が此汽車にて來るとか聞知り我も〳〵と此所に詰寄せ居エソレ人殺しの母ぢ來た、武保の親ぢ來たと口々に罵られそ夫人に恐るゝ色を無く大川ぢ手に綿りて込合ふ人を押分け〳〵大道の方へと進む中にも人々の様子を見るに果して大川の言ひしに違ひす夫人の活潑ある様を見て罵しる聲さへ稍や鎮まりたれば夫人に益々力を得、群集の中に顔知り合ふ人もゐる故其傍お進み寄り「何ふも飛でも無い事が出來ましたぢ聖人の様な私しの息子お失敬お疑ひを掛けるとに幾等田舍の判事でも呆れた者です、テも先ア打道エも慣けませんから巴里第一等の辨

護人と一所に參りましたが孰れ近日の中に息子の手を引ぬて緩々と伺ひます、今日は山堂家で待て居ます是切りて御免を願ります」と容ず聽せず立廻る其甲斐〳〵しさに人々い烟に卷かるゝ想ひを無したり斯る扮しも馭者の禮服を着したる一人の男、夫人の傍ゑ進み寄り「山家堂よりお迎ゑ參りました」と丁寧に述べたれば夫人い之を機に人々を後に見つ大川と共に其馬車に打乘りて山堂家指して急がしたり、抑も此山堂家と云へるい其昔し貴族の末に連りで男爵の位地を占しとかや今い一殺の平民あれと其家の富るとい澤部町第一あれば人に劣はるゝとい遙かに貴族の肩書に勝れり其當主は年若き美人にして即ち武保が許嫁けの錦嬢あり錦嬢が幼き時父は決鬪の爲め他人ゑ殺され母は夫を苦ゑ病みて間も無く世を去たれと祖父直家と云へる人猶ほ達者あれば錦嬢の後見と爲り今も山堂家を支配せり直家と錦嬢の外に猶ほ山堂家の家内二人あり一人い錦嬢が母の姉、一人い義妹、都合四人の暮しにて其外は下女下男のみなれば錦嬢い祖父と叔伯との慈愛に育られ何不足あく人と爲りしが日頃此家に出入そる紳士貴公子の中にて錦嬢い何時しか星川武保を見染め心の中ゑて唯一人の夫そと思ひ定め又武保も同じ想ひに胸を焦し終には其事 錦嬢の祖父に打

明けしゑ、祖父い唯た孫を愛する一心にて殊にい日頃武保か行ひを知り未頼母しき男兒あるを知る者あれば一も二も無く其言葉を容れ錦嬢と武保とを表立たる許嫁けと爲したり、是より武保と日々山堂家に往き宛も家内の如く暮し居る中錦嬢も滿二十歳と爲りければ愈〳〵近日の中に盛ある婚禮を行ふ可しとて日限まで定めたるに其翌日に至り武保縛捕さるゝ事と爲りければ錦嬢は驚きて武保ゑ母に電報を出せしあり嬢は夫をり祖父直家及ひ二人の叔伯と額を合せ武保を救ひ出そん事をのみ相談をし居る中、終に翌日の九時頃と爲り武保ゑ母は大川万英と共に馬車に乘りて此家の玄關ゑ入り來りぬ

星川侯爵夫人と代言人大川万英の馬車、山堂家れ玄關ゑ着くや待兼居たる錦嬢い案内も待そ飛で出で早くも夫人の手を取りて奥の室に誘へば大川も其後に從ひて進み入れり茲には嬢か祖父直家老人を初めとし二人の叔伯御も並び居る故皆々一通りの挨拶を爲せしが孰れも何を言出して善からんか唯心配顔に額を寄するのみあれば錦嬢は見兼けん優しき手ゑて卓子を叩いて立ち「皆さん心配には及びません武保ゑ罪ゑ有れば救ふ事も出來ます罷いが彼れゑ罪の無ク事い私しゑ存して居ます一昨夜(犯罪の夜)武保は此家へ來る筈になッて居

たれを午後四時頃に爲り捨置難き用事か出來たから今宵は行かをぬと斷りの手紙を寄越しました其手紙は全紙に四枚まで長〳〵と書て有りますが武保か若し惡事を計みアの晩人を殺す程あら決してアの樣あ落着た手紙い書けません既に祖父樣にも其手紙を見せましさか私しは是れが潔白あ証據と思ひまそ、此通潔白な武保ゆゑ既に巴里ゝら名高い大川さんも御出にあれば心配ふい及ひませぬ心配をりは直樣救ひ出す手續か大切ては有ませんゝ」と少女に稱ある氣象を現はし一坐の人を勵せば直家老人も言葉を添へ「イヤ最ふ全く孃の云ふ通りじや今にも人を殺すと云ふ大事を控へた身ては迚もアれ樣あ手紙は書けん何でそ武保い惡人の謀畧ユ掛ッたに違い無ゑ、惡人どもゞ前以て武保に疑ひれ係る樣旨く仕組て置ゑ為と見廻る、之を見露いすい御苦勞なゝら唯今ムッさ大川殿の御骨折を願はねばなりまんー」と言ひあから大川を打見遣れば 大「如何にも仰せの通り直に其手筈に取掛りますが何を申そにも只今參ッたばかりゆゑ篤と事れ本末を伺はねばなりません 直「所ゞ困ッさ事にい離を其本末を詳しくは知らぬテ、唯た密獄に下されたと聞たばかりて 大「でい其捕縛ふ臨んゞ人に逢て聞かねばありますまい、全躰誰れか出張しましたー」此時錦孃の叔母御い進み出で「出張したのい輕袋と云ふ性惡判事ですよ、私しい口悔しくて成りません、先ア聞いて下さい此輕袋と云ふ奴は是まで此家へも出入ま殊に武保とは懇意ふした上私しどもの緣家の娘を妻に呉れとて最ふ其約束まて調ッて居さのでそよ、其もアの樣あ惡人とい知らず私共も輕袋の口先に欺され丁度好い夫婦か出來るたらうなと〻申して居りましたら其義理も忘れ今は自分ゝ先に立て武保を調へて居るを申します先ア惡ゑてい有りませんか」と淺墓なる女心の恨を數々述立れは大川い迷惑かり「イヤ夫を御尤てい有りますか私しは捕縛の手續や証據もの抔を承まいり度と存しまそ、何ても昨日出立の節星川侯爵に伺かひましたにと區長仙田何某に就て問ひ糺すか近道じやと仰しやりましさ」直家老人は進を出て「アゝ仙田長禮なら拙者の弟も同じ事ゞアレい成る程初から其場にゐさから詳しく樣子を知つて居る、逢いさくは私か連れて行て進せる 大「夫ハ誠に幸でそ唯今直樣御同道か願ハれませうか 直「願はれまそとも直に行きませうーコレ下僕とも別當ゆ馬車の用意をさせろー」之にて大川は直家に伴れ直樣區長仙田長禮の家に至りしゝ、抑も此長禮は山堂家と極めて親密の間柄にて直家とは久しゐ交りゐる上に錦孃を子の如く愛しめは此度の事

拠に就いても第一に山堂家に馳附る所なれと唯錦嬢の悲みを察し今まで控へ居たりしとな り頓て直家と大川は共居間に打通り直家ハ大川を仙田ヨ引合せたり大川ハ部に倚子に就き 仙田に向ひて「今日参りましたと外ても有りません春邊村放火の一條て有りますか私しは 武保辨護ヒ事を托されましたれと未た事の本末を知らも其外何彼に就け當地の事情は不案 内て有りますから貴方に伺へは分ると存ましてー 仙「此事件ハ中々以て容易あらぬ次第て ー」言ひ掛けて考ふる様子に直家は氣を燥ち「でも君は武保に罪の無ム事ハ疑ふまい 仙「 夫れがサ、若い中ヨは一時の腹立て飛んゞ事を仕出來も場合が儘あるのでー」直家ハ益々 燥立て「でも武保ゞ腹立紛れに此罪を犯し急と云ふ筈ハ無い 仙「イヤ足下は未だ詳しく御 存あいから爾思ふゞー」此儘捨置かハ二人爭論をも始ち兼ざる様子なれば大川は口を出し 「詳しく存ませんから此通り伺ひヨ上つたので有りまも何ふ事の次第をお聞せ下されま せ「仙田は之をり一昨夜春邊村に出張せし次第より黒戸伯夫婦の様子太々郎取調べの事星 川村へ出張し星川を捕縛せし始末まで事細に述了りつ扨云ふ様「固より武保殿が豈夫此様 ヨ罪を犯すとハ思はれぬゞ兎に角証據は此通り餘る程あるから輕錢の捕縛せぬ譯に行ヨく

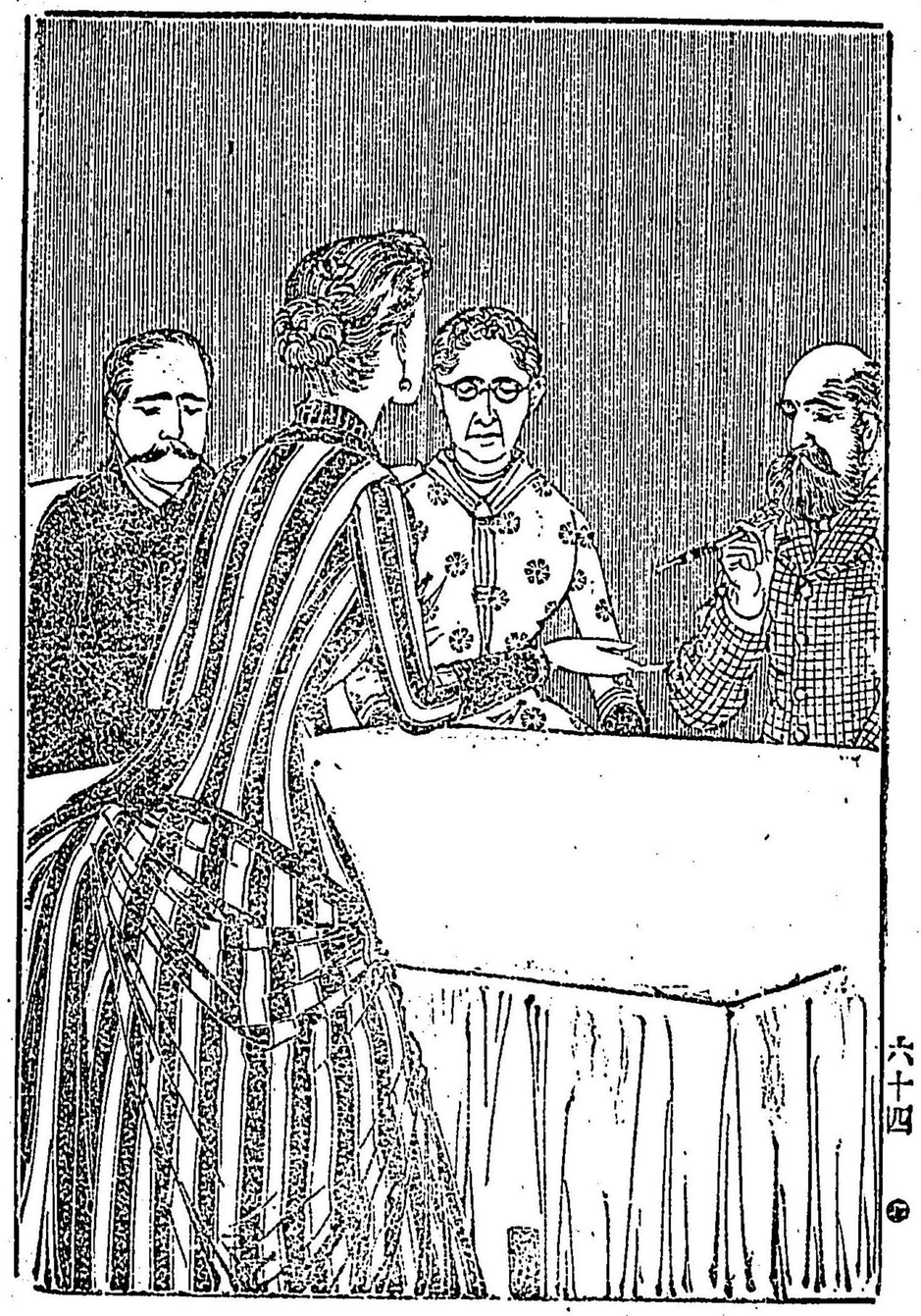
成ヨのじや夫ヨ尤も不思儀ヨのは當人がサ、アの晩何所に何をヨて居ヨか其の辨解が出來 ぬから困るて、若し此罪を犯さねば云云の所ヨ何々の用事を仕て居たと明かに言ひ相ヨ者 じや無いか」と充分武保に罪ヨる事を匂ハして述了れば耳を澄して聞ヒ居たる大川ハ眉顰 顰め「成る程ー是で見ると武保殿は何の様な事ゞ有てヒ他人に知らせて成ラぬ大事の秘密 を持て居るに違い無ム、其秘密を知られては成らぬから一寧殺されてヒ隠し通ヒ積りと見 ヒる 直「幾等大事の秘密が有とて、放火殺人罪の嫌疑を受けなゞら夫を甘んじて黙ッて居 る奴も無いもんだ 大「爾で有りません自分で覺への無い罪を受けヨがら日に間れぬ事情が 有て何の辨解もせず甘んじて首切臺へ載られた人は幾等も裁判例に出て居ます武保殿も其 一人かも知れません 仙「夫ては貴方は武保殿を此度の罪人て無いと思ひますか 大「唯今伺 つた事實ゞけでハ先づ罪人ハ外に在ると思ひます 仙「夫ハ又何ふ云ふ譯で 大「別に深い譯 ハ有ませんゞ初め判事が踏込んだ時武保殿ハ情談ゞと思ひ最ふ好い加減に仕給へと云ひま した、身ヨ罪の有る人が斯様ヨ大膽ヨ事ゞ言ハれませうか、若し罪ゞ有ながら此言葉を發 したとすれば武保殿ヒ實に非常ヨ英雄で有ます、所ゞ愈々笑談で無いと云ふ事が分つヨ後

は何の辨解も出來ません若し貴の罪人あらば必ず其場を言ひ衒めるさけの辨解を前以て考へて置きます、之を考へて置ないのと大馬鹿です、シて見れば若し武保殿を眞の罪人とそれば武保殿ハ初にハ大英雄で一時間も輕ぬ中に大馬鹿と成さのです一人の人が大英雄と爲り又大馬鹿と成るなどゝは決して有る筈が無ム故此罪は武保殿でハ無く必ず外に有ませう殊に又罪を犯したならば決して手を洗つて水を其儘椽側へ置きませぬ必ず捨て仕舞います若し夫でも武保殿を罪人と云ふなら武保殿ハ水を捨る事さへ知らぬ故正氣の沙汰で有りません何ふしても狂人です、牢屋へ送る前に先づ瘋癲病院へ送らねばありますまい」と無類の詭辨を振つて言廻せば仙田ハ答へん言葉も無く、之に引換へ直家は小躍して「アヽ其通りじや其に違い無い、アヽ最ふ是て武保ハ助かりました

第八章

○林町（原名パアシ街）○英人丸瀬（原名マルセット）

代言人大川万英は言葉を嗣ぎ「何を云ふにも今少し實地に就て取調べねばありませんが其太々郎と云ふ者ハ何所に居ます」區長仙田は頭を搖き「イヤ彼れハ何の証據ふも成りませんが丸切の大馬鹿ですから、夫こ醫師關登氏も今一應太々郎の智慧を檢査しゑムとて警察長富地に願ひ出で富地から春邊村へ巡兵を差立たれど太々郎の行衛ガ分りません太々郎ハ幼い時から森や林の中で育たので森へ這入れば一月も出て來ぬ事を有りますし全で獸の樣に穴あどの中へ寢て居るので誰も探し出せ事が出來ぬと申ます 大「夫は困りましさ、兎に角星川村へ出張して、及ぶだけは調て見ませう）と云ゑば山堂直家老人喜びて「イヤ最ふ大川氏の手際で實地を取調べれば必ず無罪の証據ガ出るで有う早速出張致さう」万英と直家は之にて仙田に別を告げ馬車を急し星川村に向むしガ直家ガ馬は名に高き駿足ある故半時間も經ぬ中ふ星川ガ別莊の門ふ着きたり二人ハ降て進み入るに玄關に顏形の逞しき少年あり出入の番を爲せり此少年ハ直家を知る者と見ゑ帽子を取りて叮寧に「案瀛殿は二階にゐまそから直樣ふ上りあされまし」直家は万英と共に二階に上り見るに階子段の上に柵を結び遮む事の出來ざれば怪みあがら案瀛々々と呼立る聲に應じて彼方の一室より出で來るは案瀛あり案瀛は柵の一方を開きて二人を誘むしが見れば室毎の入口に裁判所の封印あり殘るハ案瀛ガ室と食堂のみなり三人は其儘食堂に入り各々坐を占めしが案瀛は不審相に大川



の顔を眺むる故直家老人ハ先づ言葉を添へ大川ハ星川の辦護人にて今日實地取調べに來りし故知れる事柄ハ伏藏なく打明けて語る可き旨を告るに案藏初めて安心せし如く「旦那樣、輕錢と云ふ奴は餘程酷い奴ですよ今日此所へ出張して室毎に封をして行きました、夫に此封に指でも障る者が有れば嚴敷く問をるゝ番をしろと私しに言附ましたゆゑ私しハ の通り階子段ハ上へ柵を結び誰も入れぬ事に致しました 直「イヤ其樣な事は何でも善いゞ武保の今までの行ひに何かお前の不審に思ふ事は無ッたか 案「何も不審は有りませんゞ昨日の朝取調べの時に武保樣の云ふ事は一々犯罪の證據の樣に聞へましたから私しも一時は本統に武保樣に罪の有る事かと思ひ迎も通れぬゝら窓からお逃あそばと勸めまして今と成て能く考へれば武保樣が罪を犯す筈ゞ有りません何でも誰か武保樣を嫉む者が前以て旨く仕組で置た事と思ひます夫に一ッ武保樣の申立の中ゝ心配て叶ぬ事ゞ有りますから先程から何ふかして此封を破りお居室へ這入ッて見度と思ひます」今まで無言にて聞き居たる大川ハ樣子有り氣あ此言葉を聞ク初めて口を開き「イヤ何の樣な事か有ても室毎の封を破ッてはありませんゝを破れは室の中に在る証據品を取り出ず爲と思ハれますから武保殿ハ辨

護か益々難くなります、だが併し何が左様に氣掛て有ります　案「主人の鐵砲ゝ氣に掛りまず昨日調べの時に主人は四五日前兎を射さ儘ゞと申ましさが夫か主人の思ひ違ひで、實は一昨日主人の留守に私しが鐵砲の掃除を仕て置きました、だから彼の鐵砲を能く見れば主人の罪か分ります若し掃除した儘で、筒口か少しも燻ぶッて居無ければゝ主人か無罪の証據にあります」大川は此言葉に感心し「成る程、是は容易ならぬ事柄じや、筒口か汚れて居あいなら辨護上屈强の証拠と爲るか一併し若し汚をて居るとー大變さ　案「私しも夫ゝ心配だから密そり筒口を檢め度と思ます　大「ても居間の封を破る事は出來ぬ故、此次に裁判所から人でも來た時一寸と覗いて見るゝ好い、夫よりは先づ武保殿は日頃の行ひを聞きゑゝが全體武保殿は何ふ云ふ人々と重に交際をしましさか　案「此家へ繁々出入ゑたゝ輕袋でも、外に區長仙田、警察長富地なとも折々參りまゑさ、其外は巴里の友達か此邊へ避暑なとに來て立寄る事の有るばゝりても　大「夜ゝ毎でも家に居ましたか　案「イヤ夜は大抵山莊家へ行き十時十一時に歸りました　大「是まで何にか婦人か關係して何ふ斯ふと云ふ事ゝ有りませんか」此問ひを聞き案藏ゝ迷惑さうに大川の顏を見れば傍に居たる直家老人ゝ早くも其意を察し「アヽ拙者ゝ餘り迫た爲か頭痛がするから庭先を散歩して來ませう」と其儘立ちて出行きたり、是れ直家と錦孃か祖父ある故假令ひ武保さ今まで婦人の關係ありしとそるも案藏か直家を憚りて口外せざるゝ必定あれは故と氣を利せて此場を外せしなり、大川も其心を悟りされば安心して言葉を續け「コレ案藏殿今は誰も聞く人ゝ有りません隱してゝ主人の爲ゑならぬ故伏藏なく知せて下され　案「でもー口外せぬと堅く主人に約束して有りますから」と云ふゝ武保に何か秘密の有る証據あれば之を聞かねば此事件の本末ゝ分らずと思ひ益々言葉を切にし「約束を守るも時に由ります今ゝ主人の一命をへを危い場合ゆゑ包むは却て不忠義で有ませう」案藏ゝ暫く考へ居たるゝ漸くにして言葉を開き「何でも巴里に居る頃大變な愛情事件が有ゑと申ます　大「夫ゝ何ふまて　案「是ゝ最ふ大旦那も御隱居樣も全く御存じ无無い事ですがー何でも主人は或婦人と密會をる爲めに巴里の町盡れゝる林町に一ッ別莊を買て有りました私しも知りませんでしたゝ或時主人の伴をして獵に行く道で主人が誤つて馬ゝら落ち怪我を致しまゑさ其時主人は林町の云々しゑ家へ連れて行て呉れと申ました、尤も其家ゝ主人が本名を隱し英人の九鎖某の名前で買入たので主人も自

分り英人丸瀬さと申て居さのでを其上に下女を英國の女を使つて居ました　大「夫で其忍び合た婦人と云のハ　案「夫ゞ私しにも分りません、何でも非常に用心深い女と見受ます、私しも探る積りで其下女に問ひましたゞ下女の云ふには夫人ハ毎も濃ク覆面をして居る故少しも顔と分らぬが併し身姿ハ非常ユ立派さと申ましさ夫に其婦人ゞ來ると毎でも詰らぬ用事を云ひ附け下女を一日も掛る樣な所へ使ひに出したと申しまを「此意外ある言葉を聞き大川ハ暫し默然として考へ居さり

○壯夫道次（原名ミチエル）○牢番蘭太郎（原名フランキン）

「怪しき犯罪の底には必す女あり」とは探偵家の格言とかや今星川武保の犯罪ハ實に怪しき犯罪なり去れは代言人大川万英と案藏か話に武保か或婦人と林町の別莊に密會せし事を聞き此女ゞそ必定武保か犯罪の元なる可しと心に思ひ附きたれと猶ほ倩々と考ふれは假令ひ斯る密會ありたれはとて夫か爲め春邊村に火を放つと云ふ因緣も無ければ偖ハ此度ゞ事件ハ其女には何の關係も無き者かと種々に按じ煩ひあから又を案藏に向ひ「夫で武保殿ハ今でも其婦人と懇意にさるさか　案「イヤ最ふ手を切たとさ思ひます夫で無くてハ主人武保

か錦嬢と夫婦約束をさる筈か有ません」此返答は猶ほ充分あらねと大川は問も返さを又も言葉を進め「何時頃手を切たと思ふますか　案「昨年の軍（獨佛の戰爭）の時に手を切れさと思ひます主人ハ軍ゞ時に此村ゞら出た有志兵の隊長と爲り戰場に出張し傷を負ふて歸りましたから　大「シテ林町の家は未た武保殿か所持して居ると思ますか　案「多分所持して居ると思得ます　大「夫ハ何ふ云ふ譯で　案「軍から歸ツさ後に主人ハ別莊ゞ話しを致し此度の戰爭にアの別莊は兵營に充られ非常ふ雜作あとを毀めたから之を修復さるには二千圓から掛ると申ましさ故　大「ナニ修復する、夫でハ武保殿ハ再び其別莊を密會所にする積りで有ッたのかナー　案「でも夫は未さ錦嬢と許嫁にあらぬ前でさもの　大「夫でも軍の濟だ後まで緣を切らさに居たかも知れぬ　案「夫は何ふとも申さをません　大「其後武保殿か其婦人の評說を仕た事か有ますか　案「決して有ません」と答ふる折しも前に此場を外したる直家老人歸り來しかば大川ハ言葉を返らし　大「犯罪の有ッさ當日主人の樣子に異ッた事ハ無かッさと云るハか　案「別ふ代りません午後の四時頃居間から手紙を持て出て來ましてを錦嬢ふ届けて呉れとて道次に渡しましたー道次とて此家ゞ門番の息子で今玄關に番をし

て居る壯者でも　大「成る程ー其手紙には大切な用事ゞ出來さゝら今夜行く事ハ出事ぬと書て有ッたのゞナー君ハ其用事と云ふのを御存じ有ませんか　案「少しも存じません　大「でも我許嫁の女に逢ふのを斷る程たから大切な用事にハ違いない　案「左樣です　大「其上武保殿が林の中を潛り沼を渡ッたと云ふも不審識の一ッ、何故大道を通らぬんだか君にハ分りませんか　案「分りません昨日輕袋も其通りの事を尋ねましゝゞ主人は返事ゞ出來ず、武市村に居る領地番の所へ行ッたと申しましゝが是は全ぬく一時の言拔でも　大「何故　案「でも領地番ハ武市村には居ません、三年前に引越して今は此家の直背後に住で居ます」大川は手帳を取り出し案藏の言葉の概略を書留ゑつ「是れから太々郎のことを聞きたいが彼れは何ふしゝ男です　案「イヤ最ふアレハお話しふあらぬ大馬鹿で、尤とも其の實馬鹿では無く他人の憐れみを受ける爲ふ馬鹿の眞似を仕て居ると云ふ人も有りますれど小兒の中から全くの馬鹿に違ふ有りません　大「太々郎の行衛ゞ知れぬと言ふが探し出す工夫は有りませんか」案藏は思按顏にて「アレハ山へ隱れて一月も出ぬ事が有りますから一度隱るれは誰にも目附りませんゞー併し今申を道次ハ詳しく林の案内を知り殊に太々郎を連れて山へ行く事あとを有ますから兎に角呼で見ませうか」ヤを云ひつゝ立ちて道次を呼び來れり道次ハ此の趣きを聞て「イヤ太々と云ふ奴ハ丸で兎か猿の樣に木の上で寢る事も有れば穴の中に居る事を有るから容易には分りませんが先づ探して見ませうと」承諾たり、是にて最早や取調べも濟みたれば大川は猶ほ案藏に向ひ重ねて判事の來りし節ハ彼の武保が鐵砲の筒口汚れ居るや否やを精々見屆け可き旨を言含めつゝを告げて直家老人と共に待せある馬車に乘り山堂家指して歸り行けり　○新し替ッて山堂家にては直家老人と大川万英ゞ出行たる跡ハ錦孃ふ二人りの叔伯を合せ之ふ星川武保が母を加へて女のゝ四人なをは初の中ハ互に心配を推隱し老人と大川の歸りを待居さるも一時間二時間と過ぐるに連れ四人は心細きに絶ず武保が今しも牢の中ふ苦み居るを思ひ遣り互に嘆息をのみ發しつゝ果は皆々其眼に涙を浮ぶるまでに至りしが中にも錦孃ハ堪へ兼ねて星川侯爵夫人に向い（私しハ最う斯して居られませぬ是から武保ふ逢て參りまを」と云へゞ同じ思ひの侯爵夫人、聞くより早く飛立ちて「其方ゞ行あら私しも一緒に　伯「私も　叔「私も」と四人直ちに相誤は纏まりたり去れと武保ハ密獄に在る者あり固より面談を許さる可き筈は無けれと四人は唯さ密獄と聞

きて密獄の意味を知らねば唯〻相思ふ一心にて、逢れぬ事とゝ知る由も無く殊に牢屋の門番ある蘭太郎と云へる者の妻其昔し山堂家に奉公なし錦嬢が幼妃頃嬢の侍仕へを勤めし者あれば四人ゝ之を力に家を出て馬車一走り直に町盡れある牢屋の門口に着きたり蘭太郎ゝ四人が馬車より出るを見て最驚ける躰なれば錦嬢早々も進み寄り「蘭太や星川の若旦那に逢しをお呉れ」蘭太郎ゝ眉を顰め「免し狀を貰つてお出ゐ成りましたか　錦「免し狀は誰れゞ呉れる　蘭「掛判事輕錢様ゞー　錦「イヱ其様な者は貰て來ぬ　蘭　夫でゝお逢せ申す事ゝ出來ません輕錢様から嚴しく言附ッて居ますゆゑ　錦「でも此貴婦人は武保様の母様だよ、星川侯爵夫人ゞよ」蘭太ゝ最も迷惑の躰にて頭を掻きながら「イヤ何方様でも了ません私しの一存に成らぬ事でもから」錦嬢は初めて此面會のあらぬを悟り泣も出さん聲を絞りて「お前は私を忘れるかへ、私の家ゐ奉公した事も有るでゝ無いか夫を思ひ子を思ひ卵あき婦人の此願ひがお前の耳にゝ入ぬのかへ「蘭太ゝ益々當惑し「イヤ最ふ貴家様にゝ一方ならぬ御恩に成て居ますゆゑ外の事なら何ふとも致しますが是ばかりは私しの力に及びません」とて聞入べふもあらざりき

第九章

○牢屋の番人鶴之助（原名ツルメンス）

錦嬢ゝ武保に逢はで歸るとは口惜ければ僧も蘭太郎に向ひて言葉を覆し「何ふしても逢せるとゝ出來ぬか他」蘭太郎も辭み兼けん暫し默然たりしが「お逢せ申しては私しの役目ゐ拘ゝりまを　錦「若し逢せて呉れる爲め免職になる様なら今をりゝ倍も二倍も善ひ身分に仕て遣るよ、夫でも逢せてゝ呉れぬのか他　蘭「イヤ免職よりも嚴しい罰を被らねばありません」傍に有りたる侯爵夫人は聞くに聞兼ね「コレ嬢や其様に冗く云ふ者では有ません外歸りませう」錦嬢は涙を催ふし「武保の安否も聞らぞに歸りますろ、此邪堅な壁一重を隔て武保は最ふ死で居るかも知れませんよ」免と云ゝるゝ牢番なれど嬢ゞ愁嘆を見兼しか釈を忘れて聲を出し「嬢様、ナニ其様ゐ御心配には及びません、イヤサ牢番の身として斯様な事を知らせては成りませんゞー武保様は何の異狀も有りません、昨日牢へ來ゐ時ハ氣拔でもしたのか一時間ほど倒れた儘で泣てゝも居るかと思ひましゝが頓て起直ッて、ナニ失望そる事は無いと仰言りました」侯爵夫人ゝ此言葉残聞き稍や心配を輕めし如く「オ、失

望そる事は無と言ウたのか、其ニ葉、お前ら聞たのか蘭「イヤ何に、聞たのハ私しで有りません武保様の牢を番して居る鶴之助と云ふ者が聞ました、此鶴之助は無宿の爲め此牢へ入れられた男で外の囚人の使や番を致して居ります、夫も牢の中で失望の餘り自害する人が有りますゆゑ若し武保様に其様な事ら有ッてはあらぬと輕錢様が此鶴之助に見張をさせて有りますのでー」錦嬢も侯爵夫人も身を震ハして驚き恐れ二人均し之聲を合せて「夫でハ其見張ら無ければ武保は自害も仕兼ぬほど失望して居るのかへ」蘭「イヤ何是ハ萬一の時の用心でも中々自殺ゑとは成れません、今日ハ最ふ悉皆日頃に歸り今朝起きてから嬢様に宛て一通の手紙を認め之を山堂家迄屆けて呉れとて私しにお渡しになりました」錦「お前ハ其手紙を持て居るの」蘭「イヤ持てハ居ません私の役目ですら輕錢様に渡しました輕錢様は謂終り、好々と言ゑから衣囊迄入て仕舞ました」錦嬢ハ活と怒り「ナニ輕錢ら其手紙を横取したとや、夫婦の手紙ハ神聖で政府さ迄開之とハ出來ぬと聞に夫を輕錢が、開封、横取ー夫ハ餘り失敬な」、と言ひ捨て唯一人馳も歸らん様子あるにぞ二人の叔伯は周章て引き止め「コレ〻腹には及ばぬ其手紙は私くし達ガ取返して遣るアの輕錢は一昨日まで私達の前でお辭宜ばかり仕て居た奴ざもの」、錦嬢は漸く氣を取直し夫では叔伯さん直に輕錢の所へ入しッて下さい、私しは餘りの事に最ふ茲には能う居ません阿母さん(侯爵夫人)と二人で歸りますから」とて嬢は侯爵夫人と共に家路を指して歸りしろ二人りの叔伯は直に輕錢の家に急ぎ行けり、扨も輕錢は初先此事件ゑ提はりてより武保を拘留するまでは犯罪の証據、續々と現はれしが此事件こそ我爲めには出世の階段なれと唯功名の一念ゑ浮されつ深く省み遠く慮料る暇さへも無ゝりしに愈々武保を牢に入れてよりは茲に忽ち心配の念起り萬一にも武保、其の罪人に非ざる時は此事件我が過と爲り我名ハ汚れ我職は貶されん如何にあすとも武保を罪に落さねばならぬと今ハ只ざ理も否も無く一念に武保の罪人なるとを願る事とはあれり去れば武保か取扱ひハ厳きが上にも厳しきを重ね牢番を増して守衛を厳重ゑするのみかは萬一を思料りて其手紙をさへ取上つゝ只管に己が手柄の成就をのみ考へ居たるなり斯る所へ錦嬢ら二人の叔伯訪ひ來りしろば輕錢も一旦は面會を遮絶んかとまでに思ひたれど之に逢て親しく其嘆きを聞きあば武保ら罪を定むるに都合よき事の有りもやせんと思案を定めて二人を居間に通したり二人は輕錢ら顔を見るより早く憎しと思ふ心を

包み得ず輕率者よ義理知らずと數々こ罵るを輕錢は職務を名として夫も役目ゆゑ詮方なし是も職務なれば止を得ずと一々こ言ひ開たしが二人の婦人い頓て輕錢ゑ迫り「貴方は其手紙を讀だから最ゑ如いでは有ませんか讀終た上い錦嬢の手紙でそのに何故早く屆けませんイヤ取調べの濟むまでは夫も出來ません」二人「屆ける事が出來ねば其中に書て有る文句を私し共に見せるのは差支へ有まそまい」輕錢も最早や其言葉を拒み得ぞ已ゞ衣嚢より件の手紙を取出して差示すゑ二人りい手帳を取出して忙はしく寫し取れり其文ゑは「錦嬢よ余が牢に下るを聞かば御身が愁氣の程は何如ばかりかと察し入りい、御身の知る如く余い潔白の男兒、眞に無罪の身あれども種々入込みたる事情ありて今は言解く事さへ叶わず去れど覺へ無き身の罰せらる可き筈あきゆゑ余は遠からずして身に罪なきとを示し得ん少しも心配に及ばぞい」と有り短けれども潔白の手紙あれば二人りは其寫しを持ち勇み進んで山堂家に歸り來れり

話し更ッて直家老人と代官人大川万英い星川の別莊にて下僕家臣に様々の事を問ひ糺し太々郎取押へあとに事を命じ置きて山堂家に引返せしが歸り見れば内には唯ゞ錦嬢と侯醇夫人のみあれば直家い錦嬢ゑ向ひ「叔伯母達は何所へ行た」と問ふに嬢い先程星川武保に逢はんとて牢屋に到りし次第より二人の叔伯母が手紙を取返さんと判事輕錢の家に行きし事を語りければ直家も大川も心の中ゴて嬢等が爲せし事の宜しからぬを悔ひ密獄ゑ在る武保に斯く強て面會を望んでい判事は益々武保を疑ひ彼を罪あればこそ親類縁者ゑ斯くまでに心配するあれと思ふ事必定あるに夫を知らずして女心の淺慮ゑも事の茲に及びしは返すゞも失策なりと心には後悔すれど其後悔を口に出してた益々嬢か愁嘆を重ぬる謂あれば二人は唯ゞ顔を見合すのみ、斯る折しも二人の叔伯母は輕錢を詰り彼れ手紙を寫し取りて歸り來しゐば嬢い先づ受取りて讀終り次で之を直家老人に渡し示そゑ老人は直に大川万英に渡したり大川も先づ嬢に向ひ「此お手紙拜見して宜ふムいますゐ」と問は淑女ゑ對する紳士れ禮義とかや、頓て万英い讀終りて人々に向ひ「何ふしても此事件には餘程込入た事情が有ッて其事情を武保殿の口からは云ふ事ゑ出來ぬと見へます此文に一余は眞に無罪の身あれども種々入込みたる事情ありて今い云解く事さへ叶わずーと有り又一余い讀からぞして罪無きとを示し得んーと有ます、私しい初から斯あらふと思ッて居ました、此事情さへ聞

出せば武保殿に罪の無とは必ず分りませう」と口には言へど心には留武保初をり此手紙の必ず判事の手に落るを知り判事の心を暗ませんとて殊更に斯く事情ありげな文句を記せしには有らぬかと私かに危み思ひたり錦嬢は之を聞き「爾に違いは有りませんし武保が早く判事に其事情を打明けて仕舞へば好のみー」と咳きたり此時取次の者入來り「只今星川村から道次と云ふ者が玄關まで參つて居ます」と告ぐるゆゑ扨ては彼れ太々郎を尋ねあぐみて其旨を通じゐ來りしかと直家嵯英い先立て玄關に出見れば思ふに違いて道次は太々郎を連れ來りしに有りければ直家い喜びて其手柄を賞めたてたり代言人大川は今初めて太々郎を見る事あれば氣を留めて其樣子を眺むるに口に泡を吹きギロと人の顔を眺むるい初めて山より捕へ來たる猿の目に異ならず「アヽ好く探し出した」と賞めそやせば道次は誇顔に「イエ最ふ憲兵でさへ探し得ぬ程ですから仲々骨が折ました林の間の岩の穴へ隱れて居たのをヤツとの事で引出しましたがコレ此通り手首へ食ひ附れました」と云あがら其袖口を捲り上れば手拭にて傷を包み其上に血さへ浸み出たり大川は太々郎に向ひ「お前い何故此人ゐ嚙附さ」と問へども何の返事もせず 大「お前は星川の旦那が火を附ける所を見さのか」

と云ども更に眼じあし 道「イヤ旦那、何をお問ひあさつても駄目ですよ此奴は一度口を閉ぢれば打をても殺され掛けても決して言を云ひません」大川は嘆息して「アヽ此樣あ大愚人の言葉を証據ゆして吟味を初めるとは實ゆ珍らしい裁判だ」と咳きあがら獨り奥の方に退そきしが暫くありて一通の手紙ゆ持ちて出來たり道次に向ひて「此手紙を持て此太々郎我直に區長仙田の家へ送り届けて貰とふ、爾すれば區長から此奴を慈善家共立病院へ入れるから 道「イヤ旦那アの病院へ入れても駄目でそを、先にもアの病院の院長關登樣ゆ半年ほど療治しさけれど此奴と少しも直りません 大「イヤ夫でも善から連て行て呉れ」道次い此言附に從ひ手紙と共に太々郎を區長の許に送り届けしが仙田い是ぞ此裁判の證人なると思へば粗末にもあらそ此旨を判事輕義と警察長富地の兩人に屆け置きて太々郎をは共立病院に入れたりとぞ

第十章

慈善家共立病院の醫員長關登と云へるは前ゆ記せし如く黒戸伯爵の傷所療治を引受けし人なるゆ此人既に年い五十を越へされど極めて血氣壯んの質にて特には此上も無くゆ儘知氣

の性あり去れど心は至て正直にして少しにても曲りし事を嫌ひ直に腹を立て又直に機嫌を直し、且て醫者の業よりも似合しからぬ常に政治の事ゑ心を留め頗ふる共和主義に熱心し共和主義を熱心し共和黨の人を見れば身を盡して之を愛し帝政黨の人と聞けば振向もせざる程あるより人之を呼びて過激醫者と綽名するとゝや、夫は扨置き前回に出せし區長仙田、長禮は太々郎を共立病院に送りしゞ醫士關登をいそより懇意の仲なれば其夜は九時過ゑ至りて關登ゞ家を訪ひ行き太々郎を病院に送りし次第を告げしに關登の例の短氣ある性分として一刻も猶豫そる能はゞ「拙者の是れをり直様病院に出張して見屆けて參ると云ふにぞ仙田は夜の更けたる故明朝にす可しとて止むれども聞入れゞ其儘家を飛出し馬車よも乘らず只走りに走りて病院に着たれゞ此時は早夜の十時を過ぎ門の戸堅く鎖して醫員長と云へども入る事叶あはねば登も漸く斷念し漸々と我家に歸り來られり、素も關登が何故に斯くまで太々郎の事る氣に掛るやゞ尋ぬるに此人曾て太々郎の愚かある本性を療治せんと企てしゞ其甲斐更に無りし改我職業の名譽を重んじ猶ほ折わらば其性質を檢免見んと思ふに由るあり、去る程に翌日の夜の明くるを待兼て直ちに病院ゑ行き看病婦に就て「昨日入院した太々郎と云ふ者の孰れの室へ入れて有ります　婦「先ゑ入れて置た第十區の十番室に」と問いて登は其儘馳行んとするゑ看病婦長は呼留めて「先生太々郎の居る室へ行くゝと出來ません」關登は驚きて「ソレの又何故ゑ　婦「警察長らの言附です假令ひ醫員長でも警察長の許しを受けねば入る事の出來ません　關「コレの怪からん醫者ゞ病人を取扱ふに警察の許しが要るなどとは一以ての外の事、拙者と警察長の言附位ひは恐れません、毎朝病人を見廻るのの拙者は義務ゞらら」とて制るも聞らず第十區に進み入れば二人の巡兵其入口を守り居て一言の許に關登を叱り附けたれば短氣の本性何ぞ堪らん忽まち顏ゑ朱を注き「コレは益々怪しらん幾等警察長でも此樣ゑ事をー宜しい巡兵諸君に何を云ッても分らぬら拙者の警察長に說論して來る」と云つゝ足を廻らして病院を走り出で直ちに警察長富地ゞ家ゑ至るに富地の乘てより關登の短氣を知る者なれば早くも事の次第を察し「關君、君の太々郎の事で拙者を詰りに來たのゞらうゞアレの豫審判事輕錢らられ依頼でー」と半分言はせも怒れる聲を張上げつ「ナニ輕錢の依頼だと、輕錢より君の方が一等上役では無いか彼れか其樣ゑ不道理ゑ事を依頼すれば君の何故遮斷なをらぬ　富「イヤ役目は拙者の方ゞ一

尊も二尊を上なれど裁判の事ゐ問てゝ警察長は探偵事に從はねばならぬのじや、輕錢が裁判上必要と認めて依頼をる事は拙者に於て斷る事が出來ません　關「夫でゝ何か、裁判に必要と認むれは病人を見殺しに仕てゐ好いと云はるゝか　富「イヤ飛思ッてゝ間違ひます何も太々郎が今にも死ると云ふ病人でゝ無し、一日や二日醫者に見て貰はぬからとて彼れの顛癇が急ゐ重くなる筈も有る舞い、夫に輕錢を今朝は君の立合を厭ッて太々郎の心を驗して見ると言ッて居た故、最ふ今時分ゝ君と行違ひゐ成り出ッて輕錢の方が病院で君の歸るを待て居る時分だ」此言葉を聞き關登は忽ち機嫌を直し「イヤ輕錢に於て拙者の立合ひを乞ふと云ふあら夫で宜しい、誠に失敬で有る」と言ひ乘て又も病院ゐ引返せば果して輕錢は登の歸りを待居たれば「輕錢君、此後若し病院へ警兵を入れるなら一應拙者ゐ通知して貰はんけりや成らぬ、警兵でゝ病人の看病ゝ出來ぬから　輕「イヤ通知する暇ゞ無ッたのでーサア是から立違ひを願ひます」とて二人は直樣第十區十番室に入り行けゝ太々郎は寢臺の上に突立つゝ朝れへゝ逃去らんとする如き身拵へをゐ　輕「コレ太々郎、恐い事は無い能く落着いて、已れの問ふ事に返事せよ、お前は春邊村の火事を覺へて居るかと問われて太々郎は呵々と打笑へり此笑ひ聲を聞かば誰にても太々郎が一通りならぬ愚人なるを知り得可し、唯斯く笑ふのみて何ぢ返事をも爲さゞれは此より凡そ一時間の間、或は瞬し或は威ー手を替へ術を替へて問ひ試むれど太々郎は何の感じもあく徒らゐ人々の顔を眺むるのみ、果は輕錢も斷念し一最ふ止ふ、今日は幾等問ても駄目だ」と云へば關登は最誇顔に「判事よ先夜黒戸家の庭で君が尋問しさのも此太々郎ぞよ、アの時の太々郎と今の太々郎と少しの變ゞを有りません、拙者ゞ彼の時駄目ぞと云たのを君は覺へて居ざらう、此樣ゐ者が裁判の証人になりますろ」と嘲る如くに讒れども輕錢は聞かぬ振りにて玄關まで進ミし此時振返りて關に向ひ「關氏、黒戸伯ゞ傷所の樣子を詳しく報告書に認め拙者まで屆けて貰ひませう　關「夫は拙者の義務ぞから、承知致した規則の通り今より四十八時間の中には差出ます」と情あく返事をるは日頃此兩人の互に親からざる爲なる可し、是にて關登は家路を差して歸る途々口の中にて呟くやう「ナニ報告書は疾くに出來て居るゞ直に渡しては面白く無い、夫とりは先づ星川侯爵夫人が巴里から連れて來たと云ふ若手の代言人に見せて遣ふ、辯護の參考ゐ為るぞらう、ナニしろ星川武保は共和主義の男だから我過激黨とは

能く似て居る、出來るだけは力を盡して救ふて遣ねばある餘いテ、ーオヤ最ふ山堂家の前へ來た

醫師關登は病院の歸り道ゐて山堂家の前に到りしかば彼の報告書を代言人大川万英ゐ示さんとて其儘内に進み入り案内もせず奥の室に進み入りしは日頃親しく此家に出入そる者と見へさり奥の室には直家、錦孃、万英の三人並び居るゐそ關登は先づ直家ゐ一禮し次で大川に向ひ「巴里より入しッた代言人とは貴方でそか　大「ハイ私しが大川万英で有ます」關登は報告書を取出し「大川君、拙者は關登と云ふ醫者だが、乘て星川武保殿とは主義の爲めに紹しくするから君ゞ辯護上の參考にもと拙者は報告書を持參致したー黒戸伯が容躰の報告書を」之を聞きて錦孃は嬉れし氣に「先生、毎時あゞら貴方の御親切には痛み入ます　關「イヤ信切でハ無いー拙者の報告書と武保殿の爲に成る事も爲にならぬ事も、有の儘を書て有るから是ハ信切とハ言はれぬじや、殊に孃樣達が聞くと身震をする樣ゐ事も書てあるから孃樣ハ先づ暫く次の間へ　錦「イエ武保が身の上に就ての事ゐら私しは男勝りの氣象を現はしますー身震ゐとハ致しません　關「夫では御免を願ッて申上げるがーと云ひゐら大川に向ひ「大川君此報告書を見さゐそれは委細分るゞ夫でも醫者の報告書以素徒にハ分り惡い。から先荒增を云ふて聞かさう、黒戸伯ハ二ケ所射れさ者で一ッは傍腹一ッは肩から首へ掛けさ傷だがー傍腹の方は少し彈ゞ返れて居る、拙者は其夜直ちに出張し其彈を肉の中から取出しさが傍腹から五十七出ました一五十七、小いのゞー肩からは百と九ッ探り出しました、未だ少々ハ殘ッて居るかも知れぬが一時に取盡そ事と出來ぬじや、所が何ふも奇妙と云ふは傍腹ゐ彈と肩の彈と丸で性質ゞ違ッて居る、傍腹の彈は砂の樣ゐ小いので肩の方は夫よりズッそ荒ゐのじや、拙者ハ見本ゐ爲めに兩方を少しづゝ以て來たゞ」と云ひゐら丸藥の如く藥袋紙に包みたる者を二ッ取出し卓子の上に置けば大川は二ッを開き見比べて「成る程、丸で違ッて居る、扨は罪人ゞ二人あるのかナ」と呟やけば直家老人之れを聞ゐ「イヤ夫は獵に用ふる鐵砲で筒が二ッ着て居るのじや一ッの筒と兎ゐそを射る一ッは鳥撃射ると斯う區別ゞ就て居るから夫で彈に大小が有るのだらう、獵をする人ハ誰でも爾ゞから大「成る程、併し初めから人を殺す積りなら獵銃を用ゆる筈は無いゆゑ、是れは獵銃撃持ち合せた者ゞ其の場に臨んで風と殺す氣にあッたと見へる左すれば謀殺でハ無い」錦孃は

此のことを何と聞知しか進み出で「イヱ夫れは武保に疑がをひ掛ける爲め惡人か故と獵の鐵砲を使用ッたのでせう武保い此の家へ來るにも獵の鐵砲持て參りますもの」醫師關登は突と立ちて「イヤ其樣な評議は後ゑ仕さまへ拙者い失禮だが御免蒙ッて歸ませう一此報告書を玆に置て」と云ひながら早や戸口に進みされど直家老人い遽たしく呼留めて「先生、時に黑戸伯の其後の容躰い何ふ有ります」關登い最や闘より片足を出したる儘にて振向き「イヤ未だ何方とも就知ません兎に角、燒けた後に居ては萬事不便利で仕方が無いから昨日の午後に此澤部町へ立派な空家を賣ひ伯爵家内一同それに引移りましたが、引越の騒ぎて少々重ッさ方で誠に困ります、イヤ拙者は是より黑戸家を見舞ねばならぬ」と云ひ捨てゝ立去りたり後に大川は報告書を開き心を留めて瞰下すゑ其文簡單くして今關登が口に出べし事の外は何事をも記しあらず、斯る所へ又も入來たる男あり誰かと見れば星川の下部案藏なり、直家先づ案藏に向いて「オ、能を來ゐ、何か變ッた事でも有ったのか」案藏い最と心配氣なる面持にて「今日判事輕錢と書記鞭根の二人が憲兵に武保樣を連さ出て星川村へ參り室毎の戸を開いて彼の夜武保樣の着て居さ衣類を初め一切の證據物を取纏め一々武保樣に向ひ之に相違無かと問糺ゐさ上で夫々荷造りをして持て行きました夫で先づ見張番を言附ッゐ私しも役目ざけい濟ました故其事をお知らせゑ上りまし為一錦嬢い進み出で「其時武保樣と何の樣な容子で有さエ」案「武保樣い存外にお達者で判事を賺む樣な笑を含んで居ッしやりまし さ」と聞て大川を進み寄り「シテお前は武保殿と口でも聞ましたか」案「何うして輕錢ゲ口あとは聞かせません」大「夫じやア先日の一件い一ソレ鐵砲の筒口い一覗いて見ましたか」案藏は益々心配の色を現はし一ハイ一寸と覗いて見ましたが誠に悲い譯でムいます」大「悲ゐ譯とは汚れて居るのか」案「汚れて居ます武保樣は彼の晩彼れ鐵砲を放ッゐに違い有りません」此返事に大川と直家い一齊に失望の嘆息殘發し「ア、」と叫びし儘良久が程は言葉も出ず徒ゞ目と目ゝ見合すのみありしが大川漸くにして氣を取直ゐ「全体武保殿は日頃鐵砲に何れ樣ゐ彈を込免ました」案「主人の鐵砲い二丁筒で一方へと砂の樣ゐ細いのと又一方へは少し荒ゐのを込めました」大「フム其彈は未ゞ別莊に殘ッて居まそか」案「澤山殘ッて居ます」大「夫では御苦勞ながら早速取寄せて見れまいか」案藏は畏まり早速持參致さんとて其儘又も星川村へ歸り行きしゞ凡そ二時間ばかりを經て其彈を雙方とも

五袋つゝ持ちて再び來りしかば大川は直に其袋を破り為るに中より、パラ〳〵と滴れ出るは砂の如き散彈なり之を先程醫者關登より受取りたる見本の散彈に比ぶるに其大さ少なを異り無し次には大粒の方を破り見るに是れ又見本と同じ事なり、此時人々の驚きと失望い實に筆にを盡されず

第十一章

武保の日頃用ふる散彈い二種ともに彼の黒戸伯の身躰より堀出せし散彈と毛ほどの違ひも非ざれば直家老人い色を替へ「先ア此樣な不思議な事ど又と有ふか是でい最ふ何ふしても武保を助ける事い出來まいテ」と云ひあぐら老の眼ゐ涙を浮めしが傍に在りたる錦孃は聲を勵まし「祖父樣、何の樣な証據が有ッても武保い罪人で有ませんものを、助ける事の出來ぬ筈はムいません」此時まで手を叉ぬきて默り居たる代盲人大川万英は最深く嘆息を發しつゝ「武保殿の罪人で無いとい私しも確く受合ひまをが、夫にしても斯くまで引續いて証據の出るからと迚も一通りの事では言開ぎ附きません、今まで擧ッた數々の証據の中何れを見ても唯一ッで罪を定めるゐ充分で有ります殊に粂藏ど前の日掃除した鐵砲の筒口が汚れて居ると言ふからと判事も夙とり氣が附て居ませうがーハテナ實に困りましたー何ふしても此事件には武保殿の口では言ふに言はれぬ秘密が有るに極ッて居ます其秘密さへ詳しく聞けば何とゝ工夫も附きませうど今は武保殿は密獄の中に居て顔を見る事さへも出來ませずー何ふも早や、何ふもー夫かさ言ッて手紙の遣取りは猶出來ずー」後は何やら口の中にて呟やくのみあるを錦孃聞て首を差延べ「大川さん若し明日か日ゐも手紙の遣取が出來る樣ゐなれば何ふあさいますか　大「手紙の往復さへ出來れば武保殿ど此秘密を知らせて呉れませう、好んば夫までには行かぎとも其秘密を搜るだけの手續き位ひい分りませうー」が手紙の遣取い迚も出きる事で有りません武保殿から貴孃に宛ど短い手紙でさへ輕袋が取上げて渡さぬ程でもから」錦孃い何思ひけん此言葉の終ると均しく突と立ちて此間我退きしが夕刻ゐ至るまで我居間に閉籠りて獨り何事をか思案し居たる跡に直家老人と大川い共に首を垂れ一言の言語をも交さず各々此後の思案を廻らしたり斯て時のみ空しく移り頓て此日も暮れたるど家内一同味氣無き夕飯を終りし後錦孃い直家老人を我居間に連れ行きて四方の戸を悉く鎖し置き殆ど老人の耳にい聞え兼る程にまで其聲を低くして「祖父樣、私し

ゝ金持とやらで有ませうか」と問ひ掛けたり、所も錦孃ゝ幼き頃より慈愛深き直家老人の手にて何不足なく深窓の中に育ちし身なれば殆ど金錢の價も知らぬ程にて我身代の幾程あるやは、素より辨へ居る由なければ斯く奇妙なる事を問ひしなり　直「非常の金持サ　錦「何れ程お金か有ります　直「爾サ、先づ其方一身に附た財産から一年に二万五千圓近く這入て來る、此元を積ツて見れは五十五万圓も有ふか、　錦「ヘエ、五十五万圓と云へば餘程澤山ある中でせうか　直「アヽ澤山ぢも此近邊十里以内では其方ぢ第一等の金持じや此外に未ぢ其方の名前に成て居無い分ぢ少しゝ有る　錦「此邊りで通例樂に暮して居ると云ふゝ何れほど有れば出來ませう　直「夫は其暮し向きや家内の員にも由りー　錦「イエ先ア其樣あ細かあ事ゝ置いてー　直「左樣サ、年に八百圓か千圓も所得ぢ有れば何不足なく暮せようか　錦「ヘエ、千圓、幾等の金を銀行に貯れば年々其千圓ぢ這入て來まも　直「二五の十ぢから五歩の利足と見積り二万圓の元金じや、雖と其方の一年の所得ぢけじや　錦「今貴方のお手許に其二万圓のお金が有りませか　直「正金でゝ三百圓ばかりしゝ無いぢ先日ロースチヤイルド商店から引出ゝ切手ぢ二万圓餘り手附ずに有る、此切手あら日耳曼でも英國でも何所でも通用

せるからお金も同じ事じや「此返事に錦孃と安心せし如く片頬ゐ笑を現ゝせしぢ又も眞面目ゐ返て「私しゐ其切手とやらで二万圓下さいまし」直家は驚ぢて「ヤヽヤヽ二万圓呉れアハヽヽ此子は何を笑談云ふのじやー先ー　錦「イエ〳〵笑談では有りません祖父樣、眞實のお願ひです、私しを助けると思ツて何ぞ問はずゐ何ふぞ二万圓下さいまし、祖父樣、お願ひです祖父樣ー何ふぞ祖父樣ー下さら無ければ私ゑしは此世の望みも絶て仕舞います　直遣も遣らぬも無い其方のお金だからーでも其樣あ大金を何ゐする　錦「下さるあら夫を問はずゐー後で分りませから」直家老人は日頃生命よりも尊く錦孃を愛し孃の嬉こべる顔を見る事を此上も無き樂しみと爲る者あれば今は拒まん樣も無く「其方ぢ夫ほど達て願ふあらー何を二階へ行て持て來ませう」と其儘立ちて二階に行ぢたるぢ其後にて錦孃ゝ化粧の間に入り黑き高尚ある着物に着け換へ姿見に對して花の顔を繕ろいつ最笑しげに元の所へ立歸れば此時直家老人は數多の切手を手に持ちて入り來り此の樣子を見「オヤお前へ何所へか行くのか—全躰何所へ行くのじや　錦「ナニ御心配なさる樣な所でゝ有りません、今夜唯一夜の自由を許して下さいナニー二時間立たぬ中に歸ります　直「ナニ自由を許されぬぢ云

ふ事は無いから、何所へでも行くが善いが、夜夜半唯一人りでもー何所か知らぬが私が從て居て遣る　錦「ナニ夫には及びません、何ふぞ一人で出して下さい、大丈夫ですからー」只管ら願ふて止む可き樣子も無し、亦も錦嬢は最も甲弱乞女にて平生ハ人の前に出るさへ顏を赤むる程なれど一旦斯くと思ひし事にハ男も及ばぬ氣象を現はし後へハ退かぬ性質なれば直家老人も嬢が思決めたる顏色を見て今ハ言ひ勝さん手便を無く良久默然として思案せしが思に浮ぶ事の有りしか忽ち顏を柔げて「好し〳〵何ろ知らぬが其方の事ぞから間違ひも有る舞い二時間と云へば案じる事は無い、何所へでも行ッて來るが好い」と思ひしよりも容易ある此許しを得て嬢は飛立つばかりに喜びつ二万圓の大金を取取り之を衣嚢の中に納めて私かに裏口より裏門を潛り出で臘月を便りにして孰れへか走去しが其後より十間ほど離れて嬢れ姿を月ゴ遂して直家老人コソ〳〵と踪け行きさり是ぞ孫我思ふて止み難き老人の心なる可し

錦嬢が大金を懷中にして密に裏門を潛り出しハ最も怪しき次第あれば直家老人其跡を踪け行くに嬢は裏道を右に折れ左に廻り凡そ十餘町も行きたる頃但有る路次を通り抜けて大通りに立出で「鞭根裁縫店」と看板を掲げさる家の表に立留りつ良久ど程は左視右看て家の樣子を伺ひたるゴ頃て思案を定めし如く獨り頷首て其家の中に入り行きたり亦も此の鞭根裁縫店は前ゴ出せし裁判所の書記鞭根何某と云へる男の姉鞭根女の開ける店ゴして書記鞭根も此家に寐泊なせり、外に何も直家老人は嬢ど此店に入行くを見て不審に堪へず口の中にて獨り言「ハテナ衣服を誂へるには二万圓は要ぬがー夫に此已に隱す筈も無いー書記鞭根に逢ッて何ろ頼む積りかナーイヤ〳〵鞭根ハ正直者で金など出しても取る男じや無いが一尤も去年の軍から此店ど暇にあり大分借金ど陷來たと云ふ風説ざから金に目が眞れて嬢は顏を聞くかナー夫にしても嬢何を頼む積りでーアの樣な大金が要ると云ふ所を見れば容易ならぬ次第でー何か鞭根は役目にも拘ハる程の事を頼むのかー役目に拘はる程の事ならアレだけの金では聞入れまいーイヤ彼れの月給ハ二十五圓ざー二万圓とは夢ゴ見た事も有るまい」老の身の取留めも無く案じ煩ふ暇に早や錦嬢ハトン〳〵と此家の二階に登り行けば鞭根ハ姉ゼ共に夕飯を終りたる儘にて珈琲を呑みながら何事をか話し居たり嬢の上り來るを見て二人齊しゼ「オヤ阿嬢さま彼嬢はー」と呆れたる如くあるは是ぞ二人とも此頃

世間にて大評判なる星川武保ら犯罪の實否など話し居さる者と見へたり嬢ハ其傍に進み寄り「今夜は切れ地を見に參りました、次の週間までに一組仕立て貰ひ度いと思ひまして」此言葉　聞き鞭根女は早や立ちて「丁度昨日里昂から到着した新形の見本が有りますから お目ふ掛けませう」と云ながら次の間へ入り行きさり嬢ハ直家の推せし如く心に一物ある者あれば其跡にて書記鞭根に向ひ「今夜は是からお宅ですか　鞭「ハイ差迫った認め物が有りますので中々外へは出らをません」「此時鞭根女は見本の箱を持來り卓章の上を片附けて其蓋を開き澤山の見本を取出しられハ嬢は彼れ是れと見散せども心茲に在らざれば見ても其色を辨まゑず　錦「此中何でも一番價ひの高ひのです寸法ハ毎時の通りに願ひませう　女」イヤ茲に在るのハ最上等て價は皆同じ事でムゐます、何れでも一ッお極なさッて」嬢は其中の最と美なる者を取「夫あら是に致しませう」と云ふと鞭根女ハ驚きて「お嬢様何を抑やります是は悪人風（ラスカル、ラップ）と巾して歡樂な男の服地です」と云ハれて嬢は初めて氣が附き赤らむ顔を隠しも敢へず「爾ですね夫では此の細かな方ふ仕ませうか」此間に書記鞭根ハ何れよりか一ッの洋燈を持來り卓子の陰にて火を点し早や之れを携さ

へて己が居間ゐ退かんとするにも嬢い氣も氣に非ず此時を外しては我志指ゑ果を折い無からんと思へば驀立つ胸を推鎮め「鞭根さん何方へ」「御免蒙って仕事に取掛ります何ぞ御緩と」と云ひ捨てゝ早や廊下を彼方に二三間歩み去りしかば是ぞ大切と嬢い突と起ち「貴方に少しお話がムいます」とて續いて廊下ゐ立出たる其振舞ひい深窓の中に育ちし令嬢の手際とい思はれぞ是を全く武保を思ふ一念より出る者あり「鞭根さん此聲を聞きて振返り「夫では今の所て伺むませう」と云ひつゝ元居ゑる室に引返さんとするを　嬢「イエ貴方のお居間でお話し致しませう」と云はれて鞭根い最と迷惑の樣子あれぞ我姉の二と無き樂意あれゞ辭み捨ん樣も無ゑ其儘先に立ちて居間ゑ中に進み入りたり錦嬢は入口の戸を堅く閉ぢ鞭根に向ひて坐を占つ其聲を低くして「オ爾ながら、私しと星川武保ゑ夫婦の許嫁を仕ゑ事はお聞き及むで有りませう」書記い最落着ぬたる顏にて「ハイ承まはり及びました」錦嬢い聲に充分の悲みを含めて「武保ゑ世にも恐ろしい疑ひを受け先日牢ゐ過入ましてより私しはヤすに及ばぞ親類一同一方ならぬ心配を、致しまして」と言ひ差して口籠れり、元來錦嬢は其容貌の麗しきゑ上、其言葉に得も言ぬれ波微妙の誠を現はし誰れにても嬢ゑ悲みの言葉を聞けば心の底より悲しみの想ひを傷さぬハなく嬢が愛を帶びて說出る音調には岩木も爲めに涙を浮べんと思はるゝ程あれば鞭根は半分聞きて早くも憐れみに堪へずやありけん「イヤお嬢さま、お嘆きの程い實ゑお察しヤします、あれとも武保殿は罪人で有りません私しい堅く武保殿の潔白ゑ事を信じて居ます、尤も判事輕裝、警察長富地を初め世間の人は殘らぞ武保殿を疑ひますれぞ私しは先日輕裝に從ひて武保殿の寢込へ踏込みました時既に其樣子を見て潔白の人ゞと思ひました、是れまで隨分輕驗も有りますが身ゐ覺への有る人い決して武保殿ゑ樣に落着ゐて居られません、其後毎日武保殿の樣子を見ますゞ其言葉付きから行ひまで罪の有る人とい丸で違つて居ますから私くしは、何か事の間違ひで斯樣な疑ひを受けた事と思ひます、今朝も判事の伴を致し武保殿も一緒に星川村まで參り証據品あぞを取集めて參りましゑが其時も武保殿は少しも判事を恐れる樣子は無く返て判事を嘲ひ樣ゐ見へました、何でも暇の中には言開きするたけの事を書へて居るのでせう、書へて居るのに夫を判事が知らずして一生懸命に取調べるから可笑ゐに違い有りません」と我と我情に感され問ふをも待たで述來る其言葉の節々は錦嬢が思ふ所と聊かの相

遣あらねば孃は嬉しさに堪へず殆ど今宵訪ひ来し大事の用事を一時も打忘れんとする迄に聞き入りたり

第十二回

裁判所の書記と云へる役目は其身分こそ輕けれども絶えず人の大事を聞き人の秘密を書留る者なれば其心正直あらでは叶はず能く其口を慎まずは有る可からず若し裁判所にて見聞したる事をば外に出て口走ると有らば之が爲めに裁判を妨げ判決を誤ることも無しとせぬ去れば西洋にては裁判所の書記を勤むる者い判事と同じく神に向ひて我口を謹しむとの誓約を立て堅く其誓約を守るとかや、書記鞭根も斯る誓ひを立て其役を務むる者なれば他人に向ひ星川武保の樣子及び判事輕錢の振舞あるを語る事の出來ざるい勿論なるに唯だ一時錦孃の心殘憐むの情に浮され我身分をも折忘れて知らぬ識らぬ武保が事を口走りたるあり、猶も氣附かずして言葉を續け「武保殿も隨分悲し相には見へまもが夫でも力を落したる樣子い少しも有りません初めて牢に入れられた時は隨分落いて風が見へましたが其翌日からは心が常に歸り充分お落着て居らッしやります輕錢判事も手を更へ品を替て取調べますけれど少しも其甲斐が有りません」是まで述べて書記鞭根は初めて我身分に心附き殆も夢の醒たるが如く眼に力も無く四邊を見廻せしが全く顏の色を變て「お孃樣最お聞き下さいますな、貴方の御心配をお察し申し思いぞも口外してならぬ事まで口外しました此事い何ぞ此場限り御内聞お願ひまも」と言ふに由り錦孃い今ぞ猶豫あく我大願を言ひ出す時なると思へば我が心を引退して「其御心配お及びませう、私しい決して他言お致しませぬ心置なくお話し成いまし是ばかりでい有りません未だ私しい貴方の口から何ひ度い事がムいます鞭根い、最も嚴重ある顏にて「イヤお孃樣最お是切りでお止下され、貴孃のお頼みを一切聞く事は出來ません、全躰私しにお頼み成る其御了見が既に私しを見損なッて居まも」と愛想も無く言ひ放たれ錦孃い柳の葉の風に吹るゝ如く戰ぎしが心弱くまい叫いぬ場合あれば一身の勇氣を絞り集めて「貴方い武保お罪の無いのを能く御存じでは有りませんか、罪無き人の殺されるのを貴方も何とも思ひませんか」鞭根最お其お言葉い聞きません」孃い猶も悲き聲を張まし「唯貴方の一言で武保は助りますのに之を助るお情けい有ませんか、如何に役目の爲なればとて現在罪の無い事を知りながら夫を憐れむお心い有りません」

か貴方ゝ罪の無ゝ人ゞ靜かに首切臺へ戴られて其命を絶るゝを見ても可愛相とゝ思ひませんか、爾まで邪見あお心とは私しゑは思はれません、モシ鞭根さん何ふすれば貴方のお心が動きます武保が妻の身をして私しゝ中すに及ばず父母親類の悲みをお察し下さらば何故其樣に知らぬ顏を成されます武保に罪の無のゝ能く分ッて居ますれど甲斐き身の私しには助けて呉れる人の無い爲め救ひ出す事ゞ出來ません、他人の中で武保を無罪と知るゝ貴方の外ゑは有りませんに貴方がお助け下さらずば誰ゞ助けて呉ませう鞭根さん貴方の前に手を合せて此樣ふ拜んで居るゞ〻の眞心が貴方のお目には見へませぬか」と一言ゝ一言より も切に、一句ゝ一句よりも哀れに、泣くゞ如く怨むが如く說きつ口說つ訴ふる錦孃の此言葉に左しもの鞭根も堪へ兼けん深き息を發きながら「夫でゝ此私しに何を致せと仰有ります 錦 何ふそ十行ばかりの手紙一通、武保に送り屆けて下さいませ」總に手紙一通と聞けば最易く思はるれど牢に在る人に向ひてゝ是れほど難き事ゝ無し鞭根は漸く思ひ切ッて「夫ゝ決して出來ません 錦 貴方は不便とは思ひませんか 鞭 イヤ其樣あ事ゝ名譽に關ります 錦 罪なき人の殺されるのを知らぬ顏して見て居るのゞ紳士の名譽と云はれますか」鞭根ゝ心の正直に感れ憐むの心も深けれど是ばかりは聞き難けれゞ何とか言宥めて得心させんと種々に心を惱せし末漸や之に思ひ附き「お孃樣、其樣あ事が露見すれば私しは免職にあり親同胞に難儀を掛るのみかは生涯此に出る道も塞がります」錦孃は一生懸命の時ふれは濕く手にて彼の大小取交せ二万圓の爲替手形を左右の衣裳より取出し卓子の上に推並べ「輕少あがら此二万圓差上げます」と云へゝ鞭根は且つ驚き且つ周章て氣を奪はれて飛上り「ヤア此大金を一私しに一一孃は此時水石をも泣しひる聲を出し「無禮は御容赦を願ひますが是は決して貴君のお助けを買ふのでは有ません恩の蔵一ふ報ひる誌までゞムいます此願ひさへお聞下さらは貴方の爲ゑは命でも厭ません」左ゐきだに心既に憐れみの爲めに動きたる書記鞭根爭でか此大金に眼眩まざる可きぞ、起たる儘ゑ立すくみ最も澁枯たる聲音にて「ニー万一四一の此大金を一」と云ひながら我にも有らで卓子の傍に進み寄り將に手を出さんとして又も枯れたる聲を出し「二、万圓、一、年、ふ、一千圓一 錦 此金を受納めて下さらば山堂家と星川家の家内一同は貴方の恩を忘れません貴方の爲にゝ何ありと致します」一時も大金に迷ひゑるを正直一圖の男あれば早くも心を取直し「お孃樣此お金は無用

でも卵あき人を助けるゝ假令ひ紳士の名譽と云ふも金の爲めに助けさと知られては卑劣千萬の男と爲りまそ、私しゝ貴嬢を憐れみ武保殿を憐をむゞ爲に何なりとも致しませうが其金は要ません役目の誓約を破るをへ此上も無き罪あるに其上金まて受取さと有ては他日武保殿の無罪が分ッゑ時私ゑは貴方に逢せる面目ゞ有りません無罪の人を助けるのに何に大金が入りませう、サ此金はお持歸りを願ひまそ」と思案を定めて答しゝ嬢の悲みと我身の善心とに迫られて切迫詰りし言葉ある可ゑ錦嬢は此潔白き返事を聞き有難さに感極て今まで張詰し心も弛み聲を放つて鞭根ゞ前に泣伏したる此終局猶ほ長ゑ次の章に訳き分けん人ゝ唯ゞ金ばかりの爲に使はるゝ者に非ず或は義理に迫りて使はるゝ事あり或ゝ哀みに堪へ兼て使ゝるゝと有り又若樂ゝ爲めに使ゝるゝも有る可しまれば書記鞭根ゝ金の爲めに錦嬢の願ひを聞きしには非ず「他人ゞ金の爲めにそる所を吾ゝ義理と名懲の爲めにせん」と て金ゝ推返したれとも嬢の願ひを聞き入れしあり斯も正直にして義ふ勇む人ゝ今の世にて ゝ又と得難き事ある可し斯て鞭根ゝ嬉さに泣伏る嬢を起し「嬢様、私しゞ引受けましたから 明まで も遣ては見ますが首尾能く仕果せると云ふ請合ゝ出來ません金弊判事輕錢と云ふ人

ゝ中々疑ひの深ひ男で、夫に此事件を旨く丸調ふれゞ必ず役目の昇る事と心得、隅から隅まで抜目なく氣を附て居ます樣子、今日も私しに向ひ山堂家で頻と武保に面會せんと計ッて居るゝ必らず何事をか打合を下心ゆゑ能く氣を附けねば行かぬと申しました、其上ゑ貴嬢のお手紙を私しの手から武保殿に渡す時にゝ武保殿も私しを疑ひ判事の廻し者と思ふかも知れません、私しの役目ゝ唯時々判事に附添ひて牢屋に行く事ゞ有るばかりで其外は牢の入口へも行かれぬ身ゆゑ武保殿に逢ふ事も出來ません、判事と一緒に牢の中へ行ゑ時に役へ其手紙を落して來れば好らふと思召さうが武保殿ゑゝ番人が附て居て油斷も無を見張て居升也ゑ武保殿よりも先に番人ゞ拾ひ上げ直樣輕錢判事に手渡すは必定でを斯樣な譯ゆゑ迎も首尾能く行ふとはお請合ゞ出來ません、併し一ッ幸ゑ事ゑは牢番の蘭太郎を武保殿を見張て居る鶴之助とを存て居ますから此二人を取入れば何とか工夫も附ふかと思ひまそ

嬢「イエ最ふ此樣ゑ險呑ゑ事が首尾能を出來ようとは私しも思ひませんが好しや出來ゑまでも難されるゞ者の手ゝ難して試たいと存まそ」鞭「夫でゝ先づ其手紙をお認め成れませ茲ゑ鉛筆も有りますから」錦嬢は漸を之に力を得紙ゞ伸て筆取上げしが又も鞭根に向ひ「武

保い牢の中で何か書物でも持て居ませうゝ軽書物い昨日空巴の小説を差入て呉れと云ふ事で輕錢ゞ星川村へ出張致した時、書棚から五六冊取出し充分檢査をした上で渡しました、此返事を聞き錦嬢い痛く喜びの色を現はし「空巴の小説は日頃私しゞ大好でそから一夫で武保と其小説の差入れを願ッたに違ひ有ません武保い私しの事をカゐして私しから何ゝ手紙が來ると必待に待て居ませう」と言ひあがら匆々と左の如く認めたり

武保よ、御身ゞ濱はし犯罪を犯をゝる事い妾少しも疑いねゞ御身の苦しみは妾の苦しみなり御身今は幽囚の中に在り妾之れに増る悲み無し御身ゞ母上も巴里より代言人大川を引連れ來りて妾の家ゐ在り、妾等一同御身の差圖を聞き御身を救ひ出さん、武保よ、御身は妾に隠す事あかれ、隠さず御身の密事を打明けよ、御身は既に「件の書」を手に入れたるからは誰憚からぢ充分に返事せよかし妾は氣短かく御身の返事を待つあるぞや

錦嬢より

惡人より戀人に送る玉章には必ず他人に分り難き文句あり今此錦嬢の認ためゐる手紙にも「件の書」と有るい何事あるや此三字に意外なる意味を含を居る事は後ゐ至りて判然と可し

、拵嬢ハ此十行ノ手紙を認めて之を鞭根に渡し「一通りお読み下さいまし」と云へば鞭根ハ手に取りたを之を讀ひは紳士の作法に非ず其儘封じ嚢に入れて嬢に渡せば嬢は上封を認めながら「此御信切は忘れません明日は此返事を伺ひに上ります」鞭根は飛上り「イヤ何ふ致して再び私しの家へお出にあをば必ず足ら附きます此お返事ハ善とも惡とも明日中には内々私しより使残上ますから何の様あ事ら有ふとも再たび御單身でハ此家へ入つあやらぬ様に―」と云ふ中卓子ハ上ユ取散せる大金残取纏め之を束と爲し「サ之を持てお歸り遊ばせ若し此金を受取ては私しは我心に咎められ決して旨く仕果せる事は出來ません、若し圖太郎や鶴之助を取入る爲にお金でも要るやうあら別に頂戴致します、サ永居は御無用です」と迫立られて止を得ず嬢は大金を衣囊に納め鞭根ふ送られて裏楷子を降りしお別れの際ふ振向ハて「夫では鞭根女ハ先程の切地で頼ひと貴方からお傳を願ひます」と小き聲にて頼み置き其儘表外に立出つ元來し道に歸らんとすれば先程より待兼居たる直家老人、後より走來り「コレ嬢や、首尾能く行ふか、私は心配ざから其方の跡を踪けて來たん―衣類の注文では有るまい書記鞭根にアの二万圓で何ら頼だで有ふナ、鞭根ハ承知したか

、ナンと云ッタ」老ハ身ハ後前にも介意ざる此言葉を嬢は聲高しと推留めて其儘又も裏道に出で四道ふ人ハ無ハを見濟まし有りし次第を告げ聞せるに老人も嬢が武保を思ふの切あると鞭根ら心の消きには涙を流すまでに感じ入りぬ、頃て人知れず我家ふ歸ったるが此事他人には知らしむ可くも有らねど代官人大川万英にのみは言はで叫ハぬ事あるゆゑ嬢と老人は大川を一室ふ呼び私ふ次第を語り聞せしに大川は聞終りて打驚き「貴嬢は實に險呑あ事を成れました 錦「ナニ險呑ふ事ハ少しも有りません 大「イヱ佛國刑法の第百七十九條に據れば賄賂を取る官吏も賄賂を遣る人も共に充分の罪ら有ります貴嬢は此罪を犯さんとしふのて有ります」嬢ハ我身の恐しをに身震ひする如く「アヽ爾ゞは存じませ―でも先づ是で武保ら助かりませうか」大川は打案じつ「成る程私しは先刻武保殿と手紙の遣取でも出來ねば迚も助ける事は出來ぬと申ましたら其事ら首尾能く參り武保殿から充分の返事ら來れば宜しいけれど左も無い時は―左様さ手紙では此家へ届くまでふ幾人もの手を經まそから武保殿を秘密の洩れるを恐れ充分の事を書ぬかも知ラません 嬢 イヱ幾人の手に渡つても秘密の洩る氣遣ひは決して有りません先ハ最う充分ふ用心をして有りますから武保も

心配あく返事ゝ寄越します」と請合ふ如き盲ひ切るは何ら仔細の有る事ある可し。此夜は是にて何の事も無く過ぎたるが此翌日と朝の程より今にも鞭根より沙汰あるかと錦嬢ゝ立ちつ居つ更に落着くと能はず午後一時を過ぎても何の沙汰あけをば嬢ゝ家に在りて空を待んより外に出て其辛さを紛さんものと幸ひ星川侯爵夫人が今日は此地に在る知人の家を訪ひ晩れんと云ふを聞き嬢ゝ夫人と共に我家を出たるに、其跡へ間もなく商家の小僧と覺しき使ひの者密かに鞭根の組みを受け武保より錦嬢に宛たる返事の手紙を持來れり嬢の不在あるに由り直家老人之を受取りしが武保よりの返事と思へば嬢の歸りを待つに得堪ず代言人大川と共に其封を切り試るみ悲しや中は初先より終りまで符牒を以て認めたをば目には見ゆれども讀む能ゝぜ其文左の如し

(三十一)九、十七、十九、廿三、廿五、廿八、三十二、百零一、百零二、百廿九、百卅七、五百零四、五百十五—(三十七)三、三、四、五、七、八、十、十一、十三、十四、廿七、五十二、五十四、百十八、百十九、百二十、二百、二百零一、一(四十一)七、九、十七、一、廿一、廿二、四十四、四十五、四十六

第十三章

○代言人長倉氏(原名マグローイ)

偖此長き手紙は皆數字のみにて埋めされば二人も持餘して茫然さりしか大川ゝ何か合点きして返事を寄越と仰有ッあでせう、夫ゐたても何とか詞分る工夫か有相な者ゞ　直「今の男女は實に油斷かあらぬ何時の間にか此樣ゐ秘密通信方を定めて有るかー最ふ仕方か無い早速嬢を呼に遣らねばー」之ふて直樣嬢か出先へ迎への使ひを出せしに嬢は飛ぶが如くに返り來て「祖父樣返事か參りましたかー是て漸う安心致しました　直「イヤ未だ中を見ぬ中は安心ゝ出來あい、其方ゝ先ア武保と大變ゐ符牒を定めを置たと見へる今迄二人を樣々ゐ考ても何のとゝ少しも分らぬー」嬢は大川の前にて斯る問を受け少し其顏を赤め「イエ何てもそよ、先日武保と世間話しに成ッイ符牒の事に話か移り武保か數字を教へて呉れましゐ、其後二人て幾度も稽古をしましたれと本統の役に立つとゝ有らうとゝ夢にも思ひませんでした、何ても是は符牒の中て一番優れのゞと申まして其仕方は二人て前以て一ッの書物を極本と定めて置き其中から入要の字を探し出し其字を番號で記そのでそよ譬へば此手紙ゐ

〔三十一〕と有るは冊一ページ目と云事て九と有るハ初めから數へて九番目の字十七とあるは十七番目ハ字ですから之を其種本に照し一々讀は誰ゐを分りまを夫でも他人ゐハ何の本か種本か分らぬから讀ません此ふ諜なら誰に見られても大丈夫一夫に若種本を他人に知れたと思へば直様外の本にをる事も出來又同種本ても其仕方を替る事も出來ます譬へハ今日は月曜日て此週間ハ二日目ですからページの數をニッ宛殖し文字の順をニッ宛減して書抔云事も有升又順ゐ數ゑを終から逆に數ゑて番號を附る事も有り升時に寄と思ふ字ゐ無て一々假字で綴る事あと有り升ゐ用事の無時あそは何んあに樂みてせう」此說明を聞き直家老人は初て合点し「成程夫ハ誰にも分ぬ筈じやー併し此手紙が其方に分のかヲ　嬢　夫ハ分り升武保と私は初から空巴の「間者物語」（せ、スパイ）と云ふ小說を種本と仕て有升夜前も鞭根に明ましたら武保は牢の中で空巴の小說を差入て呉と願さ相で有升故私から私に手紙が來と思つて居と見まを　直　先ア夫では早く潛前の文字ゐ譯し大川殿に見て貰か肝腎だ」と云ば嬢は其意に從ふ手紙を持て我居間に退き凡一時間も經んとする頃嬢は手紙を翻譯し終り淸書して持來りしかば二人ハ其手紙を讀下を文に曰く「錦嬢よいつに替らぬ御身の信切深く我肝に銘じたり吾等は万一の事あらんも知れぞと空巴の小說を手許ゐ取寄せ置きたをは例の符諜にて書き記さん、嬢よ余が斯く自ら我罪を言開き得ぞして牢屋の中に有を聞ク御身ハ定めし深くも悲まんが余は自ら言開くも無益なりと思へり、外とり充分ある証據を送り呉をるまでは口を開かじと決心しゐり去れぞ今と爲りては其証據も消へ靈したれば余は最早や逃れ難し、此上は唯だ自ら知れる事柄を殘らず判事に打明るより外ハあらず、依て余ハ今日にも打明けんか明日にも言出さんかと日々に思へども、余ゞ打明くる次第は實以て容易あらぬ事柄あり一旦打明けては取返しれ道あき故余は打明くる前に先つ一應然る可き代言人に相談せねばあらず相談したる上ゐて其差圖を聞き、差圖に從ひて打明けんと決心したるあり、去れぞ今ハ密獄に在る身なれば代言人たりとも面會叶はぞ遣からぬ中ゐ豫審も濟み公判に移さるゝ筈なれば豫審の濟み次第に面會せん、夫を充分に心欲く且巧ゐる代言人に非ねば余ゞ力と頼む能はず、余は今までハ充分に逃れ得る事とのみ思ひ居たるも昨日の調ゐて容易に逃れ難き事を知りさ、、嬢よ余ハ代言人の教へを聞くまでは一刻も安き心あし、母上故々巴里より大川氏と云ふ代言人ゐ連れ來りしと聞けぞ余は兎ゐ角他の

代言を頼まんとす、余は詳しく此土地の事情に通じたる代言を頼まんと思ふあり大川氏へゝ御身より惡からぬ傳へられを、嬢よ余が頼を度く思ふ代言人は眞倉氏あり眞倉氏は余ら親友なる上此地の事情をも能く知ればあり嬢よ何とぞ此事を眞倉氏に知らせ慥き樣終結の日を持ち同氏を牢屋まで送られよかし、夫までゝ何を爲すとも無益なり、嬢よ猶一ッの願ひあり余は輕裘判事の掛りを脫し外の判事に取調を受け度しと願ふなり、輕裘ゝ余を罪に陷さずば其身の落度と爲る故無理にも余を罪せんと計れるあり、此人の手に在ては余は助かると甚だ難し、御身及び直家老人の周旋にて官邊に便りを求め此人を取換ゆる工夫ゝ無きか、去れど此事若し御身等の力に及はずやあらば是非も無し、嬢を余は一時の誤ちより終に斯く囚獄に下さるゝ身と爲り斯く苦みを受る事をはあれり去れど余ゝ一時の情に引かされ深くも考へずして期る誤ちを冒したれば嬢よ余が心れ中を憐みたまへ、猶ほ言ひ度き事山々あれど言葉を探し出す事難く殊に時刻を外しては辭見の恐れも有り餘は次便に譲る」とあり是だけ文意みてゝ身ふ覺へ無き人の手紙とゝ思はれど我罪の逃れ難きを知り痛く失望せし如き樣子さへ所々に見ゆるにぞ大川も直家老人も縱終りて嘆息せり

武保の手紙を讀み終りて痛く憂ひに沈みたる直家老人の顏を見て錦嬢は辭を揚げ貴方方と「此手紙を見て武保を疑ふまもか」と問ふ迄ば力を落せし辭音に王「ナニ、疑いは仕無い！」と曖昧に答へたり嬢は次に大川万英に向ひ「此手紙に外の代言人を頼んで呉れと書て有るのが貴方のお氣に障りましたら幾重にも御用捨を願ます　大「何ふ致しまして、私しゝ最ふ此手紙を見ぬ先ら何ふしても此地の代言人を頼ねばあらぬと思ッて居ます、早速此眞倉氏とやらを頼ませう」錦嬢ゝ又を手紙を取上げて讀返し「何ふを此手紙で見れば武保ら身に覺ら有るかとも思はれますれど、決して爾では有ません、武保は身に覺へが無をて捕はれし故餘り心事に力を落し氣力も抜て夫で此樣な氣の弱ら手紙を書ふのでは有ませう」と述る折ふも此間の外より入口の戸を輕く叩ク者あるふ由り直家老人は振向きて「誰じゃ」と問へば私しで厶います」と答ふるゝ武保が母侯爵夫人の辭音なり夫人は昨夜より人々ら吾に隱して何事をか相談せるかと心附しも今までは案知ぬ顏にて見過居たるも今ゝ武保を思ふ一念にて最早や辛抱も出來ざるゝ斯ク此所に入來りしあり夫人ゝ人々の憂ひ顏を見て早くも事ゝ樣子を察し「又新しい証據でも擧ましたか」と問掛けたり、此時錦嬢は夫人に

振向き「阿母さん、此事柄は大切の事で若し外へ洩れ聞えては正直お人の役目にも掛ります
すから何の機あ事ら有ッても他言は難く出來ませんよ、其ふ積でお聞下さい、實は昨日の
晩内々に通傳を求め武保に手紙を送りまして先程武保から此手紙が參りましゑ一夫人い返
事をもせず直に件の手紙を取上げて讀み初めしら猶ほよみ終らぬ中に早々も顔の相ゑ變へ
得も云へぬ悲みれ色を現いしたり、頓て讀終るや迫來る涙を押へも敢ず擂と傍への椅子ふ
仆れ「此手紙でい最ふ武保は助かりません、先ア何ふしゑら好ムいませう」錦嬢は寄添て
「阿母さん貴方は此手紙で武保を罪人と思むますか、大事の貴方ら其樣な事でい了ません
」と云へと大川も言葉を添へ「イヤ此手紙でと未だ失望あさる事い有りません幾等潔白の
人でも不意に牢へ入れられて言解き惡い証據が澤山ふ出て來る時い我身で我身を疑ふ初め
隨分失望の言葉を出す事にも成る者です其道理は極々正氣の人が俄に狂顛病院へ入られて
若しや本統に氣ら違たでは無いかと自分で自分を疑ふのと同じ事、例令ひ武保殿ら自分で
失望なさッた柄とて外に居る吾々は決して失望ふ及ません」此言葉に少しく力を得て夫人
は漸く顔ふ擧げ「夫でい何と致せば宜うムいませう」大「此手紙に有る通り豫審調べの濟む
までい靜かに待より外致し方ら有りません」之を聞き直家老人進み出で「イヤ大川氏、唯
だ安閑と待ては居られまい第一ふ此手紙に在る通り輕袋判事の掛を罷て貰ふ工夫を廻らさ
ねばー」大川は首を振り「イヤ夫は到底出來ません陪審官ゑらは被告から故障を言ひ立て
取替へて貰ふ事が出來ますれと掛り判事を取替へる事は法律が許しません佛國刑法の第五
百四十二條ふ其明文が有ります、違て判事を取替るとゑらば控訴院へ相當の理由を申立て
其許を得た上で無くては出來ません、武保殿が輕袋れ掛りを脱け度ら云ッて居ると云ふ事を
他人に知らせるだけでも武保殿の不爲ですから是ざけい此場限りに致しませう　直「でも夫
では困る　大「イヤ是が法律の精神ですから幾等困るとも致し方ら有りません夫をりは先づ
武保殿が翻み越せし當地の代言人貝倉民を呼び之に相談するが大事と存ます」道理せ光し
此言葉ふ爭はん樣も無けをば一回承知して直に貝倉氏に迎へを出せり抑ゑ此貝倉氏と云へ
るは年既に四十を過ぎ代言の事には充分の經驗ありて澤邊町第一等の法律學者第一等の雄
辯家と崇めらるゝが上に其心飽くまでも正しく日頃不正の公事を取扱ふとを爲さず、自ら
充分に道理ありと思ふ訴訟の外い決して引受る事ふきゆゑ此人の一旦請合たる訴へにして

勝を得ぬと云ふ事あし去れば法廷にて眞倉が原告ありと問ふば人々ハ裁判の前より既に原告の勝公事あるを知れりとかや、斯る性質なれば時に由非常の禮金を持ち不正の訴訟を賴來る人も多けれど眞倉氏は其度毎に痛く怒て依頼人を追返それみかハ其言葉に曲る限の有る時は遠慮も無く窓より外へ投出し半死半生の目に逢せて返そ由誰れ知らぬ者も無き程あり、此人兼て武保と懇意にまて山堂家迄も親しく出入りする身ある故頻で迎へ応答て直家万英等の集れる一間に入來れり、人々は今や遅しと待居る際なれば手を差延べて挨拶すれど眞倉ハ何と無く晴れ遣らぬ顔附なれば錦嬢ハ早くを心の中にて眞倉は武保を罪人と思ひ居る者なる可しと見て取たり、嬢ゞ此推量と中らざるも遠からぞ眞倉は絶へず裁判所に出入して裁判官の意見を初め法律社會の評をも聞をに武保ハ罪無と云ふ人ハ一人も無く殊にハ武保ゞ何の辨解をも爲し得ずして空して囚牢に繋がるゝは愈々其身に罪ある証據とも云ふ可き者あれば彼れ是れを考へ合し扨ぞ嬢の推量せる如を武保を賊ヒ罪人と思ひ込むふ迂りまあれ、是より眞倉ゞ如何なる事を言出るや次章を待て說き分けあん

第十四章

代言人眞倉が靜かゐ坐を占るを待ち錦嬢ハ進み出で「眞倉さん、輕率判事は武保を何ふまても罪に落を積ですゝら此調ハ一年續てを果しが無いと思ひますゞ、何かして早く豫審とやらを濟せる工夫ハ有りますまいか」眞倉は眉を打ひそめ「イヤ私しの見込でハ遠からず豫審が濟むと思ひます　錦「でも武保が何時迄を言開をせぞ無言て居る時は　眞「無言て居れば當人に言開きの附かぬ者と見做し判事ハ調を終りまそ　錦「當人に言開きの附かぬ事は有りません、譯ゐッて無言て居るのです　眞「何の樣ゐ譯ゞ有ても其譯を自立ぬからは判事ゐ於て言開きの附ゝぬ者と見做します」最落附て逃來る此返事に人々は益々武保が身の危殆を知り、中にも侯爵夫人は堪へ兼ね「眞倉さん無言ッて居れば罪ゞ無くても罰せられませうか　眞「罪の無い人なら必ぞ言開きを致しまそ言開きの出來ぬ以上は自分ゐ覺へゞ有る者と認定されても致し方が有ません、此上一日でも無言の儘で居れば益々危くあッて參まそ武保殿も自分に罪ハ無いならば早く言開きを仕さうゐ者では有ませんか」錦嬢ハ此言葉を聞咎め「夫でハ貴方も輕率と同樣に武保の無言て居るのを犯罪の証據と思ひますゝ、貴方は武保の親友で有ながら彼れが日頃の清き行ひを知りませんか」眞倉ハ益々落着きて「イ

や親友だから斯く有の儘を申のです成る程アの男と珍らしい正直人で私しは深く其氣質を愛して居ますから夫でも正直と云ふのは何の証據にも成りません、判事の手ゐ相當の証據ゞ有れゞ正直な人でも討せられます、武保が日頃の正直と云ふのは日頃彼れと懇意にする人々だけの知ッゝ事で外の人は知りません、所ゞ裁判官の手に在る証據ゝ誰れの目にも分る品でも、でもから今一層分り易い罷の目にも尤もと見へる証據を持出さん事には裁判官の證據に勝つ事は出來ません」と少の飾りも無く正直一圖に説示を此言葉ゐ人々と唯だ心に恐を増すのみゝり獨り錦嬢は顔を上げ「夫では何すれば宜ムいます」「外に仕方ゝ在りませず只武保に言開きをさせる丈でも、言開きをせずに其れ罪を逃れ様などとは何ふしても出來ぬ事で、夫に武保が若し此罪を犯さぬあら充分の云開きゞ有る筈でも」錦「でも武保は豫審の終るまでゝ云開きをせぬと決心して居ます、夫も其云開きゝ非常な事柄ゆゑ豫審ゞ濟で貴方に一應相談した上で無ければ口へは出さぬとヤます」「其倉ゝ暫く考ゞへて「ハテな、牢の中に居る武保の決心が貴嬢に爾詳しく分る筈ずゝ有りませんがー」此疑ひを聞き人々ゝ何と言ひ説ん言葉も無之唯顔を見合そのみなり、錦嬢ゝ思ひ切り「實ゝ裁判所へ出入する人ゝ細み内々で武保と手紙の遣取を致しました、是が武保から來ゝ返事で有ます」と差出す手紙を眞倉ゝ受取りて讀終りしゞ一入眞面目になりて大川万英に打向ひ「其「吾々代言人ゝる者ゝ職業上の規則として法律を潜ッては成ません密獄に居る者と密かに手紙の遣取をするあゞとゝ以ての外ー君が傍に侍て居あゞら此様ゐ事をお爲せヤす道は有りませまい」此厳しき一言に大川も思はず顔を赤めしゞ大「イヤ前以て氣が附けばお止ヤしを致ましたが今と爲てゝ仕方が有りません、併し最ゐ斯様に通信の道が開けたのゝ勿怪の幸ひ、私しゝ充分に之を利用する積です」「左様今と成てゝ仕方が無い利用するも宜からうがー」と云ひながら錦嬢に向ひ「此手紙に在る通り豫審が濟めば私しゝ早速牢屋へ行き武保に逢て見ませうがー夫にしても武保殿が豫審の濟むまで無言て居ると云ふのゝ重々の不得策です、豫審の中に無言て居てゝ公判の節に幾等申し立てゝも充分の効果ゝ有ません、假令ひ其言開きが事實でも掛り官ゝ必ず疑ひます、夫はと立派ゐ言開きが有るなら何故早く申立ぬ今まで黙て居たのは其間言開を作ッて居たのだらうと斯様ゐ疑はれても致し方ゞ有ません—今も大川氏の言ふ通り手紙遣取ゐの道が就たのゝ勿怪の幸ひですから直にも武

保に手紙を遣り早く言開妃をしろと勸めて お遣なされませ、何の樣な非常の事柄かは知らねど一刻も早く言立る外に有りません早速お勸めなされませ」と斯云ひ捨て眞倉は遽だしく坐を起ちつ一禮して此席を退妃為り是れ我顏色に武保を疑ふ色の現るゝを長居して覺られては人々に益々心配を掛けんと思ふ由るあり、跡に人々は猶ほ樣々に評議しされど兎に角眞倉の言し如く武保に說勸め操審の終らぬ中に言開きを爲さしむる外なければ早速書記鞭根に賴み再び武保に手紙を送ることに決したり是にて孃は我居間ふ退妃書記鞭根ふ當て幾々と一通の手紙を認むる樣ー「鞭根氏よ御身に是非とも話しさき事あり今夜九時頃我家の庭の裏口まで人知れを忍び來れ妾に必ず待ち居るあり、是非に是非にー御存じよりー」斯く認め終りて之を孃が日頃深く愛せる下女お何に持せ密かに鞭根ゞ家に届けをせさり、鞭根は昨夜錦孃に非常の事柄を賴れ義理と憐れみの爲め其用事を仕遂げさるをり一方あらず氣を勞し此日も例の如く裁判所ふ出勤しされど今日の我身に昨日の我身に非ず筆を持てども筆、指に添ず紙に向へど紙目に移ぞ大金を返せしは正直なる我心に嬉しき如く思へども職業の習ひに背しは護影き心持せられ去れば是て澤邊町第一等の美人第一等の淑女に心置あく信せられ斯まで深く力と賴まれしかと思へば心百端に迷ひて夢路を辿る人のゝし去れば今又孃の手紙を受取りて左右の思案も定らず其夜の八時半頃、出るとを無く家を出で歩むとるあく歩み來て山堂家の庭の裏口に待つとも無しに孃の合圖を待ち居さり

裁判所の書記鞭根ハ山堂家の裏庭に忍び行き錦孃の合圖を持ち居たるゝ夜の九時と覺しき頃孃は樹の間より現れ出で當ゝ見廻し聲を潛め「今日も代言人眞倉ゞ來て武保が默て居るのハ其身に罪の有る證據と見做される故早く言開きをせぬ事には益々其身ゞ危うひどヤますゞ之に付き何とかして其言開きをさる樣ふ勸め度いと思ひまして夫で貴方をお呼びヤしたのでムいます」鞭根も同く聲を潛め「イヤ夫ハ全く眞倉氏の云ふ通りで輕率判事も初めの中ハ充分の疑ひを抱き若や武保殿の外に誠の罪人が有はせぬかと心に危ぶ樣子ゞ見へましたれど武保殿ゞ何の言啓きをもせぬを見て今日此頃は全く武保殿を罪人と思ひ詰め程あく公判に廻を仕度に取掛ります、ですから何ぞかして早く武保殿に言開きをさせねば了ません夫ふ又武保殿の方では公判ふなるまで何の言開きもせぬ事と決心して居ますゆゑ貴孃から手紙でもお遣あさつて說勸めゝが宜ムいませう」錦「イヱ手紙位ゐでゝ了ません」鞭

夫では何と成います　錦「私しゝ外に工夫ゞ有りまして―　鞭「工夫が有れば猶の事、一刻も早く工夫通りに成るが宜しうムいませう」此時錦嬢は何事をか言出さんとせしゞ其事柄の餘り非常なる爲先に出兼て顔の色を替たれど曉夜の月明りに鞭根は夫と悟る由なく「シテ其工夫とゝ何で有ります」錦嬢ゝ思ひ切つて「私しゝ牢の中に忍び入り武保に逢さ上で充分に詳勦め度と思ひまそ」此大脫なる一言に鞭根は飛返り「ヤ、ヤ、貴嬢ゞ牢の中へ、何ふして忍び込みまそか　錦「貴方のお力を借れば忍び入る事も出來やうと思ひまそ　鞭「夫は又何ふして　錦「アの牢番の蘭太郎と云ふ者は夫婦とも以前此家に便れゝて居さ者ですからさゝ充分のお金を遣れば忍び入せて呉ようかと思ひまそアの男は兼てより金さへあれば牢番あどはせぬと申して居まそゆゑ、牢番を罷めて田舍へ別荘を持ち生涯安樂に暮そたけのお金を出して遣ります」鞭根は良久默然として考へ居たるが漸くにして首を擡け「左樣サ、此邊郡町の牢屋は都の監獄と違ひ夜になれば蘭太郎一人で預つて居るも同樣ですから彼れさへ承知すれば其通り出來るかも知れませんーが何れ程のお金をお遣なされます　錦「幾等でも貴方が好らうと思ふだけー　鞭「夫れでは明日私しが内々蘭太郎に逢、了るか了あいか相談して上まそう其の上明夜の今頃茲まで參つてお知らせ申します　錦「夫でゝ何ぞ御組み申しますかゝ此御恩ゝ何時までも忘れません」鞭根は堅く受合て立去りしが嬢ゝ此の夜より此翌日へ掛け唯だ鞭根の返事如何にやと氣遣ふのみ何事も更らに手に附かぞ頓て翌日の夜の九時頃と爲りたれば嬢ゝ昨夜の如く私かに裏庭に忍び出で鞭根の便りを待つ程に鞭根ゝ時刻をも違がへず又忍來りて「お嬢樣、甘く相談が調ひました、少々お高いかも知れませんが蘭太郎に三千圓遣る約束を致しましさ」嬢は嬉しさに堪へざれば「先ア三千圓で蘭太郎ゞ承知しましゝ　鞭「ハイ夫も金貨で呉れと申まそ、夫ゝ蘭太郎も容易ならぬ事柄ゆゑ能く注意せねばとて詳しく手筈を打合せて參ましゝ　錦「其手筈とは　鞭「斯ふ取極めましゝ、明夜の六時を合圖に貴嬢ゞ牢の裏門の前を何氣なくお通りになれば蘭太郎の妻ゞ貴嬢を呼び込みまそ、若し呼び込まなければ明夜は差支への有ると云ふ知らせ故貴嬢通り過てお歸りなされませ、又呼込んざら差遣への無い知らせ故直に其傍へ行けは女房ゞ先アお通入なさいませとて貴嬢を因た中に在る自分の家へ連れて行き奥の間へ通します奥の間に侍て居る中に蘭太郎ゞ囚の部合を聞て宜時分に歸りまそゆゑ其時蘭太郎に連られて囚屋へ行くの

です、四屋へ行て面會ら清めば再び門太郎の家まで歸り朝さで其奥の間で明さねばありませんゑ、午後の七時から朝の六時までハ蘭太郎の妻でも外へ出る事ら出來ませぬ故、夜ら明けてからお歸りに成るので有ます」錦嬢ハ生れてをり今まで二十年の間一夜たりとも祖父直家老人の傍を離れし事おく又一夜さりとも他家に泊りさる事の無き身あるに見も知らぬ恐ろしき牢の中に一人一夜を明そとは最ら爲し難き事あれと武保か爲とあらば何をか厭ハん、嬢は習ひて其事を承知しつ鞭根に厚く禮を述べて我居間へと歸り來しか茲に一ッ嬢が身ゐ取り最と困難の事と云ふは先ら祖父直家の許しを受くる一條なり、直家ハ日頃嬢ら願ひと有らば一ッとして聞入れぬハ無く殺には二万圓の大金をば其入用さへ問はずして與へし程あれと荒き風ふも當し事なき我ら最幾れ孫女を聞くさへも恐ろしき牢の中に一夜を明さしむ可きか、嬢も直家が容易に許さぬを思ひ知るを祖々ゑ言葉を考へて最も巧に直家を說きをき直家ら聞くよりあく顔の色を變へ「決して〳〵、其樣あ事は決して出來ません錦「でも武保を助けるためにハ斯樣をねばありませぬ 直「イヤ何と云ッても其樣な事は出來ません、是非とも武保に逢ね點あらぬと云ふあら侯爵夫人を遣りませう夫人ハ武保の母たゝら母が說勸めれば武保も其言葉に從ひ今までの決心を改めて言開をするで有ふ、若し又母ら說勸めて聞かぬ程あら其方ら勸めても無益の事じや 錦「夫ても勸めて見ねば氣が濟みません 直「イヤ何と云ッても私は最ふ決心して居る、何ら何ふ有ふと其樣あ事ハさせません」と堅く執ッて動かざる此の終局ハ次章に說かん

第十五章

牢ヶ中に忍び入り想ふ男を救んとする折角の錦嬢が辛苦も今は直家老人の一言ゐて空を水の泡に歸せんとそる最も本意あき折あれば錦嬢ハ涙を浮べ「祖父樣、今までは私しの願とあらば何一ッ聞入ぬ事あれ貴方ら又、何故一生の此願をお聞入下さいませぬ、此ら後は何ありとも貴方のお言葉には背きません此事ばかりハ後生ですから許そと仰やッて下をいまし 直「イヤ此ばかりと何ふ有ても許されぬ、汚れあき淑女の身を去て聞くを面も恐ろしい囚屋の中に一夜を明そとは一コレ其方は氣でも遊ひはせぬか 錦「氣が遊ッさかも知れませぬ一貴方が何を仰しやッても武保ハ名譽と武保の命に拘はる大事です此ばかりハ思ひ止まる事は出來ません 直「イヤ世間も知らぬ其方の心では爾思ふも無理ハ無いら男の心と云ふ

者は又格別の者で殊に武保ハ正直者ゆゑ其方ゞ囚の中へ忍んで行かば決して嬉まれと思ひハせぬ却て餘りの大膽ゴ其方は愛想を盡されるよ」錦嬢ハ悲しき聲を揚げ「愛想を盡されても好うムいます現在貴方に許しを得ぬ婚姻の所天が牢の中に苦んで居るのを救はずには居られません、直家老人は容形を正して叱るゞ如く聲を荒らげ「何ゴ云へば斯ゴ云ふ、始末に終へぬ！此ゆゑに言ひ聞かすのを聞かぬあら、私は是から囚屋へ行き蘭太郎に逢て斷ツて來る、蘭太郎も一旦此家に來公した身で有ながら金の爲めに主家の娘を汚ハしハ牢屋の中へ忍び入らせるとは恩を仇で云ふ者だ、次第に由れば掛り官に密告して斯樣な不正直な奴は即刻免職させて遣る」で云ひながら氣色を替て早立去らんとするに由り錦嬢も今は爭ふ力無を遽だしく其腕を引留め泣聲を出さて「お待下さいませ祖父樣、夫ゆゑ迄に仰有るあら最ゴ此事は思ひ切まも、ハイ思ひ切て明日から尼院へ這入ます尼にあれば此悲ハ泣顔を又と貴方にお見せヤ事を有りますまい、武保の事も忘れます、涙の中に生涯を埋めます」と云つゝ直家ゞ膝に泣伏ば直家ハ唯失望ゴ前後を忘れ老てハ跪き涙と共に太き嘆息を發そるれみ暫ゞ程ハ言出ん言葉も無し、頁やりて直家は我に返り倩々思ひ廻遑すに錦嬢

が日頃の氣質として一旦思ひ定めし事ハ飽までも推通す性分あれば斯迄心に決せし事を猶も制なゞ愈々尼院ゴ入んも知れず左無ゴとも若愛ひの餘り病ひ戎嚴を事ともあらば取返しの道あからんと空しく心を腐そ中、泣伏せる嬢が熱き涙點々老人ゞ冷き手の甲に注ぎたれば者の心の解け易く早や顏色さへ柔ぎて「コレ嬢、泣くのじや無ハ、夫ほど迄に思ひ込んゞ事と有らば、其通りするゞ善い私が牢ハ傍まで送つて遣るから一サ最ゴ泣止んで〳〵」斯く優しく言ハるれば嬢ゞ心も打解けて樣々と直家ゞ心を解慰さめ猶ゆも彼れ是れと其手續きを語り出たり、斯くて此翌日は午後の五時頃と爲り嬢は人目ゴ立ぬ樣淡然せし服を着け黑き頭巾を被りて金貨三千圓を手提に入れ重しともせぬ携へ持ち祖父直家ゞ腕に縋りつゝ獨り代言人大川万英にのみは事の誠を打明し其外へハ單だ親類の家に行くとのみ言置きて町盡をある牢屋を指して急ぎ行けり、頓て牢屋間近く辿みし頃彼方を見れは裏門の外ゴ蘭太郎の妻お稻と云へる者唯一人佇立み居るにぞ嬢と鞭根ゞ約束の違ハぬを喜こびつ直家には强て別れを告げ何氣あき眼にて其傍ゴ近けばお稻ハ如才あく笑顏ゴ作り「オヤお嬢さまお單身で何方へ一爾う、伯母さんのお宅へお泊ゴ掛けに、先アお立寄りあさいましお入し

振で煮花でも入ませうー」と返事も待たず嬢が手を取り門の内へと連れ入しゝ三千圓の金貨を拾ふ如き心持ある可し此時までも直家老人は嬢が姿を見送居たるが獨り口の中にて

「何か間違でも無ければ好いがー」と咳きあぐら瓜紀足を引摺りて立去りぬ。抑も此牢屋と云ふは敷地千五百坪ばかりあれど四方に高き石の塀巡らせ塀の中に種々の建物あり屋根には風霜の痕を殘し庭には苔紀苔寂びて幾百年を經し者あれど壁一片落ざるゝ其建築の堅紀を知る可き罪あき人も唯一目此有樣を見れば先づ其肌ゐ粟の浮ぶを覺ゆめり、流石の嬢も顏の色全く乾くまでに恐を生ぜたれど心剛之ては叶はじと戰を足を踏締めはお稻の後に從ひ行くに裏門を入りてより狹く暗らき壁と壁の間を溜り幾回りか曲り行くうち長屋と思しき一構あり是ぞ蘭太郎が住む所あり此家ゐは下に二間二階に二間あり家内と蘭太郎とお稻の二人のみあれは物凄きほど靜なり嬢はお稻の案内に任せ其二階ゐ登り見るに奥の一間ゝ掃除して薄暗き洋燈を釣しあり嬢は此間に入ると均し之今まで張詰めし心も一時に弛みされば宛も魂魄の溶けし如き搖とばかりに古椅子ゐ兎れ沈めり、お稻は下に降り何やらん飲物を持來り嬢の此有樣を見て「オヤ貴嬢何ふかゐをいましたか」嬢は漸やく首を擧げ

げ「イエ何ふも仕無ゐよー和女と先づ暫らく私しの傍に居てお呉れーシテ蘭太郎は何所に居るエ 稻 直に玆へ參ります唯今外で見張をして居まもから」と云ふ中に大地を叩く如く重き足音して階段を登り來る者あり是れ則ち蘭太郎あり蘭太郎ゝ邊を見まわし「アヽ仕合せあ事にゝ誰も見て居あんだ、己ア最ふ隣りの犬が嬢樣戎吠ゝせぬかと氣が氣じやア無いから麵包の屑で欺かして漸と裏の庭へ連れ込んざー此で免職の氣遣ひ無ければ好ひ」殊更らに免職と云へる言葉に力を入れしと早や約束の催促ならんと錦嬢ゝ心に頷首き手早く草包を口を開きて「あに其心配には及ばぬよ」と云ひながら三千圓の金貨を取出したれば古き卓子と其重さに撓むかと疑はるゝばかりなり

錦嬢が取出せし三千圓は總て五圓金貨にして五十個一包(二百五十圓)ゼ者都合十二包ありで三千圓ー封、封、封を切てゑ好らうか 錦「念の爲ゑ檢めて受取るか好い」蘭太郎ゐ封を切らんとそるは其數を撥むるにゝあらで唯新しき金貨の光を見其澄たる音を聞き我心を慰ませんとする最とも罪あき了見あり嬢か許しを待兼て早くも包みに兩手を掛け呉央よりへシ

折る如く十二の包みを悉く破れは卓子の上に堆く積上りたる六百枚の五圓金貨、蘭太郎も呆るゝ如くに目を見開き「是を一殘らず私しに、女房マア見て呉れ、コレ異息ゞ掛は蜘と蠶る所は全て鏡の樣た、一寸とコレ手に取て見ろ、粒は小いゝ重い事一」我を忘れて喜べどもお稻は流石に女の謹しみ疾にい手さへ延ち得す氣の毒相なる聲音にて「私し共が今十年若ければ此樣なお金は頂きませんか最ふ蘭太郎も五十の上ですから此を免職にあれと其日を送る當も無し、子エ先ア、濟ませんゝ頂きまを」錦「ナニ其樣お心配には及ばぬよ、私の身ふ取ッては幾等でも無いお金だから一」蘭「ヘエ女房の云ふ通り年ゞ年ゞから濟ませんゞ頂きまを、コレふ稻早く笆を持て來ゐ、笆へ入れて布團ゝ下へ仕舞ッて置くから一」大騒ぎふて漸く此大金を何れにか隱し置き蘭太郎は追從たらゝくにて「嬢樣後程首尾を見繕い御案内を致しまをから夫まで窮屈でも此所に待てお出あさん」と言置きて牢屋の方へ出行きゝより、此より凡そ三時間が程嬢はお稻と共に此室ふて待居たるゞ夜は早や十時を過る頃蘭太郎は角燈を提げて階段を登り來り「サア嬢樣、鶴之助に酒を呑せ其眠ッたのを見届けて參りました是から直に御案内を一」錦嬢と此言葉と共に坐を起ちて「サ行きませう」とて蘭太郎の後ふ從ゞひ此所を立出るに外ゝ是れ高き兩の塀に介りゝる石の廊下ふして空に月は有と此深き谷底を照す一面の黑暗をば唯だ蘭太郎の提ゲたる一の角燈を目當として從ひ行に我穿る靴れ音四方に響渡りて靜かある夜を叩き破ると聞ゐ物凄きと云ばかりあし大抵の事ならば此音ふ先足れ逕を留む可きあれを嬢ゝ唯だ武保を思ふ一念に、恐しさへ打忘れ右に潜り左に拔け幾十間か進みしと思ふ頃傍の壁の高き所ろに一尺ばかりの角窓あり裏をり薄暗き燈の光り苔結す壁に青く映れり、蘭太郎ゝ足を留め「是れが武保樣の牢で有りまを」武保の牢と聞き嬢ゝ張詰めし心弛みて思はずも躍跳きつ蘭太郎が手ふ取縋り「少し待てお呉れ」蘭「何ふか爲さいましたか」錦「イヤ何ふも仕無いかー少しの間」と言ながら膝を曲げ石廊の上に平と坐し兩手を擧げ天を拜み「神よ妾に力を與へたまへ、妾が所夫武保の固き心を解和らぐる聖力を與へ給へ」と嘆つが如き小聲にて暫くが程神を祈りつ又起直りて「サ此で好からー」と云へば蘭太郎ゝ壁かと思ふ所に最長き鍵を突入しゞ是壁には有らで鐵の戸なり鍵を三ッ四ッ廻そに連れ戸ゝ巨蛇の口を横にせし如く猛り開きて其中より淋青き火影の映り來るは武保ゞ憂獄の夢を照せる燈影なる可し是ふて蘭太郎は

孃ゞ手を引き已れ先に立りて此巨蛇の口に沒りたり、抑も武保は六月廿三日金曜日の朝此牢に入られてより今日は六月廿八日水曜日の夜にして其間宛も一百二十三時間空しく此中に在りて時々取調べの爲め判事の出張すると番人鶴之助ゞ食物を送り入るのみ斯く夜更に至りて牢番の入來るは絶て無記事あれば蘭太郎の姿を見て怪みあゞら起直り「何の用事だ 蘭 貴方の所へ面會人ゞ參りました 武 ナニ面會人ゞー」此時蘭太郎は我後ある錦孃は我前に突出し且つ角燈を擧げて明らに孃ゞ顏を照したれば武保い宛も寐惚たる人の如く「其方いー」と云ひしのみにて身を後に退き空く孃の顏を眺むるい我神經の攪亂ひて斯を不審儘の幻しを見るには在らぬかと疑惑ふ爲ある可し良久にして又も幽微ある聲を出し「錦孃ー錦孃かー」孃も天井に箝めゝる湖暗き牢屋の燈火に映し見るに武保が姿は愛ひの爲に衰れ果て壯年血氣の色は空く褪め靈して幽靈かと怪まるゝばかり、貴公子の面影今は病人の相と爲り見るさへも哀れある想ひをるにぞ弄り寄らんとそれど足痿へて身進まぞ口を開かんとそるも衍澁りて言葉出ず兩人均しく呆れて顏と顏を透し眺むるのみ、蘭太郎ど此樣を見て氣を利し「星川樣、全ゞお孃樣で有まを」山堂家の錦孃で有ます、サア最ふ少し傍へ來て能くお顏を御覽じませ」と云ひながら武保を引寄せされば武保い初めて此事の夢にも幻しにも有らぬを知り「オヽ全ゞ錦孃で有たのか」と孃が身に縮りつきたり

第十六章

武保が錦孃に縮るを見て番人蘭太郎は牢の外に退きさり、錦孃先づ言葉を開き 貴方ー祖父餘の仰有るにい乙女の身として牢の中へ忍び行けば愛想を愛をれると云ひますけれど、好しや愛想を盡されても直々貴方に申し上ねば成ぬ事が有ましてー」此時武保は漸く夢醒し心持して「能く來て呉れた牢の中に捕はれて居る此不仕合な男に愛想も盡さぞー先ア何ふして來た能く顏を見せて呉れ 錦「ハイ貴方を救ひに參りましさお諫め申しに參りました ー貴方が何時までも斯して居れば私しは申に及ばず阿母さまや親類一同の心配い一通りぞ有ません就れも泣惑し哭明して居まをー貴方親類一同の悲しみを救ふと思ッて何ふか私しのお願ひを聞入れて下さゆまし ー先日のお手紙に豫審の濟ひまで言開きはせぬと有ました ゞ今言開きをせぬ事では何ふしても助からぬとやます具倉を初め都の代言人大川ゞ是非豫審の中に充分の言開きをせねば公判へ廻つた上でい取返しゞ附かぬと申します貴方か卑人

で無い事は誰も存て居まずれは罪か無けれい猶更言開きを成らねばありまをまい、言開きの出來ぬ者は証據の有無は拘はらず罪が有ると見做されて罰せられると云ひますから無言て居るはど險呑な事は有りません」武保は何の言葉も無く宛も我顔色の青くあるを隠をんとをるど如く徒ら首を垂れて聞き居さるる漸くに顔を擧け「イヤ何ふも仕方か無い私も初から其事ふい充分氣ら附て居るけれど一盲解きをせねば益々一判事の疑ひを深くをるとい思ッてを錦「貴方い爾ふ氣が附きながら今まで其言開きを成らあいのですか、貴方にも似合をい何是早く打明けて仰やりませぬ、貴方は御自分の危い事ど分りませんか　武「イヤ分ッテ居る一詰る所い首切盗に迄戒られる程の嫌疑ゆゑ早く盲開きを仕ようと思ッてを夫ふい又事情ら有て一　錦「イエ何の様ゑ事情でも身に覺への無い罪を黙ッて受ると云ふ事い有りません、貴方の身に萬一の事ど有れば一阿母をんも私しも涙の中に泣死ます、貴方の一身にと三人の命か繋ッて居ますゆゑ〻方の自由ふは爲りません、私と附母さんの爲を思ふて早く言開きを爲いまし」武保い最深き嘆息を發し「イヤ自分の一身から人にまで斯心配を掛けてい澄まぬとは知ッて居れど迂濶ふ言開きをしてい飛でも無い事にある、其　と先ア斯してまで疎先に來て呉れさ者ゆゑ容易にい承知しまいろら一通り言開せるが、此度の罪と云ふは少しを覺への無い事あれど不思議な事には何方を見ても此身ふ掛る疑ひを深くそる様ゑ事ばかり我あがら殆ど合點が行かぬ、我身と我身ど疑いしいとは此事で判事ど私を罪人と見認るを無理は無い、此私ら判事でも矢張り自分を詮議せねばあるまいと思ふ位だ　錦「でも貴方其様ゑ筈と有ません貴方の身に覺へど無ければ幾等判事に証據が有たとて其証據は皆間違ひでを、其間違ひを言開くに少しも憚りは有りまをまい　武「イヤ夫ど〻、爾譯も無く言開かれる次第で無い、私か今、此身に覺へか無いと言へば判事い必ず問を設け夫では其方は彼の夜何所に何をして居さと斯ふ問ふに極て居る、素より自分でい何所に居て何を仕たか詳しく覺へて居るけれと夫か口へ出して盲はれぬのた、今私ら盲開きをする日にい私ゑてい有ません能其でを名を指ねばあらぬ、好や名を指さずとも私の言開き我聞けば其名か何ふしても自づと理とれる　錦「其名の現をるのは猶結構でい有りませんか誠の罪人の名か分れは恐々貴方の濡白か分りませう　武「爾思ふか間違ひだ、此犯罪は前々から充分に手を廻して在る事で先の奴ら何ふしても此武保に疑ひの落る様ふ巧く仕廻て有

るのだから先の奴か捕まッた所か先は充分に言開きが出來るのだ、出來る樣に仕細で有のだ、サア先の奴ら旨く言開けば其疑ひい又も此身に返ッて來て今度い其上ゐ證告の罪まで負ねばならぬ、誣告とは罪の無い人に罪我附けると云ふ事で私か自分の罪を逃れ度た先苦し紛れゐ潔白ゐ人を汚した者と認められる― 錦「夫では貴方、先の仕打が餘り惡いでは有ませんか、其樣ゐ惡人なら遠慮は有ません直ゐ其名を出してお遣りなさい 武「あれサ其方も分ぬ事我云ふ、前の奴い前以て自分ゑ罪の掛らぬ樣又此私を疑はせる樣少しの抜目も無ゑ仕組で有から仕方ら無い、裁判所迄引出した所ら先の奴を罪とする証據い一ッも無ゑ益々此の身の疑ひを深くすると云ふのに― 實は先の奴ら前以て内々此私を警めゑ事も有ら其時充分に氣を注けて用心したあら此樣ゐ謀事にも落あんざゝらうけれど豈夫と思ひ油斷をしたのら此方の誤り今と爲ていい取返しが附かあい― 犯罪の証據ら先の奴へは落すして此武保へばかり落る樣に何から何まで拵へて有ゑのでー是を思迄ば此世の中ら恐ろしい―」と言ひ終りて身震ひを爲たをば錦嬢も此意外ある言葉を聞き一度び青くありたる顔色は今は白くなるまでに驚きしが又ゑ心を取直し「夫い先の人ら何の樣ゐ旨ゑ計んで有るか知りませんが夫でも虚事ら眞事に勝つと云ふ事と有ません少しも包まず其本末を詳しく言立るが好うございまも、全体最ア何樣な事柄です切ては私し丈ありとお聞かせ下さい又相談も有りまもから エ、エ、と」推問へば武保は伏俯むきて返事あし 錦「貴方其事柄は私しにも聞をれませんか、其樣な秘密ですら 武「誰にも聞されぬ、誰に聞せても眞事とは思とぬ 錦「でも私しには― 武「其方には猶聞かをれぬ― 清き乙女に斯樣ゐ汚らはしい陰謀を聞かせては其心の汚れにあり」武保ら顔は色より言葉は調子に至るまで平生とい全く異り殆と死物狂ひは決心を現せしかと思はるゝ程あれば善しもの嬢も哀れみは外ゐ恐れを生じ「夫でい貴方、其事を誰にも知らさぬ裁判を受けますか 武「イヤ孫蓉が濟ぬば具倉に相談し其上で言ふとも言はぬとも決定する夫までい何ふ有ても―」武保が心の餘り解け難きゑ嬢は泣出をんとするまでゐ失望せしかと不審思ひ附く事ありて衣囊より筆の附きゐる手帳を取出し「夫でい具倉へ當て其事を此手帳へ手紙の樣に認めて下さいまし誰にも見せぬ私しが具倉まで屆けまもから 武「イヤ手紙ゐも書れない」嬢い怨みの聲を揚げ「貴方餘り他人らしいでと有りませんら私しら是程までにお願ひ申すのゑ― 武「イヤ嬢、其樣に言て呉るゐ、私も武保

だ、御心配をるには及ばぬ今日まで胸を撫ッて辛抱して居る者も御言れてゝ辛抱が出來
あくなる私を夫と思ふあら、長い事では無い豫審の済まで此事ゝ云て呉るあー」と男の目
に涙を浮べ拜まぬばかりに頼むにぞ嬢も早や推して問返を言葉も無を齊しく涙に呉れける
所へ牢番の蘭太郎入來り「サア嬢様最ふ鶴之助が起ました早を行かねば見咎をられまを」
とて引裂く如をに嬢が手を取り牢の外へと連れ出せり
錦嬢と蘭太郎に牢屋より引出されしも餘りの悲みに心亂れたる折あれゝ武保ゝ分れの惜き
事をへも知り得ず唯ぞ夢路を辿る想ひして其後に就添へば何時の間にか早や蘭太郎が住家
ふ歸りをり、歸り見れば二階の一室に寐床の用意調ひ居る故、他愛も無を其上に横はりし
かと武保が言葉の節々を思ひ廻せば彼は非常の秘密を諸へ他人に計られて此罪を被ふる者
にて未ぞ其事の仔細は知らねを何しろ初を我思ひし程容易ふ言開の出來る事に非を言開か
をれば此儘に罪に落をれ去ればとて生中言開きてゝ返ッて罪を重くすを云へり心に懸る限
りゝあと獨り我氣を勞るのみ眠らんとするも眠り得を泣つ嘆ちつ涙の中に一夜を明せり、
夫は拐帰犯孫思の直家老人は昨夜錦嬢が牢屋の憲門に入るを見届けつ重き足を引摺りて漸
く家に歸りたれを嬢が身の上の氣遣れて一刻も眠り得ず明方に至るまで獨り寐蓙に腰を憑
け兩の手を叉ぬきて溜め息のみ發し居ふるが頃て東の白むと共に寐床をり馳出つ或は門口
ふ出て望み或は二階に登りて眺め嬢か歸りをのみ待居たれを朝の早七時頃に至りて猶其姿
の見へをるより終には失望の餘り代官人大川を一間ゝ呼ひ如何にせば好らんと相談を爲し
居たるに此所へ嬢は最打凋れふる躰にて歸り來れり、老人ゝ嬉しをゝ飛立ちて「アヽ歸ッ
ふかと云ひながら嬢が兩手を取りたるが忽ちに顔の色を變へ「オヤ此手の熱い事は一コリ
ヤ非常の熱ぞー何ふして病氣を引起しふ」嬢ゝ力無氣に倚子に倚り「ナニ病氣では有りま
せん夜前一夜を泣明したから夫で逆せたのでムいます」と云つゝ頭巾を去り覆面を取外せ
ば兩の眼赤を泣腫して最も痛々しく見へたり、嬢ゝ痛を失望の聲音にて「祖父様、武保は何
ふしても言開きを致ません 直「仕無ねとー夫ゝ變だシテ何と云ッふ 錦「私しゝも詳しい事
はヤしません 直「ハテ怠々變だーイヤ夫では言開きが無のゝも知れんを、存外自分の身に
覺へが有るのでー 錦「イエ爾じや有ません事柄が餘り虚の有で誰も誠にせぬと申ます本統
の罪人を知て居る樣子でをけをを夫も蘭番が濟で代官人真倉に相談しふ上で無をゝ言れぬ

とヤまを　直「でも最少し詳しい事を云たいらう、他人は兎も角、其方に話さぬ筈は無いが」　錦「イエ私しには猶更ら話されぬとヤましさ　直「ハテあ私には合點ら行かぬ　錦「イエ夫でも武保の言ッた事に少しも虚は有りません何でも深く秘密が有ッて容易に云はれぬ事と見へまを言葉の調子から其顔附が作事を云ふ時とは全で違ッて居ましたもの」斯く述來る錦嬢の樣子を見るに日頃には似ず氣力盡き夜前一夜に全く疲れ果し如くなれば老人は無遠慮ひ初め「イヤ嬢や其方も大分草臥て居る樣子だから先づ一休みするが好い委細は後に又聞ふ」とて強て嬢をば其居間に遣かしめたり、後に老人は最も失望の樣子にて「何ふも困た者ぞ、嬢に失望をさせ御いとて私も口では強ひ事を云て居るが夜前も踪られぬまゝ段々と考へて見るふ必ぞ此罪人が武保で無とは云れぬ、嬢にさへも其云開きを打明けぬ所と云ひ殊には嬢が目の腫れるまで泣て來た所を見れば益々以て怪いワヘ」傍に在る大川万英は此時初めて口を開き「イヤ其御心配には及びません何ふしても武保殿は罪人でありません　直「君は未だ爾ふ思まをか　大「ハイ益々爾思ひます兼て私しは自分の心で想像して居る事ら有りますが嬢樣の今のお言葉で武保殿の口振を考へ見ますに何ふも私しの想像ら當り相です　直「シテ君は何時其樣な想像を作りました　大「イヤ先日御一緒に星川村へ出張しました時貴方と頭痛らするとて庭園へお出ふ成り其後で私しは下僕案藏の口から一寸聞た事ら有りまして其時若やと私しは胸に浮びましさ、尤も是は單に一時の想像ぞけて殊には案藏の言葉が不充分ゆゑ少しも當にはありませぬがーでも私しは今少し此地の事情に通じる人ゆ内々問合せて見度と思ひますーハテあ誰か外に此地の事情に詳しい人は有りますまいか、假例ば區長仙田や醫師明登先生の樣な人がー」折も折とて此言葉の未た終らぬ内足音高く入來る人を誰かと見れば慈善病院醫員長過源醫者明登氏あり明氏は大砲の玉ら之と驚ばるよばかりに此一室へ躍り込み挨拶をへも爲さをして「何ふも困る〳〵馬鹿あ醫者ばかり多くてサ、彼奴等は揃いも揃ッて星川武保殿を亡しに掛ッて居る」と最も怪き事を口走るにそ直家老人怪しみて「先生彼奴等とは誰の事です　明「イヤ同業の醫者どもサ、實はナ過日此家へ上ッた時から其後今日まで四日の間は裁判所から擯ばれた醫者どもと拙者と共にアれ太々郎の心を吟味して居るぞヲ、所ら其醫者目等は皆な判事に諂い判事の都合の好い事ばかり云て居て拙者と意見が合はぬのじや、拙者は醫業の名譽を重じ怯ず臆せそ診斷も遊る

試驗も遂るから大變な事を發見した、トコロが彼奴等ハ判事輕蔑の氣に入れようとて多勢を賴み拙者の診斷を誤りだとヌカそのじや」抑も太々郎の事と云へは此事件に大關係れ有る者あれは大川は聞逃さぢ早くも盲を前に推出し「シテ先生、貴方の發見と抑有るのハ何の樣な事柄です」登は斯問れて大に滿足せし如く金縁の眼鏡を外し長き髪を振り立て「餘程不思議だか太々郎は全くの愚人では有りません、拙者の診斷では何ふしても食せ者さー

第十七章

醫士關登は先に太々郎の愚を憐れみ之を癲治し得させんと共立病院に引取りて種々の術を施こし終に治療の届かぬ者と見切りを附ぎたる人なるに今又太々郎を全くの愚人にハ非ぢ食せ物ありと診察せしは不思議と云ふも餘り有り殊に太々郎が愚さと其癲癇の一通あらぬは誰を知る所にして直家老人あとも彼が幼ぎ頃よりの樣子を知る者あれバ關登の言葉に驚きて「太々郎を愚人で無とハ先生何を仰しやります」關「イヤ愚人ハ愚人でもアレ程の愚人では有りません口も利るし物の道理も分ります、彼れ唯さ他人の憐みを買ふ爲に大馬鹿の風をして居るので、餘ッ程の食せ者です、其証據には彼の顏性ら身躰の樣子を御覽あさい、醫學上の定則で馬鹿は必ず身躰の中に不釣合な所が有る者です、所が彼ハ頭の恰好は申そに及ばず目鼻立ら口附まで極釣合好く出來て居て其上眼あとハ隨分小利口相に動きます其外身體の內部を見ても胃の腑が傾いて居ると云ふ事も無ければ心臟に中分が有るでも無し殊に手足の働きあとは十人並に勝れて居ます、木に登らせれば猿も及ばぢ平地を走らせれば一間半の泥溝を譯も無く飛越ます、其中彼れの癲癇だけは眞事さが、此癲癇が有るふ由り益々馬鹿の眞似が旨いのさ　決して本統の馬鹿では無い贋馬鹿だ、詰る所愚人で無くて痴漢的だー　直「馬鹿と痴頑的と違ひますか　關「大違ひです、馬鹿とは理も非も分らず心の足らぬ奴でも、痴頑とは心は滿足でも唯時に由りて非常に頑固剛情にあるのです、サ心ら滿足で居て頑固剛情だから鹿馬よりは餘ぽど險呑です」大川は耳を傾けて聞き居たるら心に感ずる所ありしと見へ「成る程」と呟けバ關登は益々力を得て「勿論痴頑と云ふのも廢者の一ッだら夫でも僞証人にハ充分なります」惡者の正直な人を罪に陷とさんとする時あと痴頑者をバ前以て慣して置き見もせぬ事を見た坏と言せるには此上も無く適當でも直ーでも先生は年太々郎を大馬鹿者と見做ーヒを投たでは有りませんか　關「アレは僕の

訳りざアの時僕ら最一ケ月も太々郎を研究したらは見破ぶる所で有ッさかを知をん、何しろ當人が馬鹿で無いのに馬鹿の真似をして居るのざから幾等療治をしても直る筈が無い春邊村でハ現に太々郎を馬鹿で無い食せ者だと云ッて居る人ざ幾等も有ります一貫に食せ者さ、僕さへ一杯食された程ざゝら一兎に角拙者は猶ほ醫員の取換を願ひ何ふしても太々郎が化の皮を引剝きまも、是さへ引剝けば武保殿の事件もグルリ引操返るよ違ひ有りません」大川万英は是に至り言葉を正し「イヤ先生太々郎が本統の馬鹿で無いと爲れば、武保の事件は取り返しが附きません、太々郎ハ馬鹿ざから彼れの申し立は何の証據にも立ぬと云へば充分の辨護に成まもゞ、若し馬鹿で無いとしゝ日には判事は得たり賢こしと圖に乗つて、太々郎は馬鹿で無いゆゑ充分の証人ざ、其の申し立は武保を罪するの証據と爲るおゞゝ言張るは必然でも、シテ見れば猶ほ一應考へた上で無てと詮議立をせぬが善らう俗に云ふ藪蛇に成てハ大變でもから」此一言には左しもの過激醫者あれも少し當の外をたる如く暫時眉を顰めて考へしが「イヤ僕は最ふ武保殿ゟ罪ハ無い事を確信して居たから少しも藪蛇に成らぬと思ふ、太々郎が全くの馬鹿で無ければ彼れは必ず他人の手足に使はれて、

見もせぬ事を見たと言立たのだ　大「イヤ太々郎が愈々他人に使はれて嘘を言立さと云ふ証據が有れば善けれど其証據あしに太々郎を馬鹿で無いと仕る日には武保殿は助りません、彼れが愈々他人の手先に使はれたと云ふ確かあ証據が有ますか　闕「其証據は無いが一何しろ太々郎は食せ者ゆゑ僕ハ醫者の義務として其偽りを見破らねば成りません　大「でも有りませうが、彼れが他人の手先に使はれたと云ふ其証據の擧らぬ中に彼の馬鹿で無い事が判事に知れては武保の不爲ゆゑ暫く其事は貴方の胸にお納めを願ひます、他人にハ餘り知せぬ樣に一」闕登ハ非常ゑ大川と直家を喜ばせる積りにて太々郎が事を知らせ來たるに二人は更に喜ばざるのみあらぎ反て危む樣子をさへ示したれは登は全く當外れと爲り痛く機嫌ゑ損ひて挨拶もせぎ出去りたり、後に直家老人ハ大川に向ひ「だが闕先生をアの樣に言込めさは少々氣の毒ゑよ、折角信切に知らせて來たのに　大「イヤ太々郎か馬鹿で無ぎハ此裁判に附き容易あらぬ事柄也ゑ實は篤と考へさ上で無きても充分の思案も附きませぬから彼アを云ッて闕先生の熱心を冷まして置ました、尤も愈々太々郎が馬鹿で無とすれば昨夜武保殿か嬢樣ゑ話した通り此犯罪ハ前以て武保殿ゑ疑ひの掛かる樣離かゝ充分仕組んで置ゑ証據ですから此裁判は引繰返ます武保殿の爲にあるます」直家老人ハ驚きて「ヒエー君ハ太々郎か全きの馬鹿で無ゑあら此裁判か轉覆をると言るゝのか夫では闕氏と同じ意見では無いか、同し意見で有りなから闕氏に彼の樣な情ゑ挨拶を成ッたとは一　大「イヤ實は今一應武保殿に問合せゑ上で無ては何方とも言れぬから彼の通り暫く包で居て呉れと頼みましさのでー若し牢の中へ問合せると言てハ嬢樣の大事の秘密まで洩す事と成ますゆゑー」直家ハ大川か考ゑの深きに感心し「成る程ー」ッと云ひしのみ、是より又も錦嬢を此へ所呼來り武保ゑ當て問合せの手紙を送りたるに翌日に至り武保きり左の返事來れり其文に曰く一「嬢を闕先生の診斷は全く當れり太々郎は左程の大馬鹿ゑ非す全きを他人の手先に使れて偽れ中立を爲せし事余か固く信ずる所あり去れと今此事を表て立なば敵に用心をさせ余か爲ゑゑは取返し難き損害と爲る故堅く内聞に爲し置かれよ、判事の言葉に由れば孫審を遠からず終る故夫までゑ所決して荒立る勿れー」此手紙と闕登の言ひし所と少しの違ひも有されば拠は太々郎こそ敵の道具にて有りさるかと人々ハ身震をるまでに且つ驚き且つ恐れしも今は武保の言ふ如く事荒立て可き時に有らねば兎にも角にも孫審の濟むまでハ此儘手を拱

ねて待つ事に一同評議を定めたり

春邊村の別莊に火を放ち黒戸伯爵を二回までも狙ひ打しは汗も何者の仕業なるや今までも証據にては星川武保に相違あけれど武保は唯々我に非ずと言張るのみにて豫審の濟むまで一言の言開きもせずと誓へり、去れば此事件の本末は豫審の終結まてゝ探り知る由あし豫審の終結濟時ゞ此事件の雲晴れ霧開く時なり武保果して罪あるか、罪あらば彼れ如何なる白狀を爲そ可きか、若し又罪あければ彼をが外に誠の罪人あらん誠の罪人は誰あるゝ聞まゝ欲し犯事にこそ、武保が將婚の錦嬢を初めとし山堂家に寄集へる人々と一日を百年の思ひにて只管豫審の終る日を待居たるに、終る日は終に來れり！○或朝の事豫審判事輕錢は既ゝ我手柄の全く爲りたる如く揚々として書記顛根を從へ武保の閉籠らるゝ中の一室に入來れり、最と嬉ある顏にて武保に打向ひ「其方を取調べる拙者の職務も今日で終りを告る、其方ゝ何事も申立ずゝ居るけれど既に充分の証據が擧ッたに由て、明日と此証據物件を裁判所へ送り其方を公判に移すから左樣心得よ！外に何か申立る事は無いか」武保若し我身ゝ犯罪の覺無くば豫審の終ると聞き顏に充分の喜びを現はすならん若し又我身に覺へあらば斯く聞て悲しみの色を出さん判事は彼ゞ心の奥までも見破んとする如く眼に尋常あらぬ光を現し武保ゞ顏を佶と見るに武保ゝ喜びもせゞ悲みもせゞ相も變らぬ青醒たる顏にて「イヤ、私しは自分ゝ身に罪が無ゝと云ふ外には一言も申立る事ゝ有りません　輕「フム罪ゞ無なら無で夫ざけの言解きをせねば成らぬゞ其方言開きゞ出來るかナ、アの夜何所に何をして居た　武「私しは無罪です　輕「無罪とばかりでは言開きゝあらぬワイ　武「私しは無罪です　輕「頑固な奴じや、無罪なら無罪ざけゝ証據を擧るゞ好い　武「私しは無罪！　輕「好々夫ざけの事あら公判廷で何とでも申立ろ、兎ゝ角唯今から其方の密獄ゝ解けたから、親戚朋友に面會願ひを差許す、夫ゝ嘘みたいと思ふ辨護人ゞ有るなら其手續きをしろ、又手紙を出しさければ届けさせて遣る、其爲め紙筆墨も此通り書記に持せて來た！」武保ゝ無言の儘にて鞭根より紙筆を受取りつ夕々と左の如く認めたり！「拜啓明朝九時に具倉氏を牢まで御寄越し下され度く候簡言！武保より」！　武「之を山堂家へ御届け願ひまそ」とて差し出せば輕錢は受け取りて書記と共に退きゝより○此の翌日の朝代言人具倉氏は山堂家に招かれて右の手紙を示されしが元來正直一方の人にて充分道理に叶ひたる訴訟の外ゝ一切受負

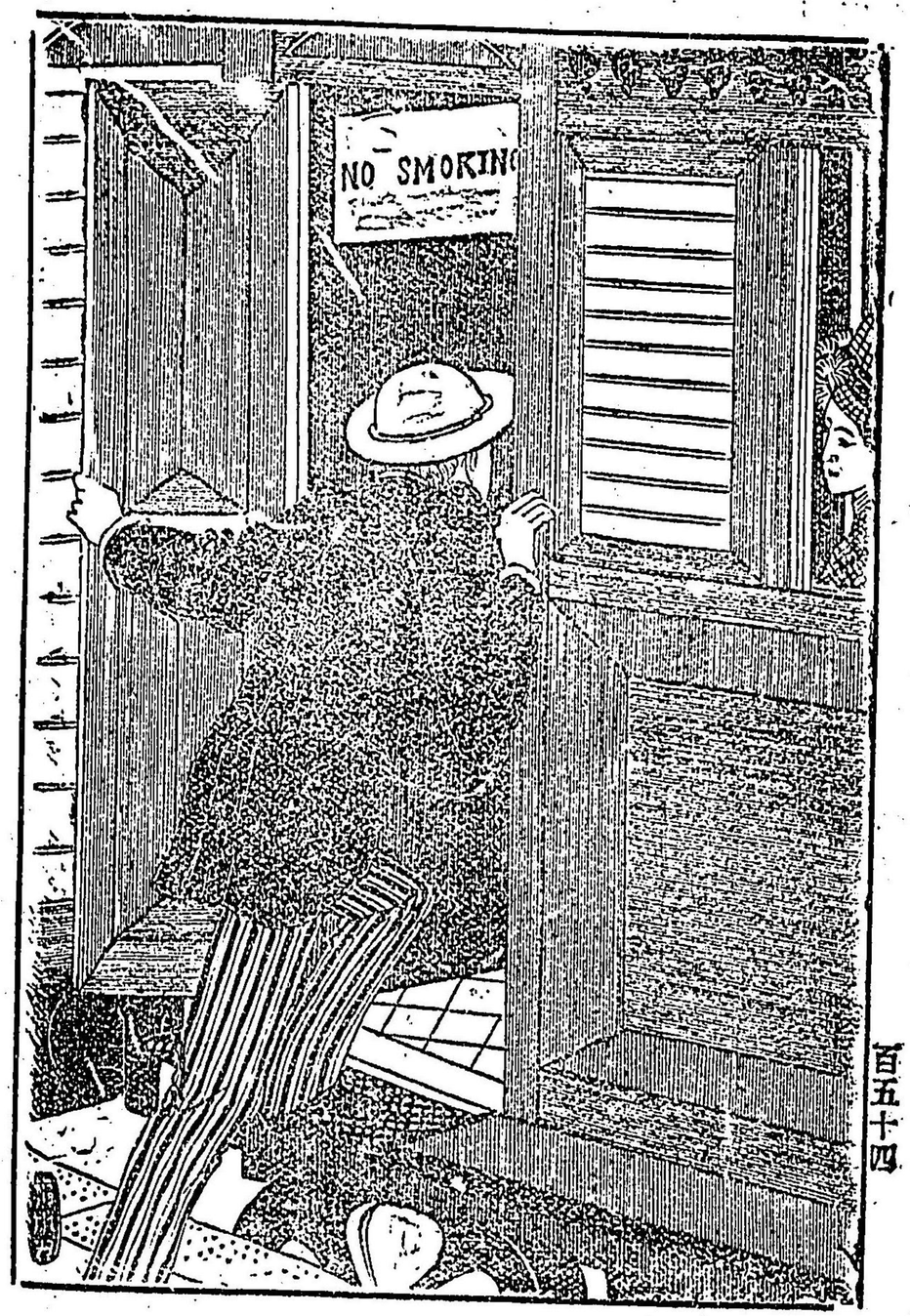
はぞと云ふほどにて殊には此人、武保に罪あらんと信ずるにぞ頼まれても頓ふは諾けぞ「イヤ先日も密獄ゝ解け次第に面會に參るとお約束致しましたゆゑ是れより參りて彼をの言ひらきを聞いては見まさど併し今から辨護のお請合は出來ません其言聞きふ偽り無しと認まれば私し一人にて當裁判は申すに及ばぞ控訴も致ませう上告も致しませう都合ふ由れば佛國中の所在裁判所を引廻しても厭いませんが其代り彼れの言開きが不都合と認むれば其場で遮絶して歸ります」とて充分疑ひの心を言葉に含めたれば錦嬢其他の人々は今更の如く心ふ危み恐るの念を起したり斯て眞倉は山堂家を立出つ牢屋ふ到りて武保の室に入れば武保は嬉しさに堪へざる如く兩手を擴げて走寄り「オヽ眞倉君、能く來て呉れた、僕ハ最ふ早く君ヨ逢い度いと思つて氣ば氣じや無ッた、アヽ稍と安心しゑ、是で先ア助かッた」と云ひながら眞倉の手我握らんとすれば眞倉い汚らいしいと云ふ如き身振りにて遽しく我手我引き無言の儘に眉を顰めて倩々と武保ぐ顔を眺め「アヽ可愛想にー」と咳きゝ武保い之を聞きて又も一歩を進め「君は僕を有罪だと思ひは仕舞い子」と言へど眞倉い何の返事も無し、返事なきい心ヨ疑ひ滿るあり、武保は此有様ふ失望して思いずも後ろに逡巡

あがら最口借げある聲音にて君までも僕を疑ふのか、第一の親友にまで疑はれるとは一君夫では將無いと云ふ者だーアヽ僕も斯と知ゝら初の日に殘らぞ言開きをする者ぞ一「君々、君ー僕は他人に計られて斯あッたのゞよー君ま能く聞て呉れ給へ、君ー君まで信じぬ程ゞから到底も僕ハ言開ぞい立つまいが僕は死刑ふ成ても好いー命い要らぬゞ名譽ゞ大事ゞー名譽さへ捨て仕舞へばナニ此疑ひを受けた儘で殺されても好けれどー」と云ひあがら佶と我心を取直せし如く又も進み來りて眞倉ゞ手先を碎くる程に握り詰め「君まア篤と落着て聞て呉れ給へ唯一言で分る事だ一言でー君コレ能く聞き給へ僕は黒戸伯の夫人の情夫だよ、密夫ゞよ、色男ゞを」と三度重ねて繰返せり、若し此土地の風俗と黒戸夫人の平生の身持ゞを知らぬ人あらば此言開きゞ聞きて何の感じをも起さぬある可きも苟くも黒戸夫人の品行正し紀を知り其慈善深きを知り其所夫に仕へて貞操あるを知る者は誰か武保が言葉を眞事とす可紀、去れば眞倉は聞くゞりも早く活と怒りて「偽りにも程が有るー」武「イヤ偽りと見ゞも眞事で有る事實で有る」眞「事實あらば証據ゞ有ふ」武「イヤ証據い不殘ぞ無くなつた」今まで眞倉の顔に現れ居たる怒りの色い漸く變じて卑みの色ゞ爲り爪彈の色と爲り

又變じて憐れみの色と爲り「コレ星川君能く聞給へ假令ひ眞事にもせよサ、確あ証據が無くては其樣あ事扨ハ口から外へ出す者じやア無いよ、先ア考へて見給へ」 武「イヤ証據ガ無くても今と爲ては言ゑ譯には行ない」 眞「夫じゃ今まで何故默つて居た 武「言無くてゑ濟ま樣に僕を助けて呉れるだらうと思つて今まで無言て居るのサ 眞「誰ガ助けて呉れる 武「黑戸夫人がサ」 眞倉が顏の色ハ倍々苦く恐しくなり「其樣あ途方も無い事を云ふから仕方ガ無い、此十里四方で誰か黑戸夫人ヒ行ひゑ慰めぬ者ガ有るか、君が何と云つても黑戸夫人に限てハ其樣あ事は無い、僕が斷言する」 武「君か何と斷言しても僕は密夫で有たから仕方ガ無い 眞「コレ君ハ幼年の頃から巴里に居て星川村へは折々來さばかり、又黑戸夫人ハ年中夫の傍に居て慈善會へも寺院へも所夫と手を引て來るでは無いか殊に黑戸家と君の家とは敵味方の樣ゑ憎み合て居る、夫ゞのユ何ふして君と夫人と合意になつた、サ何時の事だ、何所で逢つたのだ一々説明したまへ」 と聞入る可くも見へざりき

第十八章

倉眞が聞入る容子あきを見て武保は立腹し「君が何ふしても僕の言葉を信じぬとあらゞ仕方ガ無い達て信じて呉れとハ言はゑ併し君も朋友の好みゑ默ッて聞て居て呉れ給へ僕は初めて黑戸夫人と懇意に成てから今までの有枝有葉を詳しゑ話すから 眞「宜しハ聞うとも、サ話し給へ」 と手有合ふ白木の椅子に腰打掛け兩手を組で控ゆれば武保は暫しゞ程言葉の順序を案ぜる如く眼を閉じて考へ居たるが頓て徐々に言葉を開き「千八百六十六年八月一日の事兼て僕の家と黑戸家とは領地の堺爭ひで仲の惡ハ所から之裁仲裁ゑる人ゞ有て仲裁の宴會を開いたのだ、此宴會へ僕ハ親父に從て行き黑戸伯は夫人を連れて來た、此席で僕ハ初めて黑戸夫人を見染たが其顏形の美しい事と云ひ坐作進退の奥ゆかしい所と云ひ實に僕ゑ世間に斯までも能ゑ出來た女は又と有まハと思ひ込んゞ、併し其時ハ唯ゞ夫人に默禮を仕た切で別に談話もせねば夫人の傍へゑ寄らず其儘に分れて仕舞た、所ゞ虫が知らせとでも云ふ者ゑ僕は何とあゑ心の底で此夫人こそ我が生涯を誤らせる者ゑと思ッた夫で僕ハ宴會の濟ゞ跡で父ゑ向ひアの夫人ハ何と無ゑ私しの身を誤らせる樣ゑ氣が仕まゑと打明けて話した所ろ、父ハ笑ッて馬鹿を云ふナ其方ゞ後々女に身を誤まる樣な事が有ても決して手アの夫人と何ふ斯ふゑる拵と云ふ事の有る筈ゞ無いと斯云ッゑ此時僕はタッゑ廿歳で婦



人は廿六歳ゆゑ考へて見れゝ父ゞ云ふ通り僕と夫人と後々懇意にあると云ふ筈ゞ無いので自分あゞらも詰らぬ事を考へゐるものだと思ッた夫でも何ふ云ものか其後夫人の面影ゝ僕の眼の中に殘つて忘れる暇が無く、其中に僕の家と黒戸家とは仲裁の甲斐もなく、再び仲を違へ、舊時の通り絶交同様と爲た、或時の事僕ゝ巴里の或る紳士が開きたる夜會に招かれ其席へ連なッゐところ不圖見れば黒戸夫人も其席の隅の方に唯一人腰を掛て居た、僕ゞ夫人の顔を見るや一緒ゐ夫人も僕の顔を見たから僕ゝ恐ろしい中にも何と無く懇しい氣ゞして其傍ゑ進んで行た、夫人ゝ意外にも僕を自分の横手へ腰掛をせて呉たので其夜ゝ夜會の終るまで夫人と共に種々の話ゐをして居ゞが其時夫人の云ふには毎年夏にあれば所天の許を得て巴里へ出來り其里許なる田澤家にて一月つゞ逗留し其上て春邊村へ歸るとの事で有ゞ、併し此夜ゝ此儘で分れたが是からと云ふ者は夫人の事を忘るゞ暇なく寐ては夢醒てゝ現と云ふ程にまで戀慕ふ事と爲た、夫でも夫人は貞操の名譽高き方ゆゑ僕と我身で我が身ゐ意見して再たび夫人にゝ面會すまじ面會をへせねゝ忘れるゞらうと心に誓しんで居ゞけれど誠に緑ゝ異な者て此より一週間ほども經て、或る火曜日の事僕は用事が有て「メル

「ム」と云ふ所へ行き其の歸り停車場まで來ると早や夜の九時の汽車ぐ出掛けて居る所で有ざ、僕い急いで切符を買ひ汽車の所へ馳附けて一番近ひ一室へ飛乘て見ると此室に黒戸夫人か乘て居た、折から此室にい夫人の外に乘客が無い故、僕は恐々あがら夫人の向いみ坐を占め話を仕掛しに夫人も更に僕を嫌ふ樣子無く妾は巴里に逗留して居る中い毎火曜日と土曜日に屹度本天村と云ふ所の知人の家に行き必ず九時ね汽車に乘て歸るといふ事を僕に話た、僕は之を聞き心の中で次の土曜日の夜九時に此氣車へ乘りをへそをば必ず夫人に逢ふ事か出來ると思ひ非常に喜んた、夫で次の土曜日には用事は無けれど故々停車場まで行き此氣車ゑ乘込ざか、是そ僕が身の運の盡き、何ふした事か夫人も心に僕を愛し一度か二度、二度か三度と逢見る中到頭、割あき中と爲り互ひに深く契り初たのざー」此時まで默然として聞居ゑる代言員倉も今は聞捨られぞとや思ひけん突と立ッて「コレ星川君、僞りも好加減に仕給へ」といふを武保推留めて「イヤ僞りにもしろ約束通り仕舞まで靜かに聞き給へ聞て居れゞ自然と分るから」とて是をり又も言葉を繼き「是より婦人と逢引の場所をも拵へゑ此時僕は最ふ世界中に已ほど幸ひあ者は無い斯くまで名譽高き婦人ね心を我手に

入るとい何といふ仕合ぞと愛身をする迄に喜んざ今更ら思へば愚の至りを、之か則ち腐れ緣とやらいふ者で終に命を捨てねば切る事の出來ぬ仲と爲つて來た、併し夫人も眞實に僕を愛した者と見へ其心の奥底ゑ包んで居る事も僕みい殘らを打明けた、君も知て居る通り夫人と黒戸伯とは其年か三十近くを違ふのに夫人か厭あ顏もせを伯爵ね妻と爲たのい實に不思議たと世間で言囃したれど是にい深い譯の有る事で先つ其譯を話さねい夫人か僕を愛し初た筋道も分らない、全躰夫人の父君田澤侯爵といふは非常ね金持と世人に信しられて居ゑれを之か大の間違いで成る程當時い金持て有た夫人ゑ十五六の時より父君い或る山師の手に掛り內々相場に手を出して殆と其身代を耗り盡し夫人か廿才の頃にい身代限りをせねば追附ぬ程にあつた、此時黒戸伯ゃ夫人を見初めて之を我妻に呉れゝば田澤家の身代を器直し其家名を汚さぬ樣に救つて遣ると掛合つゑ、田澤侯爵い家名ね大事に思ふゃら餘儀なを其事を夫人に話すと夫人と黒戸伯か自分とり非常に年上あるを見て死でも其妻になるは厭たと思つたけれど何しろ家名には替られぞと潔よく承知して終に伯爵の妻に成たのだ、夫でも若し此內幕か世間へ洩れ田澤侯爵は金の爲に其娘を賣ゑなをゑ云はれては恥の

土の辱と爲る故人の疑ひを晴す爲に夫人ハ非常な持參金で黒戸伯に嫁入すると世間へ廣く言觸らしたれど、此持參金と云ふを則ち其實は黒戸伯の懐から出して遣たのだ、夫で夫人が僕にいふハ、妾は金の爲に肉躰だけを伯爵に買れゐゆゑ飽くまでも其金ざけの幸福を伯に與へ伯を歡ばせねばあらぬ其代り心ハ金で賣る事は出來ぬ故妾は心にて他人を愛しても罪とはならぬ唯さ伯ゐハ上部の愛情を賣れば好し、上部の愛情にて伯は充分滿足し心に充分の歡ひを感ずる故之さけ以て妾か伯への務めは住む上部の愛ハ既に伯爵ゐ買取られし故他人に與へる事出來されど心の愛ハ未だ買取られぬ故妾と御身に與ふるなりと斯云ふさ故僕は夢中にあつて其言葉に感心し實に夫人こそ此上も無き賢女たと思つて居たー」と言來りて一息發きさり

赤人の辻（原名、レッド、メンス、クロス）

一息發きて武保は又言葉を嗣ぎ「眞倉君、君は虛と思ふかも知れぬど黒戸夫人は實ゐ用心深く又實に名譽を大事ゐする女で僕と密會ふやにも其名譽を汚さる樣非常に用心をした、尤も此年の夏は僕と分れの惜さに五十日ほど巴里に逗留したが初めは定めど卅日ゆゑ黒戸伯が其逗留の長さを怪しみ早く歸らねば連れに行くとの手紙を寄越した、其時夫人は分れに臨み（夫）武保を妾ハ他人に此事を疑はれて萬一にも妾の名譽を落さん事を恐るゝあら名譽の爲とあらば妾の命ハ云ふまでも無く御身の命も最愛の娘子の命も併せて捨るとも厭ひはせじ妾今一日たりとも御身と共に巴里に在りては妾の名譽ゐ拘はる故今は是にて分れを告げん去れと妾は一月の間御身を見ずに過し得ぎ今日ハ是れ十月十二日あれば十一月十二日にハ重ねて御身に忍逢ハん十二日の午後三時星川村の後の谷ある赤人の辻まで忍來らば妾は其所にて御身を待ん十二日午後三時を忘るゝなー、と斯う約束を定めて分れた此時星川村ゑ別莊ハ僕の叔父何某に預て有たか僕と約束通り十一月十一日の午後に別莊へ行き翌十二日の三時頃赤人の辻へ忍びて行さ、此辻は谷の底に有て往來ゑ稀ゐ所で忍逢ふには屈强の場所だが此日は生憎の大雪大風で僕は其道に迷ひヤッとの事で三時半頃に其所へ着さ、着て見るや夫人ハ雪と風をも厭はず大木の影ゐ佇立みて僕の來るのを待兼て居さ、僕の顏を見るとりも早く（夫）武保御身ハ何時別莊へ來りしぞ、ーと問ふ故（余）昨日來たと答へた所夫人は又問ふ、何と言設て來りしぞ、（余）いや叔父ゑ許へ來るに何を言譯は入らぬ故何

とも言はさに參りました(夫)でも嘸とは遊び此寒さに何の言實も無く卒爾に別莊へ來てい他人に怪まれん、(余)左樣サ怪しまれぬとも限らず、ー夫人は此時心配げある顏色で(夫)御身は兼て此辻への道を知り給ひしか(余)イヤ知らぬ故尋ねしあり(夫)誰に(余)別莊の番人の悴れ道次と云ふ者に、ー夫人い益々心配の色を現はし(夫)御身は何とて斯までも無用心なるや何の言譯をも設けず別莊に來り又何の言譯をも設けず道を問ひて此怪しき所に來りては他人に怪まるゝことを知らざるか若し御身の樣子を怪しみ跡を踪け來りて此密會を立聞する者あらば何とをるや(余)イヤ其樣な事は大丈夫ー(夫)否とよ大丈夫と思ふ勿れ妾は世に恐ろしき者無けれども唯名譽の汚れを恐る、妾は戀人を愛する故に御身と忍び逢ふを樂しめど唯だ他人に疑はるゝを恐る、妾は所天黑戶伯に見認めらるゝよりは他人に疑はるゝを恐るゝあり所天に見咎られあば唯所天の心を怒らしむるのみにて他人は知らぬ故名譽には障らねど一旦他人の目に留らば妾が所天は世の物笑と爲らん、妾か名譽は消え果あん、妾い御身を愛すれど名譽ふは替へ難し妾か名譽の爲ふは御身の命を殺さ御身の名譽を奪ふとも妾は悲ます、然り武保よ妾は名譽ゝ爲には唇頭に笑を含んて人をも殺さん眼に涙ひ我

浮へて我身をも亡さん御身此事を忘るゝ勿れ、ーと充分の決心を見せて言たから僕か返事を仕樣と思ふ時夫人は又も言葉を發し(夫)武保よ御身は言譯を作る爲め別莊に歸り叔父に向ひ借金を濟す爲めとて大金を無心せよ左それば叔父は御身を咎むれど御身が突然巴里より來りしを怪まざらん、此上茲に一刻にても止まりては妾か名譽益ゝ危し又逢ん武保やーと言捨て早や去んとする故僕は驚きて(余)オヤ是れ切りで分れますか(夫)否とを今茲ふ永居ずるい爲惡し、御身は大金を借り受けて速かに巴里に歸れ妾跡より手紙を以て逢見るの日を知らせん、ーと言置きて歸つた故僕も粗ゝに莊別へ皈り夫人に言附られた通り叔父に向ひ大金の無心を吹掛けた所叔父い笑つてハヽア此寒いのに別莊へ來る程さら尋常では有る舞と思つたら又例の無心らと云つて怪しみもせす貸て呉れた、其許で僕は益ゝ夫人の用心ふ感心しア、實に夫人は用心の神樣たと心の中て思つたゝサ夫をり巴里へ皈ると直に夫人から手紙ら届いたら其中には近々「ローチフオート」に軍艦の進水式ら有るから其時ふ逢んと書て有た之に引續き何本ら手紙ら來たか其中にい名譽の爲に用心せよと云ふ事を操返して書て有た、所か此手紙ふ一つ不思議ふ事といふは其手紙の隅の方へ一々番號を附け

一番二番と記して在た僕も變に思つたから其次夫人に逢た時に番號の事を問ふた所女ら我戀人に手紙を遣るふは何本出したと云ふ事を覺へて居ねはならぬ故夫で心覺へに番號を附るのたと云ふから、僕は錠々其用心に感心しさ、頓て進水式の時と爲り無事に密會を仕果せさ此時相談して僕ハ林町へ一ッ家を買入れて其後ハ此家を密會の場所と定めたー」と述へ來りて又も一息發けば此時具倉は言葉を出し「ナニ家を買たとナ　武「アヽ別莊を買たのサ　具「好々夫では一ッ証據か出來たー其別莊は未だ君ら所持して居るさらうナ　武「ムヽ持て居る　具「では定めし確かな讓受狀文か有るだらう」武保は最失望の體ふて「實に何ふも、是ら僕れ運の盡と見へる、此別莊に就ても又一ッ信する事の出來ぬ樣あ奇談か有る」具倉は之にて又も疑ひの眉を顰め何んさ而白きも無い、又奇談ら有ると云ふのか　武「先ア靜らに聞きたまへ」とて猶も言續けんと身揣へたり

第十九章

武「林町に別莊を買入るく頃僕は尙ぞ漸と丁年ふ達したばかりで有ッた、斯く年の若い者ら別莊を買ふあとと云ッては他人に怪しまれ殊には嚴父ふ叱られる心配が有ッた故兼て懇意あ英國人九瀨と云ふ者に賴み一切其名前で買て貰ッた故表向僕の所有と云ふ事ハ出來ぬ併し念の爲め九瀨から返り證文を取て置、さ之さへ見をば名前ハ九瀨でも其實僕ら買入れた事が分ッて居る」此言葉を聞き具倉ハ漸く眉を開き「フム返り證文さ迄有れば一ッの證據に成る、シテ其證文は」武保は殆ど困し果たる顏相にて「サ夫が僕の運の盡と云ふのさ返證文ハ取たけれと夫を父の家へ持て行く譯ふハ行かぬ餘所あく其別莊の一室に在る引出しへ入れて置た所が去年の戰爭に件の別莊ら兵隊の屯所と爲たので跡方も無く失紛したのサー御存じの通り僕ハ此戰爭に星川村の志願兵を引連れて戰場に出た騷ぎ故全く證文あとの事は忘れて居た「具倉は又も疑ひを眉を顰め「でハ其九瀨と云英人ハ　武「戰爭の初まると共に佛國を出立し何所へか行つて仕舞た、尤も僕ハ九瀨の友達が二人ら英國に居る事を知て居る故に先日手紙を出して彼の居所を問合せた所一人の返事にハ九瀨は死た樣子だと云ひ一人は彼れら南洋の濠州へ行さで有ふと云ッて寄越した、孰れにしても此人を探し出す事は出來ぬ　具「夫でハ其別莊は今でハ君の物と云ふ証據は無のか　武「一ッも無いのさ　具「近所の人に問合せば知る者も有ぞろうか　武「夫も了あい、成る程近所の者や出入商人

の中には僕を見る者ゝ有たらうが僕は自分の性名を隠し自ら英國人丸瀬と名乗て住ッて居たから夫も仕方ゞ無い、此別莊に星川武保と云ふ者ゞ住で居たかと問へば人々は否や丸瀬と云ふ英人が住で居たと答へるに極ッて居る」具倉は少し立腹の色を現ゝし「夫じやァ君の言ふ事は一ッも証據が無いでゝ無いゝ、証據れ無い事あら何とでも言ゝれるワ 武「サ証據ゞ無いから僕ゞ迎の盡と云ふのゞ併し証據が無くても事實は少しも相違ない 具「シて其別莊へ黒戸夫人ゝ幾度も行たのかへ 武「夫りや最ふ三年の間ゞから五十遍以上も來たれサ 具「夫では近所ゟ夫人を見る者が有るゞらふ 武「所ゞ無いのだ、夫人は前にも言ふ通り非常に用心深い女で充分用心して出入したから其顔を見た者は決して無い 具「近所れ人ゞ知らぬとするも内にゝ下女ゞ下男か使ッて居たゞらう 武「下女ゝ使ッて居た、英國の女を一併し此下女は一度も夫人を見た事ゞ無い 具「其樣な筈ゞ有る者か 武「イヤ夫人の來るのは前以て分ッて居るから、毎時でも來る前にゝ下女ゟ用事を言附け一晝夜も掛る所へ使ひに遣た夫で夫人は一度二階へ上れば歸る時までは下へ卸ッと無しで有ッたもの 具「でも下女あとと云ふ者は隠す程猶ほ見度る者也る内々隠見でも仕た事が有るかも知れぬ、兎に角其下女に逢て問糺して見よう 武「所ゞ其下女も軍さの初まる時英國へ歸ッて今は何所に居るか分らぬ 具「君の下僕案藏ゝ此事を知らぬのか 武「イヤ僕ゞ案藏を連れて狩に行く途中少々怪我をして一緒に此別莊へ立寄ッた事は有れど唯だ別莊を見たばかりで其外のあとは一切知らぬ筈だ 具「夫れでは君ゞ夫人と密會あたと云ふ証據は塵一ッも無いのゞ子 武「元は、無ふと云ふ譯でも無かッたのゞ、婦人が來るたびに遊び道具や小い化粧の品物あとを持て來て有るゞ夫も軍で 具「悉皆紛失しゐと云ふのゞらう 武「全く其通りゞ 具「極ッて居るア一何でも軍さ、軍とさへ云へば言譯が立つかと思ッて」 武保は何と云ひても具倉ゞ少しゞに信ぜる色なきを見て殆ど顔ゟ朱を注ぐまでに怒りしかども自ら胸を撫擦して「君、爾う疑ふゝ無理ゞよ、此樣な事に成ふとゝ夢ゟも知らあんだ故証據物を蓄ゝへて置くなどと云ふ氣は少しも起らなんゞのサ誰ゞッて君、互ひに心の奥底まで打明けて居る同士で敵味方に成ふとは思はるゝから子ヱ」具倉は最早や聞飽きゝと云ふが如き面持にて「最ふ其樣な事ゞ好から早く言ふゞけの事を言て仕舞給へ」武保は最情無き聲にて、「君爾まで疑ふれは餘り痛いよ全体君は如何それば信じるのだ最一層詳しく云ふか 具「ナニ詳しい

には及ばぬ唯一ッ証據を擧げ給へ、武「サ其證據が無から脈序を述るのゞ今少し聞給へ、此翌年星川の別莊を預る僕の叔父が死ゞので別莊へ僕一人の持物と爲り其外に叔父の非常な財産まで殘らず僕の手に入たので是よりして僕は何時々々でも他人ゐ怪まれず別莊へ行く事が出來、益々密會が便利に成た、此後は幾度と數の知れぬ程有たけれども段々と忍ぶ事が巧者になり又星川村と春邊村の間に在る隱れ場所は殘ず知た故誰にも知らざる自由に忍び合ひ夫に別れ際ゐは必ず其次に密會する場所と其日限時刻とを約束した、一旦約束する上は其場所が何れ程遠からふが又の日何れほど天氣が惡くても何の樣な用事が有ッても必ず首尾して忍び逢た、夫ゞから僕が身へ今まで旅行ばかり仕て今日巴里に居るらと思へば明日は忽ち星川村へ行き明後日へ又五里も離れた田舍へ行くと云ふ具合に始終腰が据らぬに居るのだ、併し又此の樣に互ひに無理な首尾をするのゞ益々面白い者で僕は最ふ夢中の上にも夢中ゐあり世の中ゐ本統の黑戸夫人を知ッて居るへ已一人かと思へば其嬉しさは中々口で云ふ樣な者でへ無い殊に夫人の名譽は益々高く慈善會の會頭ゐ撰ばをるし佛國第一等の美人貞女とて繪入新聞にへ其肖像を掲げられする者ゞから其度に僕の迷ひは深くなるばかりサ、斯くまで名譽ある夫人が僕一人を斯くまで愛するか又斯くまで密會しながら斯までも名譽を高くするかと思へば其度に夫人の智慧を感心し其度に我身の仕合せを祝し何とも譬へ樣の無いまでに幸福ゐ思ッて居たが一併し眞倉君、此の樣な不義の幸福も決して永く續く者で無い終にと二人の仲を違へねはならぬまとに成て來た―」と云ひ差して嘆息したり

嘆息しつゝ武保と言葉を進め「實に眞倉君、不義の樂みへ續かぬ者、僕へ全く黑戸夫人の持物と爲り我身の自由を失ッて我身の性根までも腐らせゞ、朝から晩まで晩から朝まで唯夫人の爲を思ふばかりで我身の仕事へ少しも手ゐ就ず我身の大事は心ゐも留らず、夫人が何所其所まで來ゐと云へば夢中に成て飛で行き歸をと云へば又夢中にあり其言葉に浮されて飛で歸る、心庭から夫人の愛に醉たといふ者で前後も無く正体も無く、結り我身で我身で無かッるのゞ、併し醉た者も終には醒る道理で早晩か我が活智の無きに氣が附て斯までも一夫人の奴隷と爲るとは男子の恥づ可き事ゞと思ひ初めゞが、是時らら何ふかして我身体ゞけも自由にしるい、一日でも夫人と手を切り自由氣儘に暮したあら嘸ゞ晴々をるゞら

うや目が醒て見れば次第ゐ夫人の愛情が甚だ厚くあッさ、然し夫でも尙ぞ夫人に斯と打明ける事は出來ず甚だあぢらも相樂らぞ奴隷に成て居る中或時僕の友人ぢ軍艦ユ乘り一年半か二年の間世界を回國すると云ッさらら是こそ願ても無ゐ好ゐ途端ゆゑ此船に乘込んで外國ゑ行て仕まゑば一年でも二年でも其間ざけは我身体が自由にあるだらうと思ひ内々通傳を求めて其軍艦ゑ乘込むばかりゐ迎ひを附けた、其處で夫人ゐ逢ひ我心を鬼ゐしてヤッと其事を話しいしさが情け無い、夫人が一言。笑談をお言で無いを。と言ッたばかりで張詰た心も寛み無理に笑顔拵作り。實は貴女の氣を引て見ましたのサ。と心ゐも無い事を言て漸を夫人ゐ誤た、之が爲先僕と軍艦ゑ三百圓の違約金を取れたが其後又も夫人に逢ッた時夫人は僕に向ひ。武保お前若し私と手を切るあぞれ了見を起したら其儘には置ぬから爾思ッてお在。と言れたが此言葉ハ何と無く僕の心ゑ恐れを吹込んだと見へ其當坐は食も進まぬ程で有ッた其時の夫人の顏ハ沈着さ中にて凄みを帶び禁元ぢら寒氣ぢをる程で今まで歷々と目に留ッて居る、此時からして益々夫人が嫌ひに成り寐ても起ても手を切りたいと思ふ一心で在ッたが、能を考へ見れば、夫人ハ顏と云ひ心と云ひ世間の人より百倍も勝れて居て其智慧と度胸の奥底ぢ分らぬ故僕ハ段々と恐しく成て來さ、此頃丁度僕の母ぢ嫁を貰ッて遣ると進めたぢら是あそ好き口實と思ひ此次夫人に逢さ時。母ぢ是々云ひますがと。話た所ろ夫人ハ死人の樣ゐ青くあり僕が心の底の底までを覗んとする樣に凄い眼で僕ぢ顏をジーッと見詰め。夫でハお前婚禮ををる積りあのか〳〵。と云ッた時の恐ろしさ、僕は漸う笑ひに紛らし。ナニ私しと何の積りも有りませんーぢ併し、母のいふ事ハ何時まで逆ふ譯にも行ぞ。とて曖昧に頭を掻た、婦人は沿着て。お前は夫で濟むと思ふか(余)何ふ致して一貴方の事は我身を忘るゝまでに思ひましても貴女と私とは一緒に成れません貴方ハ既に緣附て一(夫)夫ではお前今まで私しを玩弄にしたのだ子、お前ぢ妻を持ば私の身は何あるとお思ひぢ(余)貴女にハ所天を有り子供も有り一(夫)左樣サ小供も所天もあるから春邊村へ歸れとおいひだらう、爾ハ了あいを、所天が有てを愛情で固た所天で無いからお前と斯した事にあッさの者を、夫に子供とても米の娘はお前の一胤で一。僕ハ此時一生懸命の弄紙を絞り(余)でを貴女何ふしても婚禮せぬ譯に行ぬかも知れません若し爾あれば何ふ爲います。夫人は恐しき程沈着て(夫)何ふも仕あいよ、今までお前か爲私に送ッた一切の手

紙を殘らず所天黒戸伯爵に渡し此始末を打明けるだけサ。此時の夫人の言葉ハ充分其決心を現し少しも嘘僞りとは思へぬ故僕ハ頭から冷水を浴せられた樣に身体が震へ上る程驚いたれど是が大事の所ぞと漸くに氣を落附け(余)又御笑談を仰有やッてサ。と其場を繕ひんとしたれど中々僕に纏めらをる夫人で無い(夫)笑談と思ッてハ後悔するよ、世間の女ハ密男に捨られてハ所天に知ては成ぬとて泣寢入ふ濟すけれど私ハ爾で無よ、初から所天を恐ろしいとは思はぬ末の末まで考へて若し棄られる時ハ其恨みを返す事まで極て置て仕る事たから決して泣寐入には濟しません、ハイお前ハ愈々婚禮と云ふ晩に今までの事を黒戸伯爵に打明けるよ、伯爵ハ左あきたに疳癪の強い方ゆゑ若し此事を知れはお前を其儘にハ仕て置まい、又伯爵か萬一にも黙ッて見過せは私しは外に思案かある、お前の身を生涯世間へ出る事の出來ぬ樣に亡します、先日お前が軍艦へ乘ると云た時ふ私しは最ふ其心を悟ッる故益々其工夫を定て有る、女に怨の有る者か無いものか能く覺へてお在で」と落着濟して言ふ所を聞けは何ふしてを一時僕を威を爲めの拵へ事とは思はれぬ初めて逢た時から末れ末までも用心し殘らを仕組で有ッたとしか思はれぬ故僕ハ最ふ魂魄か脱て出るかと思ふ程且恐れ且つ驚き、言んとしても舌まで釣上ッて何の言葉も出ぞ徒だ良久か間身震はかりして居ると夫人は。夫で好かエ。と一言念を推して立んと仕る故僕は初めて正氣に歸り兎に角も先づ此場を言延さん者と夫人の裳を引止めて(余)先、先、お待あさい先暫くお待ちを一貴女か爾う御立腹あさる筈ハ有ません、何も私しが自分に好んで女房を貰ふと云ふでは無し唯母ゐ貰ッては何ふたらうと云たゞけです、夫も貰へと云たでは無く唯ゞ母の心で一寸想像した丈ゆゑ詰り跡形も無い事です、夫を御立腹あすッては困ります。と拜まぬはかりに言譯したので夫人ハ漸く坐に直り疑ひの眼にて充分に僕を檢め(夫)爾かエ唯ゞ阿母さんか想像したはかりで全く跡形は無のかエ(余)跡形なとハ有りやア仕ません(夫)アヽ夫では好しお前のいふ事だゐら豈夫虚も有るまい、今の事は此場切りで取消さうが下でも最ふ斯ふ打明けたからは萬一ゝ時にハ尋常ハ置ぬから爾思ッてお在よ。とて是でサッはり機嫌を直し不斷の通りに泥風も無く分れたゞ跡で考へて見れと僕ハ最ふ自分の活智あさふ愛想が嬉き。エヽ活智無し、痴頓もの、畜生。と我身で我身を罵ッゐ罵しる内にも夫人か言ッた事の恐ろしをは消へなんた」と云ひ來りて額の汗を拭いしゞ此時も尚ほ眞倉氏ハ宛も

石もて彫し肖像の如く何の感じもなく聞居さり

第二十章

武保は眞倉が少しも我言葉に感せぬ樣子を見て益々氣を燥ち言葉に一入の力を込め「僕い大抵の事は恐をねど夫人の言葉ばかりに恐しかッた、何故と云ふに日頃用心の深ゐさけ何事でも前以て後まで充分に考へた上で無ければ迂闊に口へは出をぞ其代り一旦口へ出した事は何ふしても仕果せる氣質ゆゑ唯の虛喝と聞流す譯に行かぬ、其で色々考へて最斯うなッた上は迚も尋常に手段切る事に出來ぬから此上は唯だ成る可く密會を少くし次第に夫人が僕の事を忘れるのを待つより外は無いと思ッた、此頃母に再び僕に婚禮の事を進めたけれども僕は夫人の方が綺麗に治まるまでに到底も女房をと持つ事は出來ぬと斷念し母には夫と無く斷ッた、所が此時丁度昨年の軍が初ッた故僕に最ふ戰場にでも出れば切て其間ざけも夫人に傍を離れる事が出來ると思ひ實は逃る樣な氣にあッて戰に出さ、出てからも生て歸ッて再び夫人に附纏はれるよりは一層討死でもして人に惜まれた方が增かも知れぬと思ふ位の心が在たから戰爭が仕舞ッた後までも猶歸らぬにグズグズ仕て居さ、が不思議あのは黑戸夫人サ夫人に僕が戰爭に出てから一度も手紙を寄越さぬから僕も次第に安心を初め偖は暫く逢見ぬ中に少しは我事を忘れ掛たか是では密に歸ても差支へ有る樣いと嬉しさ半分恐しさ半分で歸ッて來た、スルと間も無く山堂家で宴會が有り僕も招かれて行て見ると暫く見ぬ間に錦孃が見違へる程成長し一廉の令孃と成て居た、殊に其樣子を見れば何とおく僕を愛する樣にも見へた故僕に心の中でアノ夫人は代に此令孃が我物で有たら天下晴れて夫婦と云ふ事も出來定めて嬉しい事で有ふと斯ふ思ッた、併し此時未だ夫人の云た恐しい言葉が耳の底に其儘存ッて居る故此錦孃を妻に仕ようとは思はず若し妻にして夫人の怨み益々重あり、身一人が錦孃にまで迷惑を掛けては成らぬと思ふ殊更らお孃とは口も利かぬ樣に仕て居た、此後一月二月經たけれど夫人からに何の便りも無いから偖は彌々我事を忘れたかと少し氣の弛む中、何時の間にか母と直家老人が相談して錦孃と僕との夫婦約束を結んだと云ふ者だ、此約束が調ッたと聞た時僕は何とあく嬉しくも有たけれど嬉しをそりに先づ恐をが出て、夫人に己を忘れ掛た樣子さけれど爾でも無ば若し先日の威しを實行されては困るを思ッたから、兎に角直家老人に逢ひ一切の事を打明けて夫人が

威しの言葉まで殘らず白狀して置らねばなるまい白狀して其上で老人ら夫でもと承諾さ面すれば最ふ何の樣な事ら有ても大丈夫だと斯立派に決心は仕たが扨實際には思通り行ぬ者で、毎日今日は言ふと胸を定て山堂家面行けれど老人の正直な顏を見と言葉が舌の先まで來も凍ッて仕舞ッイ外の話を仕て歸るエ〻今日は最ふ仕方が無い明日に仕樣と思ひ定て又翌日行ば翌日ハ前の日よりも一層言出悪い、斯通り今日は〳〵と思ッて毎日行く中に終に後れて仕舞い今とあッては最ふ言ふ事ら出來ぬと思ふ事に成ッさ、併し夫でも未ら幾分か婦人の事か恐ろしい故何と無く氣が濟まぬ、エ〻最ふ明日と云ふ明日ハ何ふあッても云はぬ譯ゴは行かぬ何れ程云惡くても言て仕舞ふと充分に奮發を定めたのら先月の末頃の事、サア明日は出直して彌々と思ひ其日は少し早く山堂家ら歸ッたら其歸り道で、兼て我家の菩提寺としてある武市村の和尚に逢た、和尚ら少し話が有るから是非武市村まで寄て呉れと云ふ故斷りも出來ず其儘一緒に武市村へ廻ッたら、ア・今思ッテもゾッとそるが、是が僕の誤りで有ッた、順て和尚ゼ話しも濟み急いで我家へ歸り掛けさところ七八町來さと思ふ頃道端の叢の中で女の姿ら散りと見へさ、是時既に日は暮て充分には分らぬけれど

其姿ゞ僕の心にグッと磨へた、サア大變だ夫人が茲で待受て居たかと思へば恐しさが總身に滿ち見ぬ振をして足を早め二三間通り過ると背後から例の凄い樣ゐ落着た聲で武保よと呼留められた、此聲に僕ゞ足は宛ら大地面釘附されさる如く其儘立すくんで身動も出來ぬ、其所へ夫人ハ靜ゐ進み寄り手も無く僕を藪の影へ連れて行き毎時に似合はぬ其聲を振はせて(夫)武保全く阿母さんの想像ばかりでハ無ッた子、終ユ錦孃と將婚の披露をしたね、僕は漸く口の中にて。ハイ!(夫)ア、夫で澤山だ、能く御覽を茲は丁度去年中密會した森續きだ、草も木も去年の儘で居るけれどお前の心が變ッては仕方が無い、錦孃も此私ゑ同じくお前を愛するけれゞ孃の愛は今より末榮ゑ此方の愛は昔の夢と爲り果ゑ、孃ハ其喜び に堪へ兼て表向に反露をし此方は罪か何ぞの樣に悲みを隱して人目を忍ぶ、是も浮世だわ ら仕方ゞ無いゞお前と孃の樂さが增すだけに私の耻と悲みゞ殖るから爾お思ひナ。と最恨 ゑし氣ゐ述る中玉の如き涙が長き瞼毛を傳ひてホロ〳〵と翻れた夫人の涙は實に是が初ゑ てだ(夫)武保私か是ゞら耻と悲みに沈むを見てお前は孃と二人で樂しく暮せるかへ(余)其 樣に仰しやるな、貴女のお心か解けぬ中ハ何ふして私しか樂しく思ひませう!でゞが子、何の樣な悲みでも月日ゞ經てハ湖らぎます、其中に私しの事は忘れまゝ(夫)爾さ男の心ては忘をても女ハ生涯忘れません月日が經つほゞ悲さが真ります!シテお前最ふ婚禮の日を定めさかへ(余)イエ未だ!貴女に逢さ上で定ゑをうと思ひまして!先頃貴女の仰しやッた恐ろしいお言葉も有りまゝから(夫)オヤお前は私しの威しさのゞ夫程恐いのかへ(余)イエ何、恐ゐと云ふ譚は有りません今までの通り相變らず貴女をお慕ひ申ゞ此私し茂ばお恨ゑあさる筈も有ませず!アの樣あとを仰有ッてから最ふ久しく立ましゑもの(夫)爾ゞ本統ユ久しく經たねエ私しも最ふアの樣ゐ心は捨て仕舞ゑ、武保宜からお前錦孃ゞ婚禮なさい私は最ふ斷念めて手を切ッて上げる、少しもお前を恨まぬゝら!。意外千萬にも此打解ゑる手切れの許し言葉を聞き飛立つ程に嬉しく思ひ僕は我知らゞ夫人の手を取り、ア、有難い此御信切ハ忘れません、と云ひながら吾唇頭を接へて吸んとしさ所ろ、夫人ハ周章て手を引き(夫)でも猶ゞ一度ハ何ふしても逢ねばゐ癪ぬ、お前今まで私から上げゑ手紙をお持だろう(余)ハイ(夫)其手紙を殘らゞ返してお呉れ、左樣さ此次の木曜日ゝ夜九時前ゐ春邊村まで持て來てお呉れゐ、私しハ我家の裏口まで出て待て居るゝら!(余)問逆あく持て上り

ませう。と斯ふ堅く約束して分れさう僕ハ數年來の重荷を初めて卸し實ニ生返ッさ心地ら
したイヤサ今から思へば其重荷ハ未ざ卸て居あかッたのさー
（武保ら言葉の續き）「黒戸夫人が綺麗に手を切て遣ると言た時の嬉しさ、僕ハ天にも地に
も無ム樣に喜んで猶ほ樣々と慰めの言葉を吐て分をたら後で考へると未ざ氣に掛る事か有
る、と云ふのハ手紙を返そ約束サ、黒戸家の裏口へ忍び行けば若し夫人ら此事我伯爵に知
らせ伯爵を物影へ隠れさせて置きはせぬや若しや其外に意外の謀事でも設けて僕を窘めは
せぬかと種々心にハ掛ッたけれど何しろ手を切ッて呉れた嬉しさに浮されて眞逆其樣な事
も有まいと心ら弛んだ、サア心ら弱んで見れば今までの事を直家老人に打明けるふも及ば
ぜ是から錦嬢は天下晴れての我物で誰れに氣兼をするふを及ばぬ吾ながら仕合せ者さと勇
氣の高く打つ程喜んざが、頓て約束の木曜日と成ッた、サア今夜は彌々手紙を返しに行か
ねばあらぬかと思へば一日氣持ら惡かッたが夫でも堅く約束したものを返さぬ譯にハ行か
ず若し此手紙を返さぬ時には折角治まりた夫人の心を復ま攪亂そハ必然ゆゑ否々あらぬ
仕方なく行く事にをッた、君の知る通り僕は平生毎も鉄砲を持つのら癖で特に吾心に怖氣

の附て居る時は鐵砲ほど心強い者は無い、其で狩の裝束に鐵砲を持ち宵の八時頃に家を出
掛けた、不斷あら無論大道を行く所ざけれど心に秘密が有ッて何と無く人ふ見られるを好
まぬ故、特と林の中を潜りた所ろ往にも歸りにも意外ゑ奴ふ逢て驚いた、頓て九時頃漸や
く黒戸家の裏口へ着くと夫人ハ待て居たと見へ直樣傍へ來た、例ヒ落附たる樣とハ全く代
り最と氣遣しげな早口で（夫）私しは一時間を待て居た（余）イヤ最ふ道ら惡くて一時に伯爵
は今御在宅ですか（夫）ア、今夜は持病の癪癇質で宵から寐て居るゆゑ大丈夫ー夫に季の娘
ら病氣で私は其伽を仕て居たのだから誰も氣は附かぬー夫そりも私の手紙ハ（余）ハイ是で
ムます。と差出す一束を夫人ハ取て（夫）一切で廿四通ある筈だがー　と云むあら其番號
を檢め（夫）ヨシ〳〵一通も不足は無い、サアお前から寄越したのハ茲に在る　とて衣嚢よ
り同じく一纏めの手紙を取出たれど僕には渡さど（夫）之を一所に燒て仕舞ふ、今茲でーお
前寸燐をお待ざらう。余は大の喫煙者ゆゑ毎も寸燐を離した事と無けれど生憎此前夜山堂
家の坐敷の棚へ置忘れて來た故（余）イエ持て居ません。夫人は氣短かく（夫）夫に困る子エ
好々私しが家から持て來よう。と云ッつ早や行ふとしたが余と一刻も早く此用事を濟し度

い故(余)イヤ夫ゐは及びません火ハ私しが拵らへます。とて夫人を推留た、君も知て居だらう獵人ハ皆あ鉄砲で火を作るのゞ、其で僕ハ鉄砲から彈袋を取出し其中の彈丸を脱き火藥ばかりを砲へ結め其上へ紙を詰め、痛ひ音のせゐ様に其砲口を下に向け地へ接附けて一發打たけれど旨く行かあんだ故、今度ハ最一ッの砲で遣た所旨く火が移ッた、其で二人ハ木の根へ腰を掛け兩方の手紙を燒て仕舞た、夫人は其燃た跡の灰を見て悲げあ聲を出し(夫)五年の愛情も約束も唯一握の灰に爲て仕舞ふとハ一實に最ふー。と云ッて此跡は泣聲と爲つて分からなんだ、僕ハ最ふ長居しては何を言出すかも知れゐと思ひ(余)左樣さ不思議あものです子エ。と言捨て其の儘逃る樣に歸らふとした所ろ之れが益々夫人の氣に障ッたと見へ(夫)オヤお前は逃げ返るゐと私しが恐ろしいかエ(余)イヤサ長居して若し見咎られてはー。夫人は錐で拵む樣あ尖い聲で(夫)爾サお前ハ是から先に樂みの有る身だから其樣に恐ろしからうが私しは最ふお前に此世の望を奪れて何の樂しみも無い身もへ恐しい事あゞは知らあいよ。と言ふ中に益々怒りが募る樣子故、僕と宥めゝる積で(余)爾仰有る者じやア有りません斯ふ綺麗に手を切て下さると此上も無い功徳です此御恩ハ忘れません(夫)

此恩い忘れぬとエ、口先では何とお言ひでも後でい舌を出してお笑ざらう、ホンに思へば振捨られたー涙ー女はと結らぬ者い無いーお前初めから本統に私を愛する氣い無ッたのざ子(余)愛をる氣ど無くて何ふして今までの苦勞を致しませう(夫)でも私を外の女と見替へるでは無いか、アの錦嬢の爲に私を捨るでは無いか(余)イエサ爾思し召してい間違ひます私しが何と思ッてを貴方には主ど有ります私しの妻には成れません(夫)若し主が無ければ何ふするエー若し今私しが後家にでをなッてを自由の身躰に爲ればー。僕は外に答へる言葉ど無い故止を得ぞ(余)エ、貴方が若し自由の身あらば、ですかーエ、貴女ど若し自由の身で、夫ァ貴女、貴女ど自由の御身躰あら私しい貴女を妻とします子、夫人は此時宛を天に祈を捧ぐる如く兩の手を高く上げ當を忘れし聲を限りみ(夫)私しを妻にー爾と知れば早く其覺悟も有ざ者を、ア、神よ妾若し夙く此事を知りたらんみは自由の身と爲り寡女となり彼れど妻と爲りしもをー、神よ若し我所天伯爵あかりせば妾は自由の身にて在るをのをーー此恐しき智慧の今までも妾が心に浮ばざりしはーア、神よー、とて得も言はれぬ失望の祈りを初めたから僕い身體我始め我魂魄ど消るかと思ッた、貴倉君、女ど本統に失望し其失望の怨で夢中に成ゐほど恐しい者は無いよ、今若し此儘に置てい夫人は發狂をるかも知れぬ、イヤサ何の樣な事をするかも知れぬ故、僕い最ふ一生懸命にあり婦人を宥めた、其言葉は一々覺へぬけれど眞事虚事打雜て諫めもし慰じをし背を撫たり拜んざり有たけの言葉を盡したが漸う夫人は復に返り極々凄い冷たい笑を含んで其樣な事を言ふのを皆錦嬢の爲だらう私か若し自由の身躰あら今は綺麗に手を切ッて其代り一年も經ぬ中ゑ再びお前を手の中ゑ入れるけれどーイヤ最ふ何も言とぞに是で分れよう。と言ひて顔を負け其儘走る樣に我家へ這入ざ、僕は其跡に茫然として身躰へ根が卸りた樣に立在んで考へたが若しも今頃夫人は最ふ所天伯爵に向ひ今迄の事を打明て居いせぬか若し伯爵が此裏門ら跳出て來やア仕舞かを思へば長居も出來ぞ宛も機械の動く樣に我知らぞ鐵砲を整復しざら、何の異ッざ事も無い故初めて足を返して歸ッて來ざ、サ是ざけざから黒戸伯を狙撃したのい僕で無と云ふれざ、伯い僕の歸ッた跡で狙撃されざのだー」

第二十一章

長々と述べ來たる武保か申立も是にて漸ク終りたをば眞倉は靜かに問を發ま「シテ其時刻